地名研究会報

第 93 号　　平成１８年９月３日

鹿児島地名研究会

Ⅰ．第９２回例会　　平成１８年６月４日（日）　　於西郷南洲顕彰館研修室

（出会者）　青柳俊二・今村誠一・上野堯史・内山憲一・川野雄一・切通雅子・築地成郎・永坂芳彦・西田春人・浜田良知・繁昌正幸・肥後芳尚・肱岡修一郎・平田信芳・堀之口良吉・松浪由安（計１６名）

Ⅱ．大隅・薩摩の古代官道

1)研究経過　2)文献史料にもとづく追究

3)実地踏査の結果：小字「十三塚」や小字「大道」の位置　4)大人足形という地名

5)デスクワークでの新発見：①豊臣秀吉軍の島津征討後の帰還路　②大峯遺跡

③川内川の渡河地点　④分水嶺を辿る道　⑤稲積城問題　⑥駅間距離

〔問題となった地名および事項〕　特攻基地鹿児島、俊寛配流の道、未解明の烽火、牛尿院の所属、稲積城、嘉例川、神代三山陵、菱刈郡、隼人の言葉、蛇行剣と棟持柱の建物、国分寺の石造層塔

大隅・薩摩の古代官道

平田信芳

研究経過

平田　夕べおそくまで今日の資料の準備をしていましたら早くから用意していた大日本地名辞書のコピーを入れるのを忘れました。そのために後半の「大隅・薩摩の古代官道」に時間をかけて説明します。まず、私が永年取り組んで来た経過を、１）研究経過として掲げました。

平成４年度から平成９年度にかけて歴史の道調査委員会というのが県教委につくられ、都合８年間、歴史の道調査が行われました。毎回レポートの作成が義務づけられ、大隅・薩摩の古代道路にふれて来ました。その成果としてまとめられたものが「歴史の道調査報告書」です。県立図書館の郷土史コーナーで閲覧出来ます。

次に資料として配ってありますが、2003年に県埋文センターが出した「中原遺跡発掘調査報告書」の中に「古道を探る方法」というのを載せました。後程資料として利用しますが、読んで頂ければ参考になるだろうと思います。それが第２段階での成果になります。

３番目に最近「高篠遺跡」というのが出て来ました。今日の資料の中に古代駅路想定の地図がありますが、右下の所に高篠遺跡の位置を示してあります。官衙跡らしいものが出て来たので、埋文センターの方で色めき立ちました。担当者は大水駅跡ではないかと関心を持ったのです。そこで意見を求められた時

次のように話をしました。（地図を示しながらマグネット＝マークを置いて行く）此処が島津駅、大隅国府は此処になる。薩摩国府が此処になります。高篠遺跡は此処、蒲生駅はこの辺でしょう。蒲生駅の次に櫟野駅が置かれます。櫟野駅は此処：市比野になる。そして高篠遺跡では多くの墨書土器が出土しています。これらをどう考えるかということで、このようにマグネット＝マークを並べて説明したのです。島津駅から薩摩国府まで、大体一直線に配置されています。これは古代の官道：駅路と見てよいのではないか。これならば単純明快に理解出来ます。

薩摩国・大隅国の駅路がこのように一直線上に配置されて来ると、もう一つ薩摩郡内に田後駅がありますが、これも当然一直線上に乗って来なければならない。とすると、どの辺に田後駅を求めなければならないか。ＪＲ川内駅付近が有力候補地になる。川内駅近くに福昌寺が移っています。あの一帯は山裾に隈之城川が流れていますが、あの辺りに田後駅を求めるべきではないか。あの一帯は向田側にしても宮崎側にしても田圃が続きます。田圃の一番端ということで「田尻」の地名があったに違いないと想像出来ます。一直線上に駅家が出て来ることで、田後駅の存在をも高篠遺跡は浮かび上がらせた。それが埋蔵文化財センターで意見を求められた時の私の見解でした。高篠遺跡と大隅国府とのつながりも官道の可能性が高くなったとも云えます。

大隅国府の北側の方、こちらが手籠川の上流です。手籠川の古名は鼻面川です。手籠で土を運んで川の流れを変えたので手籠川という名を付けたのだろうと思います。上流は横市川沿いの道につながります。この道を通って俊寛たちが流されて来ました。この道を通って俊寛たちは「気色の森に着きたまふ」と長門本平家物語は記しています。

小園説では大隅大川原を大水駅にしたわけですが、埋文センターの担当者は両方を実際に歩いてみて、高篠遺跡の方が直線的だ、大隅大川原の方は回り道になるから大水駅の候補地としては不適当ではないかとの見解を持ったのです。

4.「古道を探す方法」は、既に配付してある地名研究会報89号にあります。89号を見てください。

5.去る２月20日から23日にかけて木下良氏が来て二人で溝辺台地を歩きました。その結果が今日配った人文地名：田と畑と園の巻31茶畑←茶園←土手茶になります。これが木下良氏と溝辺台地を歩いた成果です。４日間で大口・菱刈・横川・牧園・溝辺・隼人・国分を歩きました。最終日に溝辺台地を歩いたのです。歩いた道がこれになります。２万５千分１図に書き込みがしてあるもの。歩いた目的は人文地名：田と畑と園の巻31に書いてあります。

溝辺台地に着目したのは天承二年(1132)の「往古の大路宮坂麓の石躰に八幡の御名顕現す」という石清水文書の記事です。これが原因となって宇佐八幡と大隅正八幡の八幡本家争いになります。そこで、宇佐の神人たちがそれを確かめに来るのです。大隅正八幡に火を付けて逃げ帰るのですが、追手に討たれて14人中13人が斬り殺される。その13人を埋めた所が十三塚だとの伝承になります。火を付けた材料が干した大根の葉っぱだったので、その日は干し大根の葉っぱは食べてはならんとの言い伝えが溝辺に残ります。

そこで十三塚と呼ばれる所は、例の十三人が殺された所に違いないから豊前国から来た道の途中にその塚が造られたとの見当が付くわけです。十三塚という地名も昔の道と関係が深いことになる。そういう視点で十三塚原を歩いた次第です。

実際には登りませんでしたが、宮坂はこの地図の一番下の方になります。宮坂の麓には石體神社があり石體神社の前には「宮坂橋」も架かっています。古代の道は藪になって登れませんが、整理すれば昔の道の痕跡が出て来る可能性はあります。台地の上に出ると、西光寺川の水源の北側に小字大道(ﾀﾞｲﾄﾞｳ)があります。その北に小字大道添(ﾀﾞｲﾄﾞｳｿﾞｴ)がある。小字入道(ﾆｭｳﾄﾞｳ)は道に入るとしてもよいし、大道の文字が変化したとみることも出来ます。それに十三塚。これは隼人町側の小字です。南十三塚は溝辺町の小字になります、北と南が入れ替わった感じですが、所属が違うのでそういう表記になっています。

古道の痕跡を辿って北の方に行くと、これは見当が付け易いのですが、空港ビルの西側に少し大きな建物があります。これがチェコスロヴァキア館です。その真ん前の道路に出て来ます。

さらに北上すると、石峰集落に入ります。石峰集落は溝辺郷の古い麓です。此処に最初の麓が置かれたのは、この道を押さえる意味があったことになります。溝辺郷麓が此処に設けられた理由の一つだったのです。以上が木下良氏と歩いた成果です。

（２）文献史料にもとづく追究

1.大宰府への距離。先程もちょっと触れましたが、延喜式巻二十四主計上に日向国・大隅国・薩摩国は大宰府への行程が「上十二日下六日」とある。この記事から大隅国は薩摩国や日向国を経由せずに直接行ったことが判ります。薩摩国に入っても日向国に入っても日数が一日プラスされるわけです。そこで、大水駅は直接大宰府へ向かうルートにあったと見当をつけなければならない。そうすると川内川をどこで渡ったかが、キーポイントになります。

2.石清水八幡文書の記事は先程説明した通りです。天承二年(1132)大隅正八幡から提起された「往古の大路宮坂麓の石躰に八幡の名が顕れた」こと。往古の大路は大隅国府から大宰府へ向かう駅路であったと考えられる。現在宮坂の麓に石體神社があり、その前に宮坂橋がある。石體神社脇の古道、これが宮坂であったと見てよい。文献史料に二つの手がかり残されていました。

3.実地踏査の結果。1)十三塚の位置、大道という地名、横大道という地名。これらを実際に歩いてみました。中には近世に使われたと見てよい杉並木が残っています。よいピクニック道に将来活用出来ると思うのです。

もう一つの目的は、2)大人足形(ｵｵﾋﾄｱｼｶﾀ)という地名の現地を見ることでした。大人足形については「中原遺跡発掘調査報告書」に寄稿した論考に、大隅国と薩摩国の「大人足形」地名を掲げてあります。今年は大隅国を歩いたのですが去年は薩摩国を歩きました。薩摩国は出水・野田・阿久根を歩きました。出水の場合、大人足は公園になっていて移動しているのではないか。野田下名の大人は水田地帯で、これは窪地。阿久根大川の大人という所は、山の尾根に登って行く所で見晴らしのよい所です。古代官道とみてよいのではというのが木下氏の見解でした。

今年は大隅国を調べようということで、各教育委員会にこういう目的で行くから資料提供をとの文書を送って訪ねました。その結果が、2)「大人足形」地名の調査になります。これは時期的に若干時代がくだるのではないかと判断しました。

隼人町松永に古道(ﾌﾙﾐﾁ)という小字があります。そこは牧園町下中津川の大人形(ｵｵﾋﾄｶﾀ)につながり、さらに横川につながると見られます。

こちらの地図は江戸時代の藩庁からの命令を伝達する廻文(ﾏﾜｼﾌﾞﾐ)の宿次(ｼｭｸﾂｷﾞ)の経路を地図に示してみました。これを見ると、日当山郷から踊郷（牧園）に連絡して、曽於郡郷に引き返しています。記載順序に書き違いがあるのか判りません。宿次の順序は島津家列朝制度の記載によります。

曽於郡郷から松永を経て霧島川を遡ると、小鹿野に古道(ﾌﾙﾐﾁ)という小字があります。古道を登ると牧園に出て、下中津川に大人という地名がある。そこから牧園の中心地宿窪田(ｼｭｸｸﾎﾞﾀ)を経て、横川につながる。横川から肥後国に向かう道に出たか、横川経由で松尾城（別名栗野城）：栗野につながる道があってもおかしくないなと思います。

2.菱刈町徳辺の小字大広形(ｵｵﾋﾛｶﾞﾀ)。これは大人形が変化したもの。菱刈町の前目や徳辺から吉松に出る魚野越(ｳｵﾉｺﾞｴ)の道、これには巨人伝説がある。大男が川内川を堰き止めて池を作ろうとしたら水が溢れて魚が山を越えて来た。だから魚野越というのだとの言い伝えがあります。魚野越の巨人伝説と道路造りの巨人伝説が結びつくことになる。道路造りの土木工事では山を切り開いて切通(ｷﾘﾄｵｼ)が出来ます。それを大人（巨人）が踏みつけた足跡：足形だと見る。そういう大人足形という地名を拾いあげると古代の官道が見出されるとの新しい説があり、それを確かめるために去年・今年と歩いた次第です。大隅国・薩摩国は「大人足形」地名が目立って多いのです。吉松町にはもう一つ般若寺越(ﾊﾝﾆｬｼﾞｺﾞｴ)という古い道が魚野越の北側にあります。般若寺越と魚野越を比べると魚野越の方が古い。般若寺越は島津義弘も通ったことがありますが、宮崎地頭だった上井覚兼が此処を通って北九州攻めにのぼっています。どちらにしても古代の道路とまではいかないと考えます。

3.横川町上ノに「大人形」というのがあるのですが、山ケ野金山に近かったので山ケ野金山に行く道ではないかということで現地に行きませんでした。最近、図上整理をしているうちに、これは行けばよかったのにと気付きました。

以上が木下さんと歩いた実地踏査の結果です。木下さんは満84才ですが、私よりも歩くのが早いし、元気です。日本全国の古道を歩いている人です。40年以上の交際で、薩摩国府を調べる頃から情報交換をしています。古道に関しては教えられること多大です。

その後図面整理をしている中での新発見：(4)デスク＝ワークでの新発見。まず大口市教委を訪れた時の話。大口市に郡山八幡という神社があります。座主がけちで焼酎を飲ましてくれないとの落書があった有名な神社です。郡山八幡は古代駅路とも関連があったのではとの見込みで訪れたのです。大口の人たち（郷土史家）と話したら、大水駅はこっち（大口）ではないのではと云われるのです。大口＝大水説に否定的だったのです。まず、

そのことに疑問を感じました。大口市を通る直線的な道路はすべて時代が新しいという。

そこで中世の山城跡を整理すると、大口城と山野城の他に篠原城や市山城などがあるが肥後国からの侵入を防ぐための備えになるわけです。羽月川の方には道路ににらみを利かせた山城跡が集中していることに気付きました。鹿児島では「はつき」と発音しますが、広辞苑を調べると「葉月はづき」なんです。八月の祭りに因む地名ですから「はづき」になるわけです。羽月は「はつき」と読むものと「はづき」とよむものと二通りに分かれます。あと二週間もすれば「川由来考」に出て来ます。

大口市での話では、大口と大水は結び付かない。大口の地名が出て来るのは1499年だ、と。大口の名は新しい。だから大口を通っていないのじゃないかとの地元の郷土史家たちの話でした。

菱刈町を訪れ埋文担当の原田さんから大峰遺跡の出土遺物の説明を受けました。変った土器が出ている、と。墨書土器も出ており、ラサールの永山さんに見てもらったけど判らない、と。遺物は赤高台というもの。高台を赤く塗った土師器の椀・坏などのことです。一本のトレンチから相当数の遺物が出土したそうです。広い範囲の調査でなく、道路を拡張するための事前調査で、トレンチ１本か２本の調査のようです。それでもかなり特殊な土器が出ていることから、官衙的なものと結び付くのではないかとの話でした。

要注意の遺跡だから周辺の小字地名を徹底的に調べること、城跡や神社などを地図に記してもっと歩きなさいと菱刈でも話し、帰宅してから手紙を出しました。川内川のすぐ側で、しかも台地。そこに「大峰」という地名がある。山頂の高い所の「峰」ではないのです。カッコ書きして置きましたが「大水根・大水祢？」の可能性もある。それならば省略されて「大水」と延喜式などに書かれる可能性が出て来る。だから、この辺は要注意の場所だということです。

2)はこういう整理をする時に中世の山城の分布図を作るのは第一歩であるということ。カラーコピーをしようとしたのですが、色がよく出なくて手書きで全部書き直しました。山城は後に近世の麓（外城）になるものが多い。城があった所をつなぐと中世の道路が見えて来る。もう一つ、この図では吉田筋とか郡山筋など近世の宿次が理解し易いように注記して置きました。

川内川の渡河地点

もう一つ、豊臣秀吉が二十万の大軍を率いて島津を屈服させるためにやって来ます。二十万人が一列になって帰ることは考えられないので、いくつかの道を通って帰ったはずですから、帰路についていろんな説が出て来るのはやむを得ないと思いますが、次のようなことが判りました。

豊臣秀吉はまず平佐城を見て、そこを出発し、一日目は楠元に泊ります。楠元の次は山崎に泊ります。そこら辺りの様子を見ながら一週間ばかりかけて移動し、山崎の次は鶴田に泊ります。鶴田から針持へ出て、いわゆる関白陣で様子を見ます。

それから先は、秀吉がどこで川内川を渡ったのか、それが問題になります。それを考えるためには、渡し船の記録を探すのが捷径。鹿児島県地誌に川内川の渡し船として20か所をあげています。その他に掲げてあるのは、

長島黒之瀬戸と万之瀬川の渡し船、全部で25か所ぐらいしかないのですが、川内川流域については薩摩国だけで20か所あります。その20か所の説明を見ると、ほとんどが私渡船です。その中に官渡が２か所あります。それについては、人文地名の終章に書いておきました。「流れ行く雲と水の流れ」の題名をつけましたが、俳句誌朱欒の主宰者脇本星浪氏が５月号にメモを挟んでいたのです。左肺の手術をすることになったが、その前に心臓も手術するとのことで、これは一大事と考え、愁傷とは書けないので終章の形にしました。その前号に溝辺台地の説明をしていたので続編を書いて彼を激励しようと考えたのです。

上段うしろから５行目「大隅国二駅のうち蒲生駅が蒲生町内にあったことは疑問の余地がなく、姶良町船津で古代官道の遺構が確認されており、その延長上に蒲生駅があったのは確実である。今一つの大水駅がどこにあったかを解明すれば大隅国の古代史は大きく飛躍する」。鴨長明の方丈記を想起しながら、水の流れを見ているのです。「河川の略図を作成しながら川の名を追っているうちに大水駅を求める場所が見え始めた。男のロマンがそのベールを剥ぎ取ったと言ってよい」と。その前号で宮坂麓に触れていますから、大隅国府から大宰府への最短距離は、大隅国府→宮坂麓→十三塚原→横川→曽木→小川内→肥後国経由の道になる。横川経由が最短距離ではあるが、川をいくつか渡らねばならぬので少々面倒。これを書いた後、横川経由でない道があることに気付くのです。「今一つのヒントは鹿児島県地誌が川内川の渡し場の名前を二十か所記録していること。ほとんどが私渡船。小学校唱歌の“村の渡しの船頭さんは今年六十のお爺さん”あれはお爺さん所有の船なんですね。ところが二十か所のうち官渡：公営の渡し船が二か所ある。それは曽木の滝上流の下ノ木場渡と下殿渡である」。

そこで秀吉の帰還路：羽月川右岸と下殿渡が結び付く。下殿渡の手前が曽木城、古名が曽木郷里。そして太良本城（菱刈本城）も近い。そうすると曽木郷里が大水郷であった可能性もあるし、近くに大水駅があった可能性も大きくなる。

分水嶺を辿る道

「朱欒」にこういう文章を書いた後で溝辺台地の分水嶺を歩いたのを思い出しました。前回この会で内山君が錦江湾分水嶺踏査の話をしました。それに触発されたのです。

十三塚原は南の方から順に西光寺川と日木山川の、嘉例川と網掛川の分水嶺になっている。天降川水系と網掛川水系の分水嶺と言ってもよい。川沿いに行く道よりも台地または山の上に登り、分水嶺を辿って行った方が川を渡るわずらわしさがないし、早く行ける。網掛川の水源の一つは２万５千分１図に論地という地名が注記してある所になります。その水源から台地にあがった所にチェコスロヴァキア館があります。チェコスロヴァキア館の前の道が古代道の跡になります。チェコスロヴァキア館の前の道を東に50㍍も行かないうちに谷に下るのですが、その谷が網掛川の水源になります。下りると湿地になっています。あの辺で30㍍ぐらいの高さの差がありますが、さらに200～300㍍下ったら100㍍以上の比高になります。シラス地帯の浸食は激しいのです。

分水嶺の十三塚原に鹿児島空港があり、九州縦貫自動車道が走っているのです。高速道と古代官道は大体一致している。ということは古代官道は、あまり川を渡らない所を通っていた。分水嶺は外敵に襲われにくい。海岸地帯は海賊に襲われやすいので尾根道を通るのが安全だということです。

そこで十三塚原という分水嶺の延長を辿ると、竹子→永野金山→針持→曽木郷里。これが最も近い道の可能性が出て来た。こちらの山城の分布図を見ると、曽木城→藤尾城（羽月城）→渕辺城→平出水城、と辿れます。平出水城跡は発掘調査されて青磁や白磁が出土し交通の要衝だったことが判って来ました。その次が小川内関になります。そこから山を越えて肥後国に入ります。

秀吉の軍勢は羽月川右岸の城づたいの道：言い換えると古代官道跡を通っているのではないかと想定することが出来ます。それが3)豊臣秀吉率いる島津征討軍帰還路の確認、という項になります。

5)川内川の渡河地点は先程話しましたが、今一つ付け加えることがあります。現在の２万５千分１図には出ていないのですが、古い２万５千分１図を見てびっくりしたのは下殿渡を宮之城線が通っていたのです。永野金山から北上して曽木に通じる線路があったのです。昔、古い道があったことになります。明治年間の５万分１図を見てみました。明治37年の地図があるのですが、永野麓から曽木へ通じる道がありました。その道に乗っかって宮之城線がつくられていたのです。そして下殿渡に鉄橋を架けていたことになります。

下殿渡鉄橋の手前、これが宮之城線の西太良駅になるのです。西太良集落の古名が「曽木郷里」。「里」という地名は古いとみているのです。郡郷里という制度があった時代の集落の中心ですから「里」地名は歴史考古学的に調査し直す必要があると気付きました。大口辺りでは大口市里が知られていますが、曽木郷里は隠れていたことになります。そうすると曽木郷里に菱刈郡家があった可能性も出て来るし、大水駅がこの付近にあったことも考えられるようにになります。

このように整理して来ると、大隅国の交通の要所がいくつか浮かび上がって来ます。加治木はこの図の下の方でいろんな道が集中しています。もう一つ、溝辺に交通の要所があったことが判ります。

稲積城跡

次に未解決の稲積城との結び付きが考えられることになります。西暦699年に稲積城を修復したとの記事が続日本紀にあります。その頃は対隼人政策が重要課題ですが、それより前、663年に白村江の戦があります。日本の水軍は壊滅的敗北を喫します。唐・新羅連合軍の追撃に備えるために水城を築き、大野城や基肄城などの朝鮮式山城を築きます。こられが大宰府の起源になって来るのです。７世紀末になると鞠智城の整備、続いて三野城と稲積城が築かれることになります。稲積城は、これは仮定の話ですが、南の方からの唐・新羅連合軍が攻めて来るのに備える意味があったと考えられます。より現実的には対隼人政策だったと考えられます。そのような観点で見ると、稲積城がどこに築かれたのかが問題になって来るのです。

従来、鹿児島の歴史の通説では牧園に稲積老という人物がいて、大隅国に流されて来た和気清麻呂を世話したとのことで、牧園が稲積郷だろうだったのです。

ところが中世の山城や道路の整理をしてみ

ると、牧園は城跡も少ないし道路も周辺との密接な結びつきもない。それに比べると溝辺は充実している。溝辺は交通の要衝であったことが判って来た。そこで以前から注目していた溝辺町竹子の稲荷下宮神社の祭神が「稲積神」であること。これは溝辺町郷土誌に書いてあります。稲積神という神様を祀っていることは、稲積城や稲積郷という意識があったからだと思うのです。それが、6)稲積城をどこに求めるかの1.2.になります。

次は前回内山君が山名に「岡」という表現を横川町で用いているのは何故かとの疑問を提起しました。それがヒントになったのですが、教え子に大事なことを教えられました。調べてみると横川町の隣の溝辺町に神割丘というのがある。これは高屋山上陵の所在地になります。神様が割った岡とすると高屋山陵と上床山の間の道は人為的に断ち割ったことを示すものになります。そこに官道が通ったことを語るのは、大人足形よりも雄弁な説明だと思うのです。これは古道に関する有力なデーターになります。

福山に瓶割峠があります。これは神割峠が本来の呼び名だったと考えるのがよいのではないか。馬に載せた瓶が割れるのでなくて、神様が道を開いたとするのが的を射ている。

その他に据石ケ丘：大きな石が山頂に人為的に据えられているのです。何か意味ありげです。上人丘：偉い坊さんが関係したのでしょう。弓削丘：古い蔵骨器が出土しており、弓削丘の麓には崎森（古名崎守）という地名があります。稲積城の存在を考えると防人がこちらに派遣されていて、それがサキモリ：崎守という地名になった可能性が出て来る。陵守が訛って崎守になったとするのが郷土誌の定説ですが、訛ったとするよりも防人そのものの遺称とする方が解釈としてはすなお。すぐ近く、霧島の向う側：小林に夷守（ヒナモリ）という地名があります。卑奴母離という呼び名は魏志倭人伝に出て来ます。魏志倭人伝に出て来るヒナモリがこの地方にあるのだからサキモリという地名が伝わっていても不思議ではないと思います。

駅間距離

そこで、どういうことが考えられるか。稲積城が溝辺にあったと想定して、駅間距離を考えることにします。古代の駅は大体16km間隔。これは三十里という里程になります。これを20万分１図に当てはめると、人差指と中指を拡げた距離になります。20万分１図は便利な地図で16km：三十里は人差指と中指を拡げた長さ（距離）になります。５万分１図では指を拡げた距離は４km、すなわち１里です。２万５千分１図では２kmになります。この寸法を知っていると、非常に便利な距離を導き出せます。

どういうことが判るかというと、大隅国府と稲積城との関係。指を拡げて地図に当たってみて下さい。溝辺に稲積城を設定すると、駅間距離として適当と判ります。大隅国府から蒲生駅、これも大体16km。蒲生から溝辺も大体指を拡げた距離：16kmになります。

溝辺から蒲生を通り、吉田を経て鹿児島に来る道は、明治10年８月31日～９月１日西郷さんたちが鹿児島に帰って来た道です。吉松から栗野を経て横川に入ろうとしたら官軍に遮られて牧園に迂回し、溝辺から蒲生に出て来るのです。この道を通って鹿児島に入ったのです。歴史の道というのは、どこかで使われているのです。

溝辺から曽木までの距離、これも16km。曽木付近に大水駅を考えると、これも駅間距離としては適当になります。また時代は異なると思うのですが溝辺と栗野の間も大体16km。栗野・真幸間も16kmになる。さらに人吉に向かうことが考えられる。

大隅国府から高篠遺跡、これも16kmで駅間距離として適当になる。そうすると、これは曽木の大水駅が廃れた後、９世紀に設けられた駅家の可能性が出て来る。

このような作業をして、大水駅は曽木郷里近辺が、稲積城は溝辺が最も有力な候補地になって来たということです。今後は字図の検討、神社の分布、現地で土器破片の散布状況を見て行けば謎は解けて来ると思います。これから後は繁昌君の守備範囲です。吾々世代は足腰が立ちませんから。基礎事項を整理しておけば稲積城の謎も、大水駅の謎も解けるだろうと思います。

そういう意味では前回の「岡」が何故横川に多いのかの問題提起は鹿児島県古代史の謎解決の契機を与えてくれたと思います。

もう一つ説明を落としましたが、横川や溝辺に大和朝廷の軍団が乗り込んで来て、故郷の甘樫岡などを思い出して名付けた可能性を考えたのです。川内にも「岡」地名が目立ちます。瀬ノ岡、ここは古い薩摩国府があったとの説がある屋形ケ原のうしろの岡です。清水ケ岡、安養寺ケ丘。日暮丘には日暮長者伝説があります。横岡はいわゆる岡かも知れませんが、横岡古墳があります。その他に福山町の狐ケ丘。単発的なものは若干あるでしょう。旭ケ丘は新しい開発地名だから除外してもよいでしょう。

狐ケ丘には大きな岩が集められている所があります。この上で火をたいたら烽火になる可能性があるなとは思います。そう言ったことからもも「岡」地名は注目に値いします。

分水嶺踏査の話を聞いた後だったので、十三塚原が分水嶺になっていることに気付き、その分水嶺を古代官道が通っていたのが明らかになったということです。以上で説明を終わります。

〔質疑応答〕

平田　何か質問・意見などありませんか。質問が出て来るまで思いついたことを補足しておきます。

高屋山上陵

先日、木下氏と溝辺を歩いた時、高屋山陵にも登りました。300段の石段をですね。頂上に陵守、恐らく世襲の陵守だと思います。静かに読書をしておられたので邪魔はしませんでした。ほとんど誰も登って来ない所で一人では寂しいだろうと思うのです。哲学青年ならばいいのでは。邪魔されずに本を読める所ですから。

特攻基地鹿児島

高屋山陵の南側の上床山に溝辺町コミュニティーセンターがあります。そこに社会教育課があって文化財担当者がいます。上床山の頂上は公園になっていて、十三塚原から飛び立った特攻隊一人一人の名前が刻んであります。現在の鹿児島空港は特攻基地だったのです。そんなことを鹿児島県の人は案外知らないのです。あそこには大きな爆弾が相当数落とされています。空港が出来る前、鹿児島県考古学協会のメンバーがトレンチを入れましたが、その時は空港の地均し工事が始まっていました。鹿島建設だったか下請の小牧建設だったか記憶していませんが、250㌔爆弾の

不発弾をブルドーザーで押して来るのです。早く調査を止めろというような調子で、トレンチの側に知らぬ顔で持って来るのです。その頃は工事の人々もすぽっけだったと思います。知られざる話の一つです。その後伝播探知の調査が入りましたから、空港敷地内には不発弾は残っていないだろうと思います。

鹿児島県では知覧と鹿屋が特攻基地として知られていますが、鹿児島県には終戦当時、22の飛行場があってその中の13か所から特攻機が飛び立っています。知覧だけではないのです。飛行場や特攻基地などは戦争中は軍事機密ですし、敗戦後の戦後処理も不的確で実態は容易に把握出来ません。永年、新聞記事を切り抜いて把握した数です。

現在戦争中のつらい体験を年寄たちが語り継ぐ記事が新聞に掲載されますが、鹿児島県には特攻基地が多かったのです。都城も特攻基地でしたが、宮崎県なので数の中に入れてありません。また海岸地帯には震洋という魚雷艇：モーターボートの先端に火薬を詰めて体当たりする戦法。震洋の基地が14か所ほどあります。そのような基地の跡を大事にしたら、観光資源となって必ず県外から遺族が訪れると思うのですが、古いものを大事にしない県民性は困ったものです。

俊寛配流の道

浜田　大隅国府と島津庄を結ぶ駅路のことで小園説の大隅大川原大水駅説があります。長門本の記述は間違いないだろうと思うのですが、そこらあたりがどうなるのですか。

平田　長門本平家物語の話ですが、この地図でいうと、この道（横市川と手籠川を結ぶ道）を通って来ているわけです。高篠遺跡を調査したメンバーは島津庄と大隅国府を結ぶ道を実際に歩いて、どちらが歩き易いか、便利かを確かめているのです。長門本に経路が書いてあるのでこちらを俊寛たちが通ったのは事実です。小園説は大隅大川原を大水駅とするのですが、それは遠回りになります。

高篠遺跡を駅家として見る場合、遺構・遺物だけでなく、駅間距離としても適当です。長門本の記述は赤坂・夏影（夏木）・止上など一連の地名がつながっています。そして、気色の森に着きたもう、となる。本来の気色の森は洪水で流されて、江戸時代に今の地に移され、本来のものは現在の国分駅に近い所にありました。国分諸古記には鼻面川の横にある、とあったのを記憶しています。

長門本平家物語の記事は捨て難いのですが昔の官道なんてのはバイパスがあったでしょう。何かの都合で回り道をしなければならない時は、バイパスが必要だったと考えられます。大隅大川原経由の道もバイパスと考えれば活きて来ます。

未解明の烽火

平田　高屋山陵の上はどうなっているのか見ることは出来ませんが、その南側の上床山には大きな岩がかたまった所があります。狐ケ丘の山頂と同じように大きな岩が集まっています。鹿児島県での烽火がどんなものだったか不明ですが、あちこちで烽火の遺構が確かめられたら岩の集積が烽火につながって来る可能性もあるなと見ています。

牛屎院の所属

青柳　大口に行かれたとのことですが、いわゆる牛屎院の地は建久図田帳では薩摩国に入っているでしょう。あの地域は元来大隅国所属だったといわれているような気がするのですが。

平田　牛屎と太良を菱刈両院と云い、元々大隅国所属でした。牛屎は大口、太良は曽木ですから、川内川を挟んでもいた。菱刈院は大隅国所属ですが、牛屎院は何というか、近世には薩摩国に入っている。建久図田帳でも薩摩国に入っていますか。

青柳　はい。

浜田　菱刈は建久図田帳でも大隅国ですが現在の警察の管轄でも境界でも違っているのではないかと思ったりするのです。

平田　大口と違っている？

浜田　歴史的に見ても地域の分け方が違うのではないかと思うのです。

平田　古いしきたりの影響なんでしょう。市町村合併で過去のことが判らなくなるのは困ったものです。

浜田　県境や町境が大口辺りはどうもはっきりしない。

平田　大口は本来は菱刈郡。それが近世になって薩摩国北伊佐郡になる。南伊佐郡が薩摩郡に変って薩摩国に入る。菱刈郡は菱刈町だけの存在となる。牛屎は相良氏との勢力争いの場所となった所ですから、島津氏は薩摩国に抱き込みたかったのです。そういう歴史的背景があるかも知れません。先程言ったように馬越城とか市山城とか湯之尾城などは肥後の人吉に対する備えになるのです。古代の道路とは関係がないと思うのです。

稲積城

平田　今まで考えられたこともない所に稲積城が出て来たので、皆さんにとっては寝耳に水の感じかも知れませんが、今まで調べて来たことから自然と落着くべき所に落着いたと私は見ています。突拍子もない奇抜な説を述べているつもりはないのです。

嘉例川（涸れ川）

平田　鹿児島県の川はシラス地帯を流れるために水無川（ﾐｽﾞﾅｼｶﾞﾜ）とか涸れ川（ｶﾚｶﾞﾜ）が多いのです。嘉例川・佳例川などの場合、本来は涸れ川です。冬から春にかけては雨が降らない時期ですから、ほとんど水はないのです。それをそういう佳い文字を書いて何とか慰めていた。そういう悲愴な感じです。特急列車「はやとの風」に乗ると、嘉例川駅で10分間ぐらい停車しますから写真を撮る人が多いのですが、駅の周辺に集落があるわけでもなのです。むしろ福山町の佳例川の方が集落としてはしっかりしています。和名抄に出て来る「葛例郷」は福山町佳例川と見てよい（編集時後記：その後得た情報では佳例川も小学校が消滅した過疎地で人口440人、小中学生が20人ぐらいだという）。

神代三山陵

平田　話はちょっと飛びますが、鹿児島県にある神代三山陵は明治になってから強引に決めた経緯があります。明治５年(1872)明治天皇の鹿児島行幸に間に合わせるために磯街道の工事に急遽取りかかるのです。明治天皇の鹿児島行幸のねらいは島津久光の引っ張り出しだったのですが、その時に内之浦に勅使を派遣して内之浦にある高屋山上陵参拝をさせるのです。明治天皇は内之浦にあるのが高屋山上陵だと思っておられたのです。その後明治７年に神祇省は「彦火火出見命の陵は高千穂山の西に在り」との古事記の記事を理由に溝辺を高屋山上陵に決めたのです。天皇が勅使を派遣した二年後に溝辺が本家だと神祇省が決めたのです。明治天皇はそれ以後は黙られたのです。そういう強引な決め方をしています。

そのようなことで明治７年に神代三山陵が鹿児島県に治定されますが、記紀にはニニギノミコトは日向国可愛山上陵に葬る、ウガヤフキアエズノミコトは日向国吾平山上陵に葬ると、それだけの記事ですが、「高千穂山の西に在り」と具体的に書いてあるのはヒコホホデミノミコトだけなんです。それが決め手になっているのですが、「高千穂山」という表現はぴんと来ない。「高千穂峰」です。高千穂山という表現は聞いたことがない。

高塚古墳が伝わって来るのは、豊前→日向→大隅国の志布志湾岸一帯。鹿児島には伝わっていないし、薩摩半島にはほとんど伝わっていません。古墳時代に鹿児島湾岸まで果たして大和朝廷の勢力が伸びて来ていたのかはいささか疑問。また、いつその勢力が伸びて来たのかが当然問題になって来るのです。

ところで内之浦に対して外之浦という地名があるのです。先日この会で飫肥の他に佐多にも外之浦があることを知りました。そうしたら真ん中に内之浦があって、両側に外之浦がある配置になる。これは内之浦を中心に大和勢力の橋頭堡が出来たと見られるのです。彦火火出見命が乗り込んで来たのは内之浦。そこに高屋山上陵があって神話と結び付いていたと考えられます。

菱刈郡

青柳　菱刈郡というのが出て来ます。その地域とういのは当時どういう状況だったのかよく判らないのですけど。浮浪の民が郡家を建てることを乞うた。そのことは結局系統的に大和朝廷の勢力の中にいなかったということでしょう。そういう中で駅路はあったというのか。それとも郡を設けてから駅路を開いたのか。

平田　辺境地域では当然駅路が先であって後に郡家が出来るでしょう。

青柳　あゝ、そうですか。浮浪の人たちはそれには全然関わりなくやっていたのでしょうか。

平田　さぁ、どっちかな。大隅・薩摩というのは大和朝廷から見ると、特殊な関係にあったと思うのです。今までは南九州の住民が云うことを聞かないので征服したと解釈されています。

隼人の言葉

平田　神武東征は現在顧みられてもいないけど、近畿地方に移住して隼人の言葉（鹿児島弁）を残している地域があるのです。これは「地名が語る鹿児島の歴史」に書いておきましたが、万葉集に「わぎへ・わがえ・わがやど」などの表現が出て来ます。これらは今でも鹿児島弁で使っているのです。ところが近畿地方に万葉の時代の言葉はほとんど残っていません。ということは、南九州の住民が向うに行ってそういう言葉を使っていたために万葉集にそれらが残ったと考えられるのです。こちらの隼人たちが大和朝廷の征服によってそういう言葉をおぼえさせられ、それが現在まで千数百年間維持され続けられていると考える方が不思議だし、不自然でもある。それが一つです。

これは奈良県や京都府に住んでいる教え子たちに手紙を出して、宇治市とか桜井市など隼人が移住した所の郷土誌に出て来る方言をコピーして送れと連絡したのです。その方言には鹿児島弁と同じものが沢山載っていました。ということは宇治や吉野に移住させられた隼人が使った言葉が方言として残っていることになります。先程述べた鹿児島県に万葉集時代の古い言葉が残っているのと同じようなこと：裏返しになります。それだけでなく神奈川県平塚市の所に、昔大住郡というのがあったのです。大住郡大野町の郷土誌を偶々貰って、方言をコピーしてみたら、ずらりと鹿児島弁の単語が並んでいました。大住郡に隼人が移されたとの記録などは全然ないのです。ないけれども大住郡という地名がある所に鹿児島弁と同じ表現が残っているのです。これは関東地方に攻め込んだ大伴氏や物部氏の家来の中に隼人がいて、その連中が住み着いて大住郡になり、隼人の言葉：鹿児島弁が残されたと解釈する方が自然です。言葉が千数百年の間、残っていることは驚きですが。

浜田　島原で聞いたのですが、鹿児島弁と同じものが沢山ありました。これは鹿児島の人たちが相当数移されたのではないか。これは島原の乱後ではないか。だから精確に方言を調べれば鹿児島弁とのつながりが地域的に出てくるのじゃないでしょうか。だから一部の表現ではなくて、総体的に日本中を調べる必要があります。今云われたように鹿児島弁の中に古い言葉が残されている、ということはよく判ります。鹿児島弁に古語が多いこと：それは冷静に分析すればよい。……（以下録音不良、聞き取れず）。

蛇行剣と棟持柱の建物

平田　蛇のように曲がりくねった剣：蛇行剣が出土しているのは鹿児島県と奈良県：大和です。それが出土するということは、大隅・薩摩と大和が何らかの関係があったということです。

浜田　今お話にありました桜井市の研究は桜井市の郷土誌か何かを見られてのことですか。桜井市と鹿児島の似たところというようなご研究でしょうか。

平田　方言で似たような表現があるということだけです。桜井市の歴史そのものは調べてはいません。ただ言葉だけの関係です。畿内移住隼人がいたことは早くから指摘されています。隼人が住み着いた所：地域の確認が必要ですがそこまでは調べてはいません。先行研究があることは知っています。また吉野葛が有名ですが、こちらの葛取りが伝わって行ったのじゃないかなと思ったりします。隼人が畿内に持ち込んだと考えられるものに、竹細工、鵜飼い、もう一つ棟持柱の建物があります。

棟持柱の建物というのは伊瀬神宮が棟持柱の様式を現在まで伝えています。これが鹿児島県では鹿屋市王子遺跡の保存問題が騒がれた時に検出されていました。それと上野原で弥生時代の調査段階で棟持柱の建物遺構が検出されています。上野原はその下層の縄文時代の古い集落としてクローズアップされて、棟持柱の建物遺構のことなど立ち消えになってしまったようです。

鹿児島県に棟持柱の建物があったことと伊瀬神宮との関係をどのように説明するのかというのはすっきりした説明はないようです。考古学者たちは近畿の様式が南九州に伝わって来たという解釈をするだけで、こちらから近畿に伝わったとする説は出て来ません。共通した建物様式があるのは事実です。

国分寺の石造層塔

肱岡　国分寺跡のことで、川内にも層塔がありますが。

平田　国分市のものは現存は六重です。隼人塚の方は三重とか五重ですが、大隅国分寺のものは現存六重。

肱岡　薩摩国分寺跡の近くにも石造層塔がありますが、あれは隼人塚と同じ形ですね。

平田　そうです。薩摩国分寺跡の西北の方にある石造層塔は本来国分寺跡の中にあったものです。それを昔水引の村長が自宅の庭に移したと聞きました。その他、円形柱座を造り出した礎石なども明治・大正の頃に薩摩国分寺跡から庭石として持ち出されたようです。昔は文化財保護の意識はなかったわけで人々を責めることは出来ません。

また私はこう見ています。大隅国府の場合（以下板書しながらの説明）東北に台明寺がある。西北に鹿児島神宮すなわち弥勒院。西南の隼人塚がある所に正国寺という寺があり東南に大隅国分寺があった。このように四方の鎮守神すなわち国府を守るための寺院が配置されていたのです。古い重要な寺院がこのように四方に配置されていたのです。

使っていた石材は台明寺の西北の方にある武安（ﾀｹﾔｽ）という所。昔霧島病院という海軍航空隊のための病院があった所。そこで取った石です。多分武安石と呼んだのでしょう。白くて穴があいている石です。加治木石（二瀬戸石）でなく、武安石が使われているようです。

私は守護神の配置から大隅国府の立地を理論的に考えたのですが、先日「隼人郷土誌」巻末の年表を見ていたら、台明寺の記事に大隅国府東北の鎮守として創建されたとありました。文献に鎮守とあったので年表の記事になったと思うのです。このような守護神の配置があったということが文献的にも裏付けられたと思います。府中に大隅国府があったのは動かないということです。その他にも証拠となる古文書はいくつもあります。

昔は府中の周辺では川はこのように流れていました（板書）。大津川、今は天降川と名付けられています。大津とは国府の湊所在地の地名です。こちらの方に鼻面川がありました。二つの川に挟まれた地域に大隅国府があったことになります。（以下、録音なし）

現在私は県下の川を調べていますが、中世の山城や近世の麓（外城）などは二つの川の合流点に位置しているものが多いことに気付きました。合流点は古来交通の要衝であり、防御上もすぐれていたということでしょう。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（54）

国道10号姶良バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

NAKA HARA

中原遺跡

姶良郡姶良町脇元

付篇　国道10号バイパス（姶良地区）関係埋蔵文化財調査総括

―第３分冊―

２００３年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

古道を探る方法

平　田　信　芳（古代交通研究会員）

1　律令期の大隅国・薩摩国の官衙・官道について

奈良・平安時代、大隅国・薩摩国にあった官衙・官道の遺構については断片的に知られているにすぎない。考古学のメスが入ったのは薩摩国府[1]・薩摩国分寺[2]・薩摩国分寺瓦窯跡[3]・大隅国分寺[4]・大隅国分寺瓦窯跡[5]だけである。郡家遺構にしても大隅国８郡・薩摩国13郡の中で、郡家関係の遺構と知らずに発掘した結果、調査担当者の個人的見解で薩摩郡家・阿多郡家・揖宿郡家と結び付くのではないかとの情報が漏れて来る状態である。

官道については、延喜式巻二十八兵部省にある下記の記事が基本であるが、確実に判明したのは、

大隅国駅馬　　蒲生・大水、各五疋。

薩摩国駅馬　　市来・英祢・網津・田後・櫟野・高来、各五疋。

伝馬　　市来・英祢・網津・田後、各五疋。

蒲生駅から大隅国府に向かう官道の一部についてだけである。これの発見に至る経緯を知っているのは筆者だけであるので、そのことをまず紹介しておきたい。1993年２月、木下良氏（古代交通研究会長）が木本雅康・中村太一（当時國學院大學、院生）両君・橋村修君（國學院大學、学生）を引率して、九州各国の官道調査をされた。薩摩国・大隅国調査の際は筆者も同行した（２月27日～28日）。その時に姶良町船津で大隅国駅路の痕跡とみられる地割を確認した。平成４年(1992)～平成11年(1999)、鹿児島県教育委員会は文化庁の補助事業として、歴史の道調査および歴史の道整備活用推進事業総合計画を実施した。筆者は調査委員の一人であったので、平成５年度歴史の道調査報告書[6]に姶良町船津にある大隅国駅路の痕跡とみられる地割の写真を掲載した。この報告書にもとづいて平成13年末に姶良町教育委員会が発掘調査を行い、道路遺構を確認したとみられる。調査担当者からの平成14年年賀状で「船津の道路遺構を確認しました。現場は埋め戻しました」とのことを知った。詳細は姶良町教育委員会の発掘調査報告を待つ以外にないが、大隅国・薩摩国で駅路遺構が明らかになった最初の場所である。これを起点として周辺に調査が拡がることが期待できる。まずそのことを慶びたい。

西海道諸国の駅路想定図は、鹿児島県の場合いろんな概説書・歴史地図のどれを見ても文字通り各種各様である。市来駅[7]・田後駅・高来駅・大水駅の所在地をつき止めなければ、問題は解決しない。県立埋蔵文化財センターをはじめ市町村教育委員会に多くの埋蔵文化財担当職員が配置されているが、積極的に駅家や官道を追求する姿勢は感じ取れない。官道を抑えることは、郡・郷の中心を探る捷径である。歴史地理学・歴史考古学の基本から入って行くことが着実な探査方法と考える。

2　古道を探る方法

古代・中世・近世各時代の道は、現在ではすべて古道になった。道路そのものはどのような時代であっても、政治的要地や経済的要地を結ぶものである。その視点に立つと、道路は古代・中世・近世を通じて大きく変わるものではない。古代の道（駅路・伝路）は「すべて国府に通じる」とみ

なしてよい。中世の道は古代の道を踏襲したものであり、軍事的要衝には必ず山城が築かれ、守護大名・戦国大名の居城・居館が交通路の結節点になっていたと考えるべきである。近世の道は元禄絵図・天保絵図・伊能測量図なども現存しているので、本稿では取り上げない。古代の道を探る方法についてのみ意見を述べる。

（1）注目すべき史料

1029年（長元２）　平季基等が大隅国府・守館・官舎・民烟・藤原良孝宅を焼き払う（小右記）
1132年（天承２）　往古の大路、宮坂の麓の石躰に八幡の御名顕現す（石清水文書）
1177年（治承１）　島津庄……とかみ・けしきの森……正八幡宮……（長門本平家物語）
1197年（建久８）　帖佐郡371丁、蒲生院119丁……加治木郷121丁７反……（建久図田帳）

日本史上最大の荘園となった島津庄の開発者平季基が、1029年に大隅国府を焼き討ちしている。この時の大隅国府がどこであったか、都城盆地から大隅国に攻め込んだ道はどの道であったかは将来考えなければならない素材である。また藤原良孝宅が焼かれているが、春日神社の存在が藤原氏の拠点を探る手がかりになる と考える。江戸時代、各郷に総廟（惣廟・鎮守神・総鎮守・総鎮・宗廟・宗社ともいう）が置かれているが、春日神社を総廟とするのは加治木郷だけであり、加治木と藤原氏の結び付きが深かったことを示している。今後の検討材料になろう。

石清水文書に見える「往古の大路、宮坂」という1132年の史料は、大隅国から肥後国・日向国へと北上する駅路が12世紀前半には「往古大路」と呼ばれる存在になっていたことを示す。隼人町にある石躰神社の前に「宮坂橋」が現存している。

長門本平家物語に見える1177年俊寛らが流されて来る道の記事がある。俊寛配流の道を大隅国・日向国を結ぶ駅路とみる見方もあるが[8]、バイパスの一つと考えたい。

1197年の大隅国図田帳記載の桑原郡各郷の田数を見ると、帖佐が最大であり、しかも帖佐郡と記されているので、桑原郡家は帖佐にあった可能性が大である。蒲生駅・桑原郡家・藤原良孝宅探しを大隅国駅路と併行させることも必要だろう。

（2）八幡社の分布から考える　―― 歴史地理学的方法（その１）

西海道諸国の一之宮を列挙すると、次のようになる。筑前（筥崎八幡・住吉大社）、筑後（高良大社）、豊前（宇佐八幡）、豊後（柞原八幡）、肥前（千栗八幡）、肥後（阿蘇神社）、日向（都濃神社）、薩摩（枚聞神社）、大隅（鹿児島神宮：大隅正八幡）、壱岐（天手長男神社）、対馬（海神神社）。これらを見ると、八幡社が多いことに気付く。八幡信仰は宇佐八幡に始まり、９世紀になると国分寺の鎮守神として勧請されて国分八幡と呼ばれるようになる。西海道諸国すべてについて眺めていないので言及は出来ないが、大隅国・薩摩国の場合は大隅国府（大隅正八幡）・薩摩国府（新田八幡）・蒲生駅（蒲生八幡）・出水郡家（箱崎八幡）・鹿児島郡家（荒田八幡）などが八幡社と結びついており、郡家・駅家など官衙の所在地に八幡神が勧請された所が多いと見当をつけることが出来る。

《薩摩国＝大隅国を結ぶ道》

薩摩国府……塔之原……蒲生……鍋倉……木田……高井田……内……大隅国府
新田八幡　若宮八幡　正八幡若宮　新正八幡　弓箭八幡　高倉八幡　大隅正八幡　府中

《大隅国＝日向国・肥後国を結ぶ道》

大隅国府……内……万膳……米永……川西……鶴丸……日向国
府中　大隅正八幡　八幡神社　正若宮八幡　箱崎八幡　八幡神社

市山……目丸……太田……山野……肥後国
箱崎八幡　西原八幡　郡山八幡　八幡神社

《薩摩国＝肥後国を結ぶ道》

薩摩国府……草道……大川……山下（阿久根）……野田……西出水……鯖渕……肥後国
新田八幡　若宮八幡　八幡宮　若宮八幡　若宮八幡　箱崎八幡　若宮八幡

八幡社の分布を調べることは、八幡社を直接結ぶという意味ではない。所在する郷や村の中に残っている道を古道として見直すことである。なお鹿児島県内の八幡社についてはリスト＝アップしてあるが、ページ数の都合上、割愛する。

（3）「大人足」地名の分布から考える　―― 歴史地理学的方法（その２）

平成14年正月、前述した木下良古代交通研究会長からの年賀状に「大人足」地名のことが記されていた。「30年前の調査で肥後国の駅想定地に大人足地名があることを知りましたが、意味は判りませんでした。昨年、木本雅康君（前述）が古代駅制と巨人伝説の関係を雑誌『本郷』に書きました。……駅路の大規模な切通しを巨人の足跡と見たようです」と。その返事に地名カードに記録してあった県内の「大人足」地名を眺めると、すべての道路と結びつくと回答した。

（大隅国）
1．大人形――牧園町下中津川
2．大人形――横川町上ノ
3．大広形――菱刈町徳辺
4．大人足形――福山町佳例川
5．人足形――垂水市牛根境
6．大　人――末吉町二之方
7．大人足――志布志町安楽

（薩摩国）
8．大人足――出水市武本
9．大　人――野田町下名
10．大　人――阿久根市大川
11．大人跡――串木野市下名
12．定之足形――川辺町野間
13．大広形――鹿児島市犬迫
14．大人足形――鹿児島市川上

これらのうち、１・２・３は大隅国＝肥後国を結ぶ駅路と、８・９・10は薩摩国＝肥後国とを結ぶ駅路（もしくは伝路）との関連が考えられる。民俗学の対象であった巨人伝説地名が、古道を探す歴史地理学的な視点で注目されることになった。

（4）交通要衝の立地から考える　―― 歴史地理学的方法（その３）

鹿児島県96市町村の立地を見ると、２／３が海岸線をもっている。今までは陸上交通のみにとらわれていた嫌いがある。海上交通を重視すると違った視点が生まれて来る。県内の主な市・町は、ほとんどが水陸交通の要衝に位置している。その視点に立つと、古道・駅家を探すには水陸交通の要衝に目を配る必要がある。以下、目配りの要項を箇条書きにしてみる。

１．港町として栄えた――大隅国・薩摩国の場合はほとんどが河口港であった。
２．河川の分岐点（本流・支流の合流点）――近くに中世の山城が築かれている例が多い。
３．豊富な清水――沿岸航路の場合は泊地で飲料水を得ることが出来るが、外洋航海となると飲料水の確保は必須条件となる。陸路の場合でも清水・泉の存在は無視出来ない。

4．渡河地点の確認―――昔の渡河地点は限定された。随所に渡し船があったのではない。

5．峠に連なる道――国境を越える道は、大隅国＝日向国を除けばほぼ決まっている。

大隅国＝薩摩国の駅路―――新留峠を越えたと考えられる。

大隅国＝肥後国の駅路―――亀嶺峠を越えて水俣・佐敷に出た。加久藤峠を越えて人吉に出るルートは日向国真幸駅を経由しなければならない。

薩摩国＝肥後国の駅路―――海岸沿いの道に峠はない。但し、バイパスの場合、川内・出水の間には横座峠、出水・水俣の間に芭蕉越があった。

大隅国＝日向国への道―――いろいろなルートが考えられる。

①国分……敷根……福山……亀割峠……牧之原……都城（島津駅）

②国分……敷根……門倉薬師……上之段……牧之原……都城――（上井覚兼日記）

③国分……止上……財部……都城――――――――――――――（長門本平家物語）

④国分（浜之市）……松永……大窪……日向国高原――――――（西藩野史）

⑤国分……溝辺……横川……栗野……吉松……日向国真幸

⑥国分……松永……牧園……栗野……吉松……日向国真幸

⑦国分（浜之市）……（途中不詳）……栗野……日向国白鳥岳

①近世の高岡筋（日向街道）、②中世の日州通道、③俊寛配流の道、④島津義弘の関ヶ原から帰還の道、⑤天降川右岸を北上する道：宇佐八幡の密使が大隅正八幡を焼き払い、討たれたとの伝説（十三塚）が溝辺にある、⑥天降川左岸を北上する道：松永に「古道」の地名がある、⑦元禄時代に東大寺再建用の材木を運び出した道。その他にも二・三あるが駅路・伝路とは結び付かないので省略する。

航空写真を利用する方法もよく言われるが、慣れないと難しい。立体鏡を購入して試みるが持てあましている。本稿では触れない。研究者が上空から観察できると違う視点も出て来るだろう。

（5）墨書土器・蔵骨器の出土分布から考える ――― 歴史考古学的方法（その1）

上記（2）～（4）で述べたルートについて機会があるたびにトレンチによる確認調査を実施し、消去法でしぼっていけば、おのずから結論を見いだせるであろう。他県では墨書土器の出土例が多いので、考察のてがかりとはなりにくいだろうが、鹿児島県の場合、墨書土器・蔵骨器などの出土分布は官衙・官道の存在と結び付いている。参考文献名[9]をあげておくのでそれに依られたい。

（6）地割の方位・直線的道路に留意する ――― 歴史考古学的方法（その2）

奈良・平安時代の建物や地割の方位には真北すなわち北極星を見通した方向をよく用いていた。このことは薩摩国府・国分寺、大隅国府・国分寺の地割にも用いられていた。真北の方位は鹿児島県の場合は磁北から西に5度乃至6度振っている。すなわちN5°E～N6°Eの範囲とみられる。5万分之1図や2万5千分之1図に「6°西偏している」などと注記されている。鹿児島市の場合は現在は「6°西に振る」とあるが、昭和40年代の地形図では「5°20′の偏り」となっている。時期的に若干のずれがあるのであろう。クリノメーターで方位を見る時は5度と6度を厳密に見分けることは困難であり、おおよその数値で判断せざるを得ない。

西出水小学校脇の道を正午すぎに歩いていた時、自分の影が道路と併行しているのに気付いた。何気なく顔をあげて道路の延長を見やると、鳥居が見える。足を伸ばして行くと、箱崎八幡（出水郷の総廟）だった。しかもその道路は直線的な道。後日、クリノメーターで測ると大体N5°E、真北の道路と知った。その道路を反対方向に南に約3km行くと、道から少し降りた平良川の岸に小字「市来・上市来」がある。市来駅の有力比定地とのことで、出水市教育委員会によって発掘調査もなされた。発掘現場を見学したが、氾濫原に営まれた水田の中であり駅家跡に結び付くのかと、首をひねらざるを得なかった。その道路の延長は横座峠を越えて、後の高城麓や薩摩国府に向かう道である。仮に駅路とすると英祢駅を通らない道になる。但し、高城麓に高来駅があったと仮定すると意味もある道になる（近世では高尾野往還と呼ばれる道で伊能地図にも記載がある）。またその南北路とほぼ直交して出水高校の前を東西に走る直線的な道路は近世の出水筋（薩摩街道）であった。昭和10年代までは松並木が残っていたという。

西出水小学校一帯の小字は「政所（マドコロ）」。政所に隣接して小字堀ノ内（出水工業高校敷地）小字関屋町（出水高校敷地）がある。この一帯に出水郡家を求めるべきと考える[10]。

古代の官道は数多くの調査例から直線的である場合が多い。直線的な道路が真北の方向にもとづくものであったり、少しずれて春分の「日の出」の方向であることに気付けば、古道とみなしてよいだろう。

3　大隅国・薩摩国の駅家追求の問題点

従来、延喜式記載の駅名の順序が「市来」から始まっているために出水市内に求めなければならないとの先入観に支配されて来た。市来駅を先頭に考える論者たちが末尾に記されている高来駅の位置を考慮に入れないのは不思議な話である。字義通りの地名を考えると、高城郡家の地が最有力候補となり、網津駅と田後駅の間に求めるのが筋だと考える。また駅家所在地が水陸交通の要地であったと仮定すると、中世・近世を通じて水陸交通の要地であった市来院の地に市来駅を求めるのは自然の推理でもある。薩摩国の入口にあった出水郡家の地が駅名記載にもれていたと考えてよいと思う。市来駅出水市内説を打破するためには、諸国の駅家比定地で小字名をもって駅家に当てる例がどれほどあるかをチェックする必要がある。

大水駅・高来駅の所在地をはじめ、大隅国・薩摩国の官道は難問の山積みが現実である。この一文か解決の突破口となれば望外の喜びである。

【　註　】

1～3　『薩摩国府跡・国分寺跡』　鹿児島県教育委員会　1975

4　『大隅国分寺跡』　国分市埋蔵文化財発掘調査報告書（7）　国分市教育委員会　2002

5　『宮田ケ岡窯跡』　姶良町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）　姶良町教育委員会　1999

6　『歴史の道調査報告』第2集「大口筋・加久藤筋・日向筋」　鹿児島県教育委員会　1994

7　『市来遺跡・老神遺跡』　出水市埋蔵文化財発掘調査報告書（4）　出水市教育委員会　1995

8　小園公雄　「大隅国府と日向国島津駅との古代官道について」『鹿大史学』第39号　1991

9　池畑耕一　「文字資料土器と蔵骨器の出土分布」『南端の文字文化』　1996　所収

　平田信芳　『地名が語る鹿児島の歴史』春苑堂出版　1997　p78に上記分布図を引用

10　平田信芳　ibid.　p124-p128　「出水郡家と市来駅の問題」

大隅・薩摩の古代官道

平　田　信　芳

（1）研究経過

1．「歴史の道調査報告」鹿児島県教育委員会、H.4～H.9

2．「古道を探る方法」中原遺跡発掘調査報告書所収、2003.3

3．県埋文センターでの高篠遺跡についての意見交換、平成16年１月

4．「古道を探す方法」地名研究会報、第89号、平成17年９月

5．木下良古代交通研究会長に同行、大隅・大宰府間の駅路痕跡調査、平成18年２月

（2）文献史料にもとづく追究

1．大宰府への距離（延喜式巻二十四、主計上）

日向国・大隅国・薩摩国：行程上十二日、下六日

大隅国は薩摩国・日向国を経由せずに直接大宰府に向かう駅路があったことを示す。大水駅はこの視点で求める必要があり、川内川をどこで渡ったかが着眼点になる。

2．石清水八幡文書の記事

天承二年(1132)、大隅正八幡から提出された「往古の大路宮坂麓の石躰に八幡の御名が顕現した」との上申が石清水八幡文書に残っており、往古の大路は大隅国から大宰府へ向かう駅路であったと考えられる。

隼人町宮内に石躰神社があり、その前に宮坂橋が架かっている。石躰神社の脇から志学館大学へと登る古道（現在はやぶ）が「宮坂」と見てよい。

（3）(1)の５、実地踏査の結果

1）十三塚の位置

上記「八幡の御名顕現」文書で宇佐八幡と大隅正八幡の八幡本家争いとなり、宇佐八幡から送られた密使が大隅正八幡に火をつけ、追手に討たれた。密使たち13人の塚が十三塚になったとの伝承がある。十三塚は古道に沿ってなければならない。

十三塚の地名、「大道」という地名、直線的な大字境界を求めることで古代道の痕跡を確認出来た。（別添地図）

2）「大人足形」地名の調査：時期的に若干くだるバイパスと見られる。

1. 隼人町松永の小字「古道」は牧園町下中津川の小字「大人形」につながり、さらに横川町につらなる。

2. 菱刈町徳辺の小字「大広形」は、魚野越の古道につらなり吉松町に出る。

3. 横川町上ノの小字「大人形」は山ケ野・永野へ向かう道と見て行かず（誤判断？）

（4）デスク＝ワークでの新発見

1）大峰遺跡の出土遺物：菱刈町大峰所在

赤高台の土師器・墨書（判読不能）

川内川の河岸丘陵にあるのに何故「大峰」：「大水根・大水祢？」

菱刈町教委の埋文担当者に周辺基礎データの調査を指導

2）中世山城の分布・諸令達廻文の経路etc.の確認（別添地図）

3）豊臣秀吉率いる島津征討軍帰還路の確認

4）十三塚原は分水嶺

1. 鹿児島空港・九州縦貫自動車道は分水嶺上に立地

2. 肥後国に向かう場合、分水嶺を辿る道が最短距離となりあまり川を渡らずに済む。

5）川内川の渡河地点の確認

1. 鹿児島県地誌で川内川の渡し船を調べた。20例中、２例が官渡、他は私渡。

官渡は曽木の滝上流の「下木場渡」と「下殿渡」の２か所

2. 昭和62年１月廃止の宮之城線が川内川を渡る鉄橋が下殿渡に架かっていた。

3. 下殿渡鉄橋の手前が西太良駅になるが、集落の古名は「曽木郷里」

のちの太良院の中心地：遡れば菱刈郡家、すぐ東隣に大峰遺跡がある。

此処が大水郷・大水駅の所在地と推定される。

4. 永野金山から北上する宮之城線は現在の２万５千分１図から消えているが、明治37年の５万分１図に永野麓から曽木へ通じる道が記されている。

6）稲積城をどこに求めるか。

1. 大隅国桑原郡稲積郷：７世紀末の重要課題は対隼人政策

稲積城は大隅国府の前身的存在：肥後国・日向国・薩摩国との連絡容易な地

2. 溝辺町竹子の稲荷下宮神社の祭神＝稲積神

3. 山名に「岡・丘」を用いる地域：大隅国府・薩摩国府の周辺に多い。

①横川町：貝吹岡・茶屋ケ岡・丸岡・二牟礼丘・雨祈岡・鏡ケ岡

②溝辺町：神割丘（高屋山陵所在地）・据石ケ丘・上人丘・弓削丘

③川内市：瀬ノ岡・清水ケ丘・安養寺ケ丘・日暮丘・横岡

④その他：（福山町）狐ケ丘・旭ケ丘

4. 溝辺町崎森：稲積城の存在と結びつけると、防人の遺称が考えられる。

5. 稲積城を溝辺に想定した上での駅間距離

大隅国府 ＝ 稲積城
大隅国府 ＝ 蒲生駅
蒲生駅 ＝ 稲積城
稲積城 ＝ 大水駅（曽木近辺）
大隅国府 ＝ 高篠遺跡

} ほぼ16km（古代の30里）

地名研究会報

第 94 号　　平成18年12月3日
鹿児島地名研究会

Ⅰ.第94回例会　　平成18年9月3日（日）　　於西郷南洲顕彰館研修室

（出会者）　青柳俊二・入来院貞子・上野堯史・内山憲一・川野雄一・永坂芳彦・浜田良知・繁昌正幸・肱岡修一郎・平田信芳・福元忠良　（計11名）

Ⅱ.大日本地名辞書読会　　P.566～P.567　　弟子丸・方後郷・韓国宇豆岑神社

Ⅲ.さつま町求名の地名

〔問題となった地名および事項〕　弟子丸、聴力不全で噛み合わぬ問答、豊前国からの移住先、廻城跡出土の鎧、過疎地の実態。注目に値する地名「求名」、溺、日の丸・中福良、総字図、会報100号以後、土地・八女・モマ次郎、頭無、猿屋・龍毛、皮籠作・七十地・小一倍、大師野、小字の配列（字絵図台帳の順番）、羽有、西南戦争の敗因

弟子丸

平田　前回プリントを忘れて読まなかったところです。弟子丸、方後郷、韓国宇豆岑神社、牧之原、葛例郷など、いわゆる国分の台地です。何か質問はありませんか。

浜田　弟子丸という地名は何か出典があるのですか。

平田　出典ですか。それは知りません。仏弟子という言い方はあるのです。平安時代には仏弟子になろうという意味合いで男児に弟子丸という名前をよく付けました。

浜田　清水に関係した弟子丸という人物のことを記した史料は？

平田　それは残っていないようです。恐らく建部一族に弟子丸という名前を付けられた人がいて、その人物が中心となって開いた集落。時代はいつか判りません。

浜田　台明寺文書や祢寝の建部氏文書では気付きません。

平田　出て来ませんか。

浜田　建部氏だろうけど。弟子よりも大きな名前を名乗るのでは。

平田　弟子丸というのは先程言ったように仏弟子になるという意味で、仏寺が勢力を持った頃、男児によく付けられた名前です。

浜田　出典とか、全国的に名前の例があったのでしょう。

平田　それは誰だったかな、名前の話を書いたのは。あっそうだ、角田文衛「日本女性の名前」という本で、仏弟子から来ているというのを読んだこおがあります。

浜田　弟子丸姓もどこかにある。

平田　吉田に弟子丸という姓があります。ただし吉田の弟子丸さんは清水の弟子丸から移って来ているのです。

浜田　ちょっと変わった名前ですね。

平田　アポック社の「日本地名索引」を見たら他にも弟子丸があると思います（後記：筑後国にあったが、今はない）。

浜田　私の本籍が清水の大字弟子丸です。

平田　男児に仏弟子にあやかる名を付けたのです。仏様の弟子になったら長生きすると

みられたのです。そういう意味で名付けられたのです。

浜田　これは最近聞いた話ですが溝辺氏から来たのじゃないかというのです。どこの溝辺氏か知らないけど。台明寺から来たのか？

平田　それは知りません。一般的には出家することを仏弟子になると云ったのでしょうから。

浜田　私が本籍を書けばお前の処は珍しい地名があるねと、よく云われました。

平田　それに近いのは、薬師丸。薬師丸は薬師如来にあこがれた命名です。その類だと思います。

聴力不全で噛み合わぬ問答

入来院　その本の名は判りませんか。

平田　「日本女性の名前」だった。

入来院　いいえ、このプリントの出所。

平田　「大日本地名辞書」、明治34年（1901)に吉田東伍が書いた。日本の地名研究の出発点となった本です。

繁昌　韓国宇豆岑を教えて下さい。

平田　韓国宇豆岑神社に行くと、神社の由緒が看板に書いてあります。はっきり豊前国から移って来たと書いてあります。

浜田　韓国宇豆岑神社に結びつく豊国は清水にもあります。

平田　あゝ、そうですか。何ﾍﾟｰｼﾞですか

浜田　えゝ、トヨクニ。

平田　トヨクニですか。

浜田　それから、ロクゴウ。

平田　ロッコウ。六甲山脈の六甲ですか？

浜田　いや、六つの郷、それとサンゴウというバス停があります。これは向花(ﾑｹ)にあります。

平田　ゴウはどんな字。

浜田　清水の小高い、昔の宇都屋敷。あの辺がやっぱり豊の国から。向花に豊ノ口という地名がありますね。

平田　トヨノクチですね。

浜田　これは小字名です。

平田　申し訳ない。十日ぐらい前から右の耳が聞こえなくなりましてね、非常に不自由しているのでう。サンゴウとはどんな字を書くのですか。

浜田　サンゴウ。三つのサト。キョウトのこと。

平田　なんですか。京都の京をゴウと読むのですか。

入来院　郷土の郷。

平田　判りました。三郷ですね。（例会後数日して耳鼻科に行く。耳垢が詰まっていたのが聞こえない原因。老人によくある話とのこと。お粗末な話）

豊前国からの移住先

浜田　昔はまだ他にも豊平とか、豊後の地名との結び付きを思わせるようなものがあったのですよ。今はもうありませんが。

平田　「豊」が付くのは、すべて豊前からというわけではない。豊後坂とか、いろいろありますが「豊」は豊かな土地に付けられる地名ですから、すべて豊前からの移住民に結び付くと速断するわけにもいかない。

浜田　しかし「豊」が付くのは。

平田　判りました。はっきりしているのは国分周辺では 714年に豊前国の民二百戸が移された中に溝部（溝辺）があることです。これは豊前国溝部に由来します。

浜田　豊平という小さな部落もあった。今はもうない。

平田　豊平もあったのですか。それから、

国分に多い名字で「赤塚」というのがある。例えば赤塚進行堂。大きな文具店がありますが、赤塚という名字は恐らく豊前国から移って来た人じゃないかと思うのです。

浜田　あの頃は国府を守るために周囲に配置された。

平田　はい。豊前国からの移住者が配置されたのでしょう。

浜田　豊地とか豊平も。

平田　最近、小園氏が止上（鳥神）神社も渡来系の神だと言い出した。それから基本的には「韓国」の付く神ですが、大隅国に韓国宇豆峰神社、豊前国は辛国神社です。出雲国に辛国が付く神社が延喜式に五つか六つあるのです。それからもう一つ大事なのは宮内省に韓神が二つ祀られていることです。これは延喜式に書いてありますから、天皇家が韓神を祀るのは、向こうから来たことを示すのだろうと思います。

浜田　昔は国分村にはあまり田圃はなかった。清水の田圃と上井・下井のものが田圃の中心になります。上井氏の処は上井城の近辺が中心。国分には田圃はあまりなかった。今の国分の市役所辺りは、昔は川だった。

平田　そうですね。

浜田　国分の田圃はわずかなものだった。

入来院　赤塚はどういうことですか？

平田　豊前国に赤塚古墳という有名な古墳があるのです。こちらには赤塚と呼ばれる古墳がないのです。また赤塚は九州では最も古い古墳になります。

廻城址出土の鎧

浜田　廻城址が発掘されたことがありますね。あの時、鎧が出てますね。鉄砲が使われる時代に何故鎧が大事にされたのかなと思います。

平田　あまり関心がなかったので松下美術館に展示されているものをよく見ていないのですけど。

浜田　鎧は焼けていないのです。

平田　埋めたのですね。

浜田　焼ける前に埋めるのかなと思って。

平田　城とか寺とか神社などで、守り神としていろんな物を埋めることがあります。城の場合だったら、お金を埋める場合もあるし鎧を埋める場合もあるでしょう。鎧などは普通は埋めないでしょう。

浜田　負けたらそれを取られるのじゃないですか。

平田　城を築く時に武運長久や安全の為に前もって埋めて置く。地神に捧げる意味、そういうのなら考えられるけど。戦争をしていて隠すために埋める暇なんかないですよ。それこそ着たまま逃げるのが精一杯です。鎧を隠すほどの意味があったのか、考えられないのじゃないか。

浜田　それは立派な鎧ですよ。

平田　立派な物ほど守り神として埋める方がよいのじゃないかな。

浜田　埋めた物としか考えられない。立派な鎧を敵に渡すのが惜しくて埋めたのじゃないか。・・・（この後、数名の発言があるが聞きとれず）・・・あすこで戦死したのは？

平田　島津忠将です。

浜田　途中でやられるのですね。

平田　馬立塁です。（わいわいがやがや。以下、数名の発言。聞きとれず）

過疎地の実態

平田　先週だったかな、福山の佳例川で霧島市教委の西南之役史跡巡りをするとのこと

で出掛けて行きました。現地の説明で驚いたのですが、大字佳麗川で人口が 440名。そのうち小学生が20名というのです。少な過ぎると思うのです。しかも小学校はなくなっているのです。鹿児島県の過疎化現象というのはもっと注目しなければ大変なことになる。

浜田　20年ほど以前ですが、ある所で集落の人口は 120名ぐらい。数十軒のうち小学生はゼロ、中学生１人、高校生１人。昭和47～48年頃の話です。

平田　そういうことを感じます。

日州街道跡

平田　日州街道跡を歩きましたが昔のままの状態で残っていて、これは注目し直す必要があると思いました。白銀坂(ｼﾛｶﾞﾈｻﾞｶ)や龍門司坂(ﾀﾂﾓﾝｼﾞｻﾞｶ)が国指定に近々なりますが、日州街道跡は昔のままの状態で杉木立の中の道がずーっと続いています。

浜田　国分・霧島でも古代の道を歩こうという計画があって呼びかけがあるのですが、年齢的に体力的に付いていけません。

平田　ここらで休憩しましょう。

さつま町求名の地名

入来院貞子

まだ何回も出席していないのにやってみようと思ったのは、鹿児島の地名の読み方がさっぱり判らなかったことと、自分で調べることによって少しは判るようになるかな思ったわけです。大谷と書いてウタニと私は絶対に読めないと思います。矢吹先生から入来文書の地名一覧表で漢字ではどう表わしたらよいかの問い合わせが来て判らない時には平田先生にお聞きしていました。自分でも少し勉強しようと思って引き受けました。

さつま町はわりと近い処だし、永野・中津川・求名のどれがいいかと言われた時、求名というのは珍しい地名だと思ったものですから、求名をやりますと言いました。調べてみたら三百いくつもの小字があり、一番どっさりありました。頂いた資料には小字の名前・読み方・意味を書いたのがありました。ワープロで表を作って打ち込んでいましたが、プリンターがおかしくなり、現在ワープロのプリンターは作っていないとのことで、急遽パソコンに変えました。エクセルがいいとのことでその初歩から始めました。この表を作るのも大変で、クリックから始め、いろいろなことを一生懸命やりました。時間をとった割にはちゃんと出来なかったようです。

頂いた資料を見ると同じ名前が結構あっちこっちに出て来るのです。例えば岩下が３カ所、宇都が４カ所とか、宮が二つあったり、木場が三つあったりです。場所によって読みも意味も違うのがあったりするので、整理して考える柱がいる：公民館単位がいいかなと思い、役場を訪れて役場の方に分けてもらいました。今は小字もすっきりしなくて適当なところがあるとのことでした。

大体「薩摩町郷土史」の順序になっていますが、出入りが沢山あり公民館単位にするだけで大分かかってしまいました。初めに分類を作ってからやればよかったと反省しています。また分類の仕方で判らない点も平田先生にお伺いすればよかったのですが、連絡するのが遅くなりました。今、先生に見てもらいましたら大分間違いもあるようです。今回は地名を見て頂くだけにいたします。次回整理したものを出そうと思います。

感じたことは地名自体が求名の方にも全然なじみが無くなっている所が多いということでした。そんなに広くない所に 320も付いているのかと不思議に思います。

川とか山とか地形を添えないと理解しにくく、等高線とか川などを入れた地図を作りたかったのですが、なかなかそこまでは行きませんでした。そういうことで説明を終わります。

〔質疑応答〕

平田　薩摩町郷土史の「地名の解説」にもとづいてこの表を作られ、○印を付けられたのでしょうが、解釈違いによって○印が違うのは仕様のないことです。例えば最初の堂ケ迫。これはお堂から来ているから信仰地名と見るべきです。その隣の城郭・集落地名欄に間違って○印が付いたかも知れませんが。

入来院　阿弥陀堂があったことを信仰と思うのか、それとも建物を主とするのかと。

平田　薩摩町郷土史にもとづいて○印を付けられたのでしょうから、その辺は理解してあげてください。

注目に値する地名「求名」

平田　この地域が面白いと思ったのは求名(ｸﾞﾐｮｳ)という文字がどちらも漢音でなく呉音であることです。漢音で読めば「ｷｭｳﾒｲ」になります。「ｸﾞ・ﾐｮｳ」と両方とも呉音で読んでいる地名はちょっと珍しい。それから狭い地域なのに小字数が多いのは早くから開けて地域だからいろんな地名が付けられているのです。今日の会報で文章化してありますが、大隅・薩摩の古代官道。これと結び付くのが豊臣秀吉が引き上げて行った道になります。境田城、戸子田城、熊田城などの位置を理解するために鹿児島万能地図をコピーしておきました。

戸子田はこの辺です。「トッコ、トッコどん」に由来する地名と考えます。トッコが来て鳴く田圃ということです。熊田城とか境田城の側の道を通って秀吉は川に沿って帰って行ったと思います。曽木（西太良）から下殿渡(ｼﾓﾄﾞﾉﾜﾀｼ)を経て羽月に出たと思います。地元では羽月(ﾊﾂｷ)というのだろうと思いますが、広辞苑によると「ﾊﾂﾞｷ」になる。その辺はどうですか。「ﾊﾂｷ」が正しいのでしょか。鹿児島弁で言えば「ﾊﾂﾞｷ」でしょうか。広辞苑によって「ﾊﾂﾞｷ」と書かざるを得なかったのですが。鹿児島県の地名辞典類はほとんどが「ﾊﾂｷ」になっています。広辞苑では葉月：八月に祭るのであれば「ﾊﾂﾞｷ」になるのです。

羽月川の右岸を淵辺城、平出水城、小川内を経て秀吉軍は引き上げている。この道が古代の官道を引き継いでいるのだろうと思います。

前回も説明しましたが隼人町の宮坂麓から志学館大学の方へ上がって行って十三塚原に出ます。十三塚原は平坦な台地ですが、地図をよく見ると分水嶺になっています。分水嶺を辿って行くと永野金山にでます。これは古い地図ですから廃線になった宮之城線が載っています。このルートを通って古代官道は北上しただろうと思います。そして曽木滝のちょっと上流に江戸時代、下殿渡という公営の渡し場があった。秀吉は多分そこで川内川を渡っただろうと思います。宮之城線は古代官道に沿って作られたとも思います。

また薩摩町には地下式板石積石室の別府原古墳群があります。大口市でも羽月川右岸に大住古墳群や焼山古墳群などがあります。

今後菱刈町教委の担当者と連絡しなければならないことですが、この地図でいうと下荒田という所、この一帯で見つかったのが大峰遺跡です。川岸に大峰という地名が付くのは山でもないのにちょっと不思議です。大水根とか大水祢と書かれたと仮定すると、古代官道との関連から此処が大水郷・大水駅の候補地として浮かびあがって来ると考えます。会報93号にそのことを書いてあります。

いろいろ意見を交換した方がよいので前回の反省とか今回のさつま町の地名について質問・意見があれば遠慮なく出してください。

搦（からげ）

平田　入来院さんが準備された公民館別の地名から眺めて行きましょうか。上狩宿（カミカリジュク）、橋掛（ハシカケ）。これは橋を架けることだし、狩宿は狩猟に出掛けた時の宿の意味でしょうね。境田（サカイダ）は境界の田圃。搦というのは土手とか土留めのこと。搦さんとか七搦さんとかいう名字が鹿児島にあります。

入来院　薩摩町郷土史によると「迫田が多く土手を竹搦で作った田があったのか、山の獲物を縛って山から出て来た所の意か」と書いてあります。

平田　獲物を搦げて降りて来た？やっぱり土手を搦で土留めしたということでしょう。熊本県には有明海沿岸では搦を作って干拓をしています。熊本県では搦（カラゲ）でなくて、搦（カラミ）です。

入来院　戸子田「トコはとこしえに永くかわらぬ意味があることから一番早く開拓された田を表わしたものか」と書いてあります。

平田　それは薩摩町郷土史の解釈でしょう

入来院　そうです。これを一生懸命考えて来ました（編集時後記：苗床田・苗代をさすものもあるかと考えたが、苗代という表現が多く、苗床は見掛けない）。

日之丸、中福良

浜田　日之丸もあるでしょう。

入来院　何ですか？

浜田　日之丸。

入来院　そうなんですよ。

平田　日之丸という小字は鹿児島県は多い

入来院　多いのですか。

平田　昔、男の子に日之丸と付けたのです

浜田　一応、よい名前。

入来院　あまりそれを言わない方がいいのじゃないかと思うのです。さかんに日之丸の発祥をいうので。

平田　あゝ、入来の大宮神社のこと。

入来院　それと君が代とか。

平田　あれをあまり言わない方がよい。日之丸という地名は多いのです。先程出て来た弟子丸とか薬師丸と同類の願望地名です。

入来院　薩摩町の分析によると「地質のよい田で日本一からの転化」と書いています。

平田　日本一というのは、内之浦に日本一さんがいます。島津の殿様からお前は日本一の腕前だということで名字をもらった人の子孫がいます。それは由緒がはっきりしてしているのです。じゃー１枚目はいいですか。それでは２枚目。上中福良（カミナカフクラ）と下中福良。黒鳥は渡り鳥の黒い鳥が浮かんでいたのでしょうね。

入来院　鳥が多い土地とか。

平田　鳥はカラスと名付けます。熊田は昔熊が出て来たのでしょうね。広橋は広い橋。

戸子田はさっき言った通り、トッコどんだと思います。

入来院　トッコどん？

平田　フクロウのこと。ポーポーと鳴きます。

入来院　そんなのは書いて下さらないと、私は判らない。どこを調べても判らないから併せて整理した方がよいですね。

平田　「トッコ・トッコウ」という地名は多いのです。

入来院　そうですか、フクロウのこと。福良・袋というのは、入口が狭くて中が広い地形の呼び名という感じです。

平田　鹿児島には多いのです。福良は「ふくらんだ形」のことですね。中がふくらんだということで特に丁寧に中福良と表現するのです。川の流れによってふくらんだ地形が出来ます。例えば天文館電停付近の小字は中福良です。それから現在「はやとの風」で有名になっている肥薩線の嘉例川。あすこにも中福良小学校というのがあります。中福良は地名調べにも人気があって、その地名を拾った人は沢山います。

堀之口

浜田　堀之口という地名はどういう地名かかいつまんで説明して下さい。

平田　堀之口とか堀之内は中世の豪族屋敷に関係する地名です。堀を防御施設としたのですから、その地名は多いのです。

浜田　田上にも堀之口という地名がある。

平田　田上には当然堀を掘った屋敷を築いた人がいたのでしょう。

浜田　豪族がいた？

平田　いたと思います。田上は春山の方に出て恋之原から伊集院へ出る街道沿いです。そういう処には豪族がいて、にらみをきかしていたでしょう。室町時代から戦国時代にかけては豪族が関所を設けて通行料を取ったりしますから。そう言った所には堀之口や堀之内という地名が必ずあります。

・・・（聞き取れず）・・・・

浜田　高山の方にも搦がある。

平田　高山にも搦があるの？

浜田　それと地図に黒鳥とある・・・

入来院　何かしら。先生から貰った資料と役場の資料を写す時に間違ったのかな。これには黒鳥とあるから、そうなんでしょうね。

平田　公民館の地名と町史の地名とが一致しないね。

入来院　一致していないですね。

浜田　中世の地名は興味があるのだけど、なかなか地図と一致しないのがある。

入来院　入来院文書に出て来る小字を地図の上で整理したものがあるかということですか。いや、ないと思います。地名の一覧表はあるみたいだから、それを地図の上に落とすことが必要。

浜田　塔之原は検討されているのでは。

入来院　塔之原といえば樋脇の方ですね。

平田　だから、こういうのを付けて解説する努力が必要ではないか。

入来院　本当はね。これは役場もすぐには作成出来なかったのです。さつま町というのは以前の薩摩町だと思ったら、今は宮之城のことなんですね。さつま町の課長さんに聞いたら今は水害の対応の真っ最中で、忙しいところに邪魔して申し訳なかったのです。

平田　今は県の土木事務所や河川課はてんやわんやですね。

入来院　ですから小さくなってあまり聞け

なかったのです。これらは宿題として、また役場に行って資料を探して貰います。入来院文書に出て来る地名の一覧表はあるみたいです。

浜田　県立図書館に行ってもなかなか古い資料は見せてもらえない。維新史料室もそうです。維新史料を出して欲しいと言っても、探してもらって、見付け出すのに三日ばかりかかる。

平田　行く場合でも前以て連絡しなければ向こうも面食らうでしょう。少なくとも十日前とか二週間前には連絡して、行くからこういうものを、こういう目的で調べたいからと連絡をとってから行かないと担当者は面くらいますよ。

総字図

入来院　薩摩町郷土史には地図が付いていたので、これを半分に切って。

平田　小さくしたのですね。

入来院　小さくすると見えないと思ったもんですから、それを２枚に貼り付けて役場に送って地図に境界を入れてくれと頼みました。

平田　今の話を聞いて大体判って来ましたが、大抵の郷土誌には小字図や総字図が付いています。付いていない郷土誌はないと思います。

浜田　今の郷土誌で載っていないものはない。古いのは載っていないものがある。小字図は別に。

平田　別になっている？

浜田　別になってるかどうかはは知らんけども、どこの郷土誌でも上・中・下があれば必ず下巻あたりが資料編になっている。町村役場に行けば、古いのになると、これ小字図がないよと言ったら、別に作ってくれます。役場に行けば大抵ありますよ。

会報100号以後の計画

平田　この研究会は 100回までは一応今までの形式で続けて、100号まで出したら打ち切ろうと思っています。今年になってから左の眼は白内障でかすんで見えないし、右の耳は全然聞こえないのです。今日は話を聞いていても判らないところも多く、いよいよ寿命が来たな、と。

浜田　皆、そうですよ。

平田　それで大事なことは 101回以降は薩摩国とか大隅国別に分けて、大字ごとに地名一覧表と地図を作っていかなければと思っています。それが残された仕事になります。その次は今まで集めた資料が散逸しないようにすること。それから後は地名研究会の主宰を譲る考えです。私は県下の総字図を相当数集めています。そうでないと県下の地名はまとめられません。会則も作らない会計報告もしないいい加減な会運営をしていますが、実際このような会をやっていくと赤字になるのが普通です。二十年ほど前に南日本新聞の宝シリーズの原稿をこの会で受け持ちました。最初の原稿料は執筆者に分けましたが、二回目に貰った原稿料10万円は会費としてプールしました。また会費として毎回出して貰った分の残りを合わせると16～17万円ほどあります。薩摩国の地名の印刷費に当てるつもりです。どれくらいで出来るか判りませんが、一部2.000円とした場合、500冊で100万か。

浜田　ある会で会員一人に20冊を割り当て800冊ほどさばけた。

平田　そんなに売れないと思う

浜田　１冊の値段にもよりますが。

平田　500部作らず300部ぐらいでもよいと思う。判りました。100万円ぐらいの見当で出して行けば、何とかなるでしょう。そういうものを作りあげて、この世におさらばしたいと思います。

浜田　「川」が終らないでしょう。

平田　「川」は12月31日で終らせます。

浜田　「川」の次は何ですか。

平田　「川」の次は西南戦争の戦死者名簿を作りあげること。それをやらなきゃ、私には熊本から資料を持ち帰った責任がありますから。あれは整理しなければならない。その後は地名に専念します。今まで「川」シリーズで大隅国府と薩摩国府を説明しました。近いうちに多祢国府を解説します。多祢国府については２年前鹿大史学会で発表していますので地図を付ければ論文になるわけです。大隅・薩摩・多祢：最南の国府はすべて解決したと思います。

浜田　多祢国府は？

平田　もう２年になります。残っている鹿児島県の地名はまとめあげます。

入来院　そういう地名は先生でなきゃ判らないですね。

平田　今までの会報の中で触れています。

入来院　そういうのをまとめて下さい。

平田　地名辞典のようなものを作る暇はない。そういうのは先ず索引作りをしなければならない。会報も 100号になると、会報〇号にこういうことが盛り込まれているとの索引を作れば地名辞典代わりになります。その時は何人かの加勢をお願いします。

上野　全部を出版するのじゃなくてもインターネットで紹介する方法もある。これからは情報の伝達をどうするかという方法の問題になる。

平田　インターネットでね。

上野　どんな情報を発信するかが問題で、受け手側の信頼が大事です。情報の公開は撰べばきりがない。金を使わずに情報を集められる時代です。

平田　インターネットで「川」の情報を引き出そうとするのだけど、川の情報はほとんど出て来ない。

入来院　私なんかは見ているだけでブログなんて書かないのです。

平田　インターネットを使うのであれば、誰かにデータを提供して打ち込んでもらえば相当なものは準備出来ます。

上野　皆で手分けして読み取って貼り付けたらかなりのものが出来ます。

平田　それは 100号が過ぎてからの相談としましょう。

入来院　インデックスを付けるのがちょっと大変ですね。インターネットで見るにはどうしてもインデックスが必要になります。鹿児島県のどこの地名、それを50音で検索出来るのが。

平田　インデックスを作る作業が最初でしょうね。この地名は〇号に書いてあるとしておけば、後の人たちは処理し易いでしょう。

浜田　インターネットはほとんどの古典の１ﾍﾟｰｼﾞから最後まで打ち込んである。

平田　暇な人が多いのですね。

浜田　国立博物館とか大学の研究室単位でいろんな古典を打ち込んである。続日本紀も打ち込まれている。

平田　国史大系なども？

浜田　あんなものも打ち込んである。

平田　そういう時代になったのでしょう。

インターネットを見ていたら情報が多すぎてうんざりします。

入来院　インターネットで検索することを覚えたら、どこへ行かなくても済んじゃいますよね。私はこの頃やっと航空券とかも自分で買えるようになりました。私、Jaler の会員ですから。

平田　インターネット時代になり、携帯電話で事を済ますようになったら、われわれはもうつき合いきれないな。

土地(ﾄﾞｳﾁ)・八女(ﾊｯｼﾞｮ)・モマ次郎

繁昌　2ﾍﾟｰｼﾞの土地と八女、それと。

入来院　どこかに書いていたのですけど。

平田　土地は稲富神社の前の土地で、堂の前の土地(ﾄﾞｳﾁ)だと、薩摩町郷土史に書いてあります。それから八女、通称下町(ｼﾀﾏﾁ・ｼﾓﾏﾁ?)、昔、求名町は六戸と呼ばれていた、と。何なのか意味は判らない。この解説は。モマ次郎というのは何のことですかね。

入来院　城(ｼﾞｮｳ)というのは球磨陣。岡の東に城ケ段という地があり、北原軍の本陣の跡ではなかろうか、と書いてあります。モマ次郎は稲富神社の東前の地で、昔ムササビが多く棲んでいた。

平田　モマとはムササビのことか。

入来院　ムササビが棲んでいた所と書いてあります。

浜田　2ﾍﾟｰｼﾞの土地(ﾄﾞｳﾁ)と堂尾を見て私の郷里のことを考えると、土地は堂地ではないかと思うけど。

入来院　土地(ﾄﾞｳﾁ)と堂尾(ﾄﾞﾉｵ)は全然別の所です。

浜田　私の郷里は台明寺の御堂があった所と言われています。

頭無(ｶｼﾗﾅｼ)

浜田　5ﾍﾟｰｼﾞの頭無は？

平田　これは尻無(ｼﾘﾅｼ)の反対でしょう。尻無川というのはどこへ潜ったのか判らない川。頭無はどこから水が出て来るのか判らない川。そういう理解の方がいいと思う。結局水源がよく判らない川のこと。

入来院　「谷川の源流の地」と書いてあります。

平田　頭無は水源の場所をはっきりつかまえていないということでしょう。

猿屋・龍毛

入来院　面白かったのは猿屋というもので「ｻｲﾔ」と読むもの。

平田　意味不明とした方がいいのじゃないかな。猿屋はどこにあるのかな？

入来院　ちょっと待って下さい。「アイヌ語でサルは湿地や薮だ」と書いてあったものですから。

浜田　8ﾍﾟｰｼﾞの黒鳥にある龍毛は？

平田　これは意味不明でしょう。

入来院　龍毛は「台地」と書いてありました。これは？

平田　ただ「台地」と書いてある。意味は判りません。

皮籠作・七十地・小一倍

浜田　同じﾍﾟｰｼﾞに、皮駕籠作(ｶﾜｶｺﾞｻｯ)というのがありますけど？

入来院　竹籠に石を詰めて崩れ地を止めた

平田　竹籠に石を詰めた所。

入来院　浸食崩壊に関わる地名。

浜田　7ﾍﾟｰｼﾞの七十地(ｼﾁｼﾞｯﾁ)と小一倍(ｺｲﾁﾊﾞｲ)は？

入来院　小一倍は不詳と書いてあります。

平田　判らない。

入来院　もう一つは何ですか？

七十地。何か土地の大きさのことじゃないですか。あゝ、此処に出て来た。「七十地は温水(ｼﾂﾐ)が出て来た所」と書いてあるけど意味の判らない説明だな。

大師野(ｵｼﾉ)

浜田　大師野というのは？

平田　川内高校に押野(おしの)という先生がいたけど、元々は石川県の出身です。昔、伊瀬神宮の人々で御師(ｵｼ)と呼ばれて御札を売って歩いた人々がいた。その人々と関連がある土地かなと思ったりもしますが、判りません。

浜田　自然地名に○がしてあります。

平田　信仰地名にした方がいいかも知れません。

入来院　中大師野、下大師野をですか。

平田　大師野をです。

小字の配列（字絵図台帳の順番）

浜田　小字の並べ方はどうなっているのですか？東からとか西からとか北からとかの順番ですか？

平田　各市町村によって違うでしょうけど土地台帳を作る時に測量して行くでしょう。その順番の配列、竿次帳の順番。それを踏襲していると思います。名寄帳とか検地帳とかいろいろありますが、帳簿は測量の順番が基本です。

浜田　字絵図台帳の順番も？

平田　そうです。

入来院　これは私が気付いた順番かも判らないのですけど。

平田　それはないと思います。

入来院　そうですか。薩摩町郷土史を見ながら、その順序に大体添っているつもりなんですけど。

平田　役場の台帳の順番は竿次帳の測量の順番になっている。

浜田　字絵図にある1番・2番・・の番号に対応するもの？

入来院　そうです。この地図を見ながら、1番・2番と並べて行きました。役場には全然ないのです。だから、この地図を基本にしてやりました。薩摩町郷土史の「町名の由来」というのは分類してなくて、だらだらと記述してあるので、それを一覧表にして字絵図と見比べてやりました。

平田　役場に台帳はなかった？

入来院　えゝ。

平田　総字図にもとづいて処理された？

入来院　だから、うんと時間がかかったのですよ。

平田　これは薩摩町郷土史に書かれている順番ではないのですね。

入来院　この一覧表と一致しているわけではないのです。地図を分類したものです。大体はまとまっているのですけど。

羽有(ﾊｲ)

浜田　最初の羽有というのは？

平田　意味は判らない。

入来院　鶴田から飛んで来た鶴の羽があったので羽有と付けたと書いてありますけど。それも意味がよく判らない。

平田　鶴の羽があったから羽有？、郷土史の説明は意味の判らないものが多い。

先程言いましたが、発表の機会は現段階の計画では残り6回しかありませんから希望があれば申し出て下さい。発表をお願いしたい方々は出会していません。

上野さんが今年中には東海道の参観交替路を歩く予定だそうです。上野さん、参観交替の話はいつ頃できますか。3月頃？

上野　三月頃には終りたいと思っています

平田　内山君が西郷軍の可愛岳からの退却路を歩く計画だそうですから、それも期待できます。

西南戦争の敗因

浜田　薩軍の敗因は弾丸もない、食料もない、金もない。官軍は何倍もの物があった。

平田　財政的に太刀打ち出来なかった。

浜田　明治維新は、薩摩の金は結局薩摩天保銭だったから。敗れた原因はやっぱり物量ですよ。

平田　面白いテーマだけど地名と関係ないから、どうするかな。三月ぐらい、そういう話を叩き台として出してみますか。いろんな話が出て来るから、反って面白いかも。

入来院　私は準備の差だと思います。大久保利通が周到な準備をした差だと思います。

平田　西南之役を語ったら、それぞれ一家言あるでしょうから、いろいろな意見が出て来ると思います。いつかやりましょう。

・・・（以下、録音なし）・・・

さつま町求名の小字分類

公民会名	小字名		1 信仰	2 城郭・集落	3 土地。区画	4 市・街・交通	5 水利・川・池	6 人名・職掌	7 開発地名	8 職業・産業	9 田畑	10 瑞祥	11 自然	12 位置	13 形状	14 目印	15 侵食・崩壊	16 川原・湿地	17 気象	18 意味不明	訂正
下手	羽有	ハイ	○																		
下手	堂ヶ迫	ドウガサコ	◎	○																	1
下手	梶原	カジバイ				*							○								
下手	船橋	フナバシ					○														
下手	岩川	イワガワ								*			○								
下手	日の丸	ヒノマル						◎					○	*							1
下手	桜木	サクラギ											○								
下手	平原	ヒラバイ											◎					○			1
下手	樋ノ口	テノクチ					○														
下手	川原	カワラ																○			
下手	小森	コモイ	○																		
下手	前田	マエダ									○										
下手	早田ヶ丸	ワセダガマル									◎							○			1
下手	迫田	サコタ									○										
下手	切通	キズシ				◎			○												1
下手	石行	イシキ					*							○							
下手	宮ノ前	ミヤンマエ	◎	○																	1
下手	西平	ニシビラ												○							
下手	峯本	ミネモト												○							
下手	西山	ニシヤマ		*										○							
下手	竹ノ下	タケンシタ											○	◎							1
下手	寺屋敷	テラヤシキ		○																	
下手	古園	フイゾン		○																	
下手	通山	ツイヤマ				○															
下手	出脇	デワッ					○														
下手	宇都	ウト													○						
下手	上兎田	カミウサッダ											○								
下手	道下	ミチシタ				*								○							
下手	湯ノ谷	ユノタイ											○								
下手	大迫	ウサコ													○						
下手	蕨川内	ワラビゴッ											*	○		◎					1
下手	脇	ワッ		○																	
下手	横手	ヨコテ					○							◎							1
下手	上の段	ウエノダン												○							
下手	岩下	イワシタ												○							
下手	谷川	タイガワ					○														
下手	ウケノロ	ウカノクチ													○						
下手	大谷川	ウタイガワ					○														
下手	境ノ元	サケンモト												◎		○					1
下手	犬木屋	インキヤ														○					
下手	化鳥ヶ山	ケチョガヤマ												○						◎	1
下手	白原	シラバイ											○								
下手	桃木ヶ迫	モモキガサコ														○					
下手	蜂ノ巣	ハッノス											○								
下手	鍋ヶ迫	ナベガサコ													○						
下手	山中	ヤマナカ												○							
下手	宮ノ前	ミヤンマエ	○											*							
下手	宮之脇	ミヤンワキ	○											*							
下手	大坪	ウツボ			◎		○														1
下手	湯ノ尻	ユノシイ												○							
下手	御倉原	ミクラバイ	○								*										
下手	橋ノ口	ハシノクッ				◎								○							1
		○	5	5	0	1	7	0	1	0	2	0	9	12	4	3	0	3	0	0	
		◎	2	0	1	2	0	1	0	0	1	0	1	3	0	1	0	0	0	1	
		*	0	1	0	2	1	0	0	1	1	0	1	3	0	0	0	0	0	0	

公民会名	小字名		1 信仰	2 城郭・集落	3 土地。区画	4 市・街・交通	5 水利・川・池	6 人名・職掌	7 開発地名	8 職業・産業	9 田畑	10 瑞祥	11 自然	12 位置	13 形状	14 目印	15 侵食・崩壊	16 川原・湿地	17 気象	18 意味不明	訂正
下中福良	前田	マエダ									○										
下中福良	新屋敷	シンヤシキ		○																	
下中福良	中島	ナカシマ												◎	○						1
下中福良	土地	ドウチ	○											*							
下中福良	瀬戸内	セトウッ													○						
下中福良	宇都	ウト											◎		○						1
下中福良	滑	ナメイ													○			◎			1
下中福良	辺母木	ヘブキ													○					◎	1
下中福良	長迫	ナガサコ													○						
下中福良	山下	ヤマシタ												○							
下中福良	乱橋	ミダレバシ				◎	○														1
下中福良	立迫	タッサコ	◎												○						1
		○	1	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	7	0	0	0	0	0	
		◎	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	1	
		*	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	
求名町	樋ノ口	テノクチ					○														
求名町	藤川	フッコ					○						*								
求名町	野平	ノビラ											○		*						
求名町	八女	ハッジョ		○																	
求名町	モマ次郎	モマジロウ											○			◎					1
		○	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	
		◎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	
		*	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	
上中福良	堂ノ尾	ドノオ	○											*							
上中福良	古園	フイゾン		○																	
上中福良	城	ジョウ		○																	
上中福良	ゼミ	ゼン				○										*					
上中福良	北平	キタビラ					○								*						
上中福良	中ノ段	ナカンダン									○			*							
上中福良	北山ノロ	キタヤマンクッ												○							
上中福良	打越	ウッゴシ				○															
上中福良	内木場田	ウッコバダ							○												
上中福良	中園	ナカゾン									○										
上中福良	笹原	ササバイ											○								
上中福良	大丸	オオマル						◎			○										1
上中福良	平木場	ヒラコバ		○																	
上中福良	辻	ツジ				◎				○											1
上中福良	前平	マエビラ												○							
上中福良	小池	コイケ					○														
上中福良	坂ノ下	サカノシタ				○															
上中福良	中山ノロ	ナカヤマノクッ	○											*							
上中福良	向川	ムカイガワ												○							
上中福良	下り野	サガイノ	◎											○	*						1
上中福良	松元	マツモト														○					
		○	2	3	0	3	2	0	1	1	3	0	1	4	0	1	0	0	0	0	
		◎	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		*	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	2	1	0	0	0	0	

公民会名	小字名		1 信仰	2 城郭・集落	3 土地。区画	4 市・街・交通	5 水利・川・池	6 人名・職掌	7 開発地名	8 職業・産業	9 田畑	10 瑞祥	11 自然	12 位置	13 形状	14 目印	15 侵食・崩壊	16 川原・湿地	17 気象	18 意味不明	訂正
搦	樋掛	テカケ					○														
搦	坂ノ上	サカノウエ				◎								○							1
搦	枦場	ハゼバ								◎			○								1
搦	船川	フナゴ													○						
搦	青木	アオキ											○								
搦	カンゲンが平	カンゲンガヒラ	○												*						
搦	橋掛	ハシカケ				◎	*								○						1
搦	水溜	ミッタメ					*						○					◎			1
搦	貫木場	センコバ							◎						○						1
搦	中野	ナカノ									○										
搦	中尾	ナカオ												○							
搦	小達山	コタツヤマ											○							◎	1
搦	井手段	イデンダン					○														
搦	牟田元	ムタンモト									○							*			
搦	山神段	ヤマンカンダン	○																		
搦	押口	オセグチ												○							
搦	橋掛口	ハシカケンクチ				◎								○							1
		○	2	0	0	0	2	0	0	0	2	0	4	4	3	0	0	0	0	0	
		◎	0	0	0	3	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
		*	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	
橋掛	池平	イケビラ					*							○							
橋掛	椨香	タフコ								◎			○								1
橋掛	道下	ミチシタ														○					
橋掛	八久保	ハチクボ													○						
橋掛	平	ヒラ												○							
橋掛	平田	ヒラタ						○			◎										1
橋掛	木場田	コバダ							○												
橋掛	石塚	イシツカ	◎													○					1
橋掛	植園	ウエゾン		○																	
橋掛	橋之口	ハシノクッ				◎	○							*							1
橋掛	迫畑	サコバタケ									○			*							
橋掛	二反田	ニタンダ									○										
橋掛	西ヶ丸	ニシガマル		○																	
橋掛	前田	マエダ									○										
橋掛	宮ノ元	ミヤンモト	○																		
橋掛	松山	マツヤマ											○								
橋掛	山伏塚	ヤンブシヅカ	○																		
橋掛	水堀	ミッポイ					○							*							
橋掛	草場	クサンバ								○											
橋掛	芋ヶ迫	イモガサコ	○																		
橋掛	中原	ナカバイ									○			*							
		○	3	2	0	0	2	1	1	1	4	0	2	2	1	2	0	0	0	0	
		◎	1	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		*	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	

公民会名	小字名		1 信仰	2 城郭・集落	3 土地。区画	4 市・街・交通	5 水利・川・池	6 人名・職掌	7 開発地名	8 職業・産業	9 田畑	10 瑞祥	11 自然	12 位置	13 形状	14 目印	15 侵食・崩壊	16 川原・湿地	17 気象	18 意味不明	訂正
上狩宿	現王	ゲンノ	◎													○					1
上狩宿	岩ノ元	イワンモト													○						
上狩宿	渡瀬口	ワタセグッ				◎	○														1
上狩宿	切山師	キヤマシ						○		◎											1
上狩宿	立山	タテヤマ	○																		
上狩宿	上立山	カンタテヤマ	○											*							
上狩宿	広段	ヒロダン												○	*						
上狩宿	夫婦石	ミョウトイシ														○					
上狩宿	尾下がり	オサガリ	◎											○	*						1
上狩宿	大山ノ口	ウヤマンクツ												○							
上狩宿	山ノ口	ヤマノクチ												○							
上狩宿	大迫	ウサコ													○						
上狩宿	押ノ尾	オシノオ												○							
上狩宿	中野	ナカノ												○							
上狩宿	タラノ木	タラノキ											○								
上狩宿	焼山	ヤケヤマ							◎				○								1
上狩宿	松下	マツシタ														○					
上狩宿	木場ノ口	コバノクチ												○							
上狩宿	山下	ヤマシタ												○							
上狩宿	西前田	ニシマエダ									○										
上狩宿	東前田	ヒガシマエダ									○										
上狩宿	岩塚	イワユカ	◎													○					1
上狩宿	枦ヶ原	ハゼガイ											○								
上狩宿	下谷之口	シモタイノクチ												○							
		○	2	0	0	0	1	1	0	0	2	0	3	9	2	4	0	0	0	0	
		◎	3	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		*	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	
下仮宿	矢建ヶ原	ヤタテガハイ	○																		
下仮宿	下谷	シモタイ												○							
下仮宿	外原	ソトバイ		*										○							
下仮宿	内原	ウッバイ		*										○							
下仮宿	柿木	カケッ											○								
下仮宿	スヌケ田	スンケダ									○							*			
下仮宿	上船川	カミフナゴ		○			*														
下仮宿	下船川	シモフナゴ		○			*														
下仮宿	上藤川	カミフッコ												○							
下仮宿	猿屋	サイヤ																○		◎	1
下仮宿	藤川	フッコ											*	○							
下仮宿	牟田元	ムタンモト									○			*							
下仮宿	高尾	タカオ												*	○						
下仮宿	ホゲ	ホーゲ															○				
下仮宿	高塚	タカツカ	◎													○					1
下仮宿	間	ハザマ												○							
下仮宿	中尾	ナカオ		○																	
下仮宿	城ヶ崎	ジョウガサキ		○										*							
下仮宿	城之前	ジョウノマエ		○																	
下仮宿	野坂	ノザカ				○															
下仮宿	下境田	シモサケダ														○					
下仮宿	戸之口	トノクッ		*										○							
下仮宿	楪ヶ原	イチノキガハイ											○			◎					1
		○	1	5	0	1	0	0	0	0	2	0	2	7	1	2	1	1	0	0	
		◎	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	
		*	0	3	0	0	2	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	1	0	0	

公民会名	小字名		1 信仰	2 城郭・集落	3 土地。区画	4 市・街・交通	5 水利・川・池	6 人名・職掌	7 開発地名	8 職業・産業	9 田畑	10 瑞祥	11 自然	12 位置	13 形状	14 目印	15 侵食・崩壊	16 川原・湿地	17 気象	18 意味不明	訂正
境田	山瀬戸	ヤマセド				○								*							
境田	頭ナシ	カシタナシ					○							*							
境田	搦	カラゲ								○											
境田	上山ノロ	カミヤマンクッ				○								*							
境田	道ノ尾	ミチノオ				○															
境田	大段地	ウダンチ												○							
境田	鷺多山	オウタヤマ											○								
境田	桑水流	クワズイ					○											*			
境田	池平	イケビラ					*								○						
境田	焼杉	ヤケスギ														○					
		○	0	0	0	3	2	0	0	1	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	
		◎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		*	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	1	0	0	
熊田	牟田元	ムタンモト																○			
熊田	横枕	ヨコマクラ			◎										○						1
熊田	大段	ウダン												○							
熊田	上ノ段	カンノダン													○						
熊田	岩下	イワシタ											○								
熊田	蓑毛田	ミノケダ									○							*			
熊田	宮後	ミヤウシト	*											○							
熊田	野中	ノナカ											○	*							
熊田	貴目ヶ平	キメガヒラ									*			○						◎	1
熊田	古川内	フイコッ																○			
熊田	井穴	イアナ					◎														1
熊田	轟ヶ平	トドロガビラ					○						*								
熊田	池田	イケダ					○														
熊田	渡瀬口	ワタセグッ				○															
熊田	麦田ヶ原	ムッタガハイ												*	○						
熊田	園田	ソンダ		○																	
熊田	逆水	サカミッ												○	*						
熊田	本熊田	モトクマダ												○							
熊田	柿木掛	カッキガケ												○							
熊田	堂ノ前	ドノマエ	○											*							
熊田	浜弓場	ハマユンバ	◎							○											1
熊田	豆漬	マメツケ								◎		*	○								1
熊田	山中	ヤマナカ												○							
熊田	永峯	ナガミネ													○						
熊田	尾柊ノ木	オクノキ											○								
熊田	堂ヶ迫	ドガサコ	○												○						
熊田	木場田	コバダ							○												
熊田	上掛	カンカケ		○																	
熊田	栫	カコイ		○																	
熊田	平谷	ヒラタイ												*	○						
熊田	本迫	ホンザコ												*	○						
		○	2	3	0	1	2	0	1	1	1	0	4	7	6	0	0	2	0	0	
		◎	1	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
		*	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	5	1	0	0	1	0	0	

公民会名	小字名		1 信仰	2 城郭・集落	3 土地。区画	4 市・街・交通	5 水利・川・池	6 人名・職掌	7 開発地名	8 職業・産業	9 田畑	10 瑞祥	11 自然	12 位置	13 形状	14 目印	15 侵食・崩壊	16 川原・湿地	17 気象	18 意味不明	訂正
戸子田	アザノ	アザノ											○								
戸子田	岩屋川内	イワヤゴッ												○							
戸子田	宮田	ミヤタ	○																		
戸子田	出口	デグチ					◎	○													1
戸子田	蕨野	ワラビノ											○			◎					1
戸子田	古屋敷	フイヤシキ		○																	
戸子田	鎮ノ宇都	チンノウト	○	◎										*							1
戸子田	苗代田	ナエシロダ									○										
戸子田	宇都	ウト													○						
戸子田	片鹿倉	カタカクラ								○											
戸子田	柿木ヶ丸	カッキガマル											○								
戸子田	戸子田	トコダ							*		○					◎					1
戸子田	前畑	マエバタ									○			*							
戸子田	五反田	ゴタンダ									○										
戸子田	川原	カワラ																○			
戸子田	畑井田	ハテダ	*													○					
戸子田	倉ノ山	クランヤマ		○																	
戸子田	弓場ノ下	ユンバンシタ		○																	
戸子田	川久保	カワクボ													○						
戸子田	前田	マエダ									○										
戸子田	堤ノ下	ツッンノシタ					○							*							
戸子田	御戸洗	ミタライ	○																		
戸子田	永田	ナガタ									○										
戸子田	坂ノ上	サカノウエ												○							
戸子田	十文字	ジュウモジ				○															
戸子田	日野山	ヒノヤマ																	○		
戸子田	岩下	イワシタ												○							
戸子田	山中	ヤマナカ												○							
戸子田	大猿喰	オオザックレ															○				
戸子田	小猿喰	コザックレ															○				
戸子田	戸ノロ	トノクッ													○						
		○	3	3	0	1	1	1	0	1	6	0	3	4	3	1	2	1	1	0	
		◎	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	
		*	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	

公民会名	小字名		1 信仰	2 城郭・集落	3 土地。区画	4 市・街・交通	5 水利・川・沙	6 人名・職掌	7 開発地名	8 職業・産業	9 田畑	10 瑞祥	11 自然	12 位置	13 形状	14 目印	15 侵食・崩壊	16 川原・湿地	17 気象	18 意味不明	訂正
広橋	下宇都	シモウト												○	*						
広橋	天ヶ谷	アマガタイ													○						
広橋	畦越	アゼゴエ					○														
広橋	横井畑	ヨコイバタ									○				*						
広橋	上宇都	カミウト															○				
広橋	鎮守山	チンジュヤマ	○																		
広橋	別府ヶ原	ビュウガバイ							○												
広橋	山沢津	ヤマサワッ					◎							○							1
広橋	木場田	コバダ							○												
広橋	鷲巣	サギス											○								
広橋	坂ノ上	サカノウエ				◎								○							1
広橋	坂ノ下	サカノシタ				◎								○							1
広橋	都畑	ミヤコバタ	*								○										
広橋	中ノ迫	ナカンサコ												○							
広橋	稲ヶ迫	イナガサコ											○								
広橋	外戸ノ口	ケドンクチ		○		◎								*							1
広橋	芹ヶ迫	セイガサコ											○	*							
広橋	宮田	ミヤタ	*								○										
広橋	七十地	シチジッチ																○			
広橋	永田	ナガタ									○										
広橋	上大師野	カミオオシノ											○								
広橋	垂水	タレミッ					○														
広橋	出口	デクッ					◎							○							1
広橋	原	ハラ							○												
広橋	岩ノ元	イワノモト											*	○							
広橋	井ノ尻	イノシイ					*							○							
広橋	洗剥	アレハッ															○				
広橋	井樋ノ口	イデングチ					○														
広橋	樋ノ口	テノクチ					○														
広橋	高田	タカダ									○			*							
広橋	瀧ノ上	タッノウエ												*	○						
広橋	沖ヶ丸	オッガマイ												○							
広橋	小一倍	コイチバイ																		◎	1
広橋	立石ヶ迫	タチイシガサコ														○					
広橋	丁場	チョウバ								○											
広橋	仕明	シアケ								○											
広橋	松山	マツヤマ												○							
広橋	境ノ谷	サケンタイ													○	*					
		○	1	1	0	0	4	0	3	2	5	0	4	10	3	1	2	1	0	0	
		◎	0	0	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
		*	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	4	2	1	0	0	0	0	

公民会名	小字名		1 信仰	2 城郭・集落	3 土地。区画	4 市・街・交通	5 水利・川・沙	6 人名・職掌	7 開発地名	8 職業・産業	9 田畑	10 瑞祥	11 自然	12 位置	13 形状	14 目印	15 侵食・崩壊	16 川原・湿地	17 気象	18 意味不明	訂正
黒鳥	梅木迫	ウメキザコ				○															
黒鳥	南ヶ迫	ミナンガサコ												○							
黒鳥	柿木原	カッキバイ															○				
黒鳥	向園	ムカエンソン									○			*							
黒鳥	ナラメ田	ナラメタ																○			
黒鳥	渕脇	フチワキ					○							*							
黒鳥	東俣	ヒガシマタ				○								*							
黒鳥	籠毛	タツゲ													○						
黒鳥	正ヶ迫	ショウガサコ													○						
黒鳥	堤田	ツツンダ													○						
黒鳥	小鍋	コナベ													○						
黒鳥	仏ヶ迫	ホトケガサコ													○						
黒鳥	竹下	タケシタ											○								
黒鳥	上ノ原	ウエンハイ												○							
黒鳥	丁場	チョウバ						○													
黒鳥	宮ノ前	ミヤンマエ	○																		
黒鳥	上兎田	カミウサギダ									○			*							
黒鳥	中原	ナカハイ												○							
黒鳥	下兎田	シモウサギダ									○			*							
黒鳥	出ノ段	デノダン					○							*							
黒鳥	寺田	テラダ	*								○										
黒鳥	皮籠作	カワカゴサッ															○				
黒鳥	並松	ナミマッ				○							*								
黒鳥	ホキ田	ホキタ									○			*			◎				1
黒鳥	芦牟田	アセンタ									○							*			
黒鳥	下大師野	シモオシノ													○						
黒鳥	野久留	ノグイ																			
黒鳥	ハキ矢	ハキヤ					○														
黒鳥	黒渕	クロブチ													○						
黒鳥	山猪	ヤマイタチ											○								
黒鳥	久保山	クボヤマ													○						
黒鳥	矢倉川	ヤクラガワ												○							
黒鳥	山下	ヤマシタ												○							
黒鳥	屋敷田	ヤシキダ		*							○										
黒鳥	巣山	スヤマ											○								
黒鳥	中大師野	ナカオシノ											○								
黒鳥	小原	コバイ												○							
黒鳥	古園	フイゾン	○																		
黒鳥	岩下	イワシタ											*	○							
黒鳥	瀬戸ノ口	セトノクチ				○									*						
黒鳥	下原	シモハイ									○				*						
		○	2	0	0	4	3	1	0	0	8	0	4	7	8	0	2	1	0	0	
		◎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	
		*	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	7	2	0	0	1	0	0	
	総合計	○	24	24	0	14	29	4	7	7	36	0	39	68	39	15	7	9	1	0	323
	総合計	◎	10	1	2	12	4	2	2	4	2	0	2	4	0	5	1	2	0	6	59
	総合計	*	5	5	0	2	8	0	1	1	2	1	7	37	11	2	0	5	0	0	87

地名研究会報

第 95 号　　平成19年3月4日

鹿児島地名研究会

Ⅰ．第95回例会　　平成18年12月3日（日）　　於西郷南洲顕彰館

（出会者）　上野堯史・川野雄一・永井啓介・西田春人・繁昌正幸・肱岡修一郎
平田信芳・松浪由安・米原正晃（計9名）

Ⅱ．大日本地名辞書読会　　P.568～P.569　　恒吉・百引・市成・菱田・志布志

Ⅲ．口永良部島と沖永良部島

〔問題となった地名および事項〕　恒吉・百引・市成・菱田、宝満寺と大慈寺、荒佐野。
奄美のテラ、口永良部島、鹿児島藩密貿易の拠点、明治初めの入植、
遣唐使船の帰着ルート、戦艦大和の沈没海域、西郷南洲と号した由来、
沖永良部島、「エラ」地名と「部」地名、沖永良部島見たまま、
西郷隆盛謫居地と南洲神社

恒吉・百引・市成・菱田

平田　今日のところで質問があったら出して下さい。

松浪　右側のﾍﾟｰｼﾞの真ん中の欄、市成(ｲﾁﾅﾘ) のところ、○字が付いた双子ツカというのはどんな文字ですか。

平田　龍に土、「壟」です。恒吉は人名：開発領主の名前に由来するのでしょうが、市成・百引(ﾓﾋﾞｷ)というのはよく判りませんが市場が出来た所のような感じがします。菱田は菱がよく繁茂していた所なんでしょうね。それが田圃になった所。奄美や琉球で珊瑚礁が干上がった時に洲が出来る。それをヒシとかピシと云います。それに由来するとの説がありますが、そんな所に田圃は開かれないと思います。菱の植生にもとづいた地名だと思います。それが自然でしょう。菱刈は菱の実を刈る：取る所。

恒吉や市成などは滅多に行かない所です。恒吉太鼓橋という古いものがあるのですが、見たことはありません。

宝満寺と大慈寺

繁昌　宝満寺と大慈寺は別の所ですね。

平田　川を隔てています。

繁昌　資格的にはどちらが上ですか。

平田　昔は宝満寺が上だろうね。宝満寺は西大寺派律宗。大慈寺は臨済宗の寺。寺の格付けの細かいことは知らないけど、西大寺派律宗は平安末～鎌倉初めに日本全国の国分寺を支配しています。相当な力を持った宗派です。臨済宗の方は鎌倉幕府が力を入れて保護している。そして臨済宗の寺が鎌倉五山とか京都五山と呼ばれて当時の学問の中心になるのです。鹿児島には薩南学派と呼ばれたものがあった。高校の日本史では重要事項として大学入試に出題されるので憶えておけと教えられるのです。

薩南学派で大事なことは、昔鹿児島に三番目の学問の中心地があったということ。桂庵玄樹に始まって、月渚・一翁を経て文之和尚に連なって来る。そういう理解の仕方を深めること。そういう教え方をした方がよいと私

はよいと思う。子供たちも理解するだろうと思います。

宝満寺は西大寺派律宗の寺院ということで注目に値します。律宗は鑑真が開いた宗派で僧侶になるには律宗寺院で得度：戒律を授けられて来たのです。日向国の律宗寺院は宝満寺だけ。大隅国の律宗寺院は正国寺だったのです。正国寺跡に残っていたのが五重石塔と四天王像だった。それを明治の末に熊襲塚と名付け、さらに隼人塚と名を改めて国指定の天然記念物にしたのです。隼人塚という名前はきっぱりと断ち切って、本当の歴史的意味を説明しなければいけないと思います。桑幡公幸という鹿児島神宮の神官が思い付きで初め熊襲塚と名付け、どうも具合が悪いと隼人塚(ﾊﾔﾋﾄﾂﾞｶ)に変えた。それを人々は隼人塚(ﾊﾔﾄﾂﾞｶ)と呼んでいるのです。大正の初めに国の天然記念物に指定されたために隼人駅という名が生まれ、以後次々に「隼人○○」の名称が付けられてしまった。平成の市町村合併で霧島市になり、それが消えるかと思ったのですが、地元では用意に消えておらず地名は行政が一度不用意に決めると容易に消えないのです。

荒佐野

米原　568ﾍﾟｰｼﾞの下段、菱田川の項に「荒佐野の開発は元禄十年泉州の次左衛門という者によった」と書いてありますが、これは豊臣の残党？

平田　豊臣方の残党というか、浪人が周囲の人たちを引き連れて移って来たというのです。それも水のない所しか場所がなかった。

米原　そうですね。

平田　荒佐野は西南戦争の際、薩軍と官軍が衝突しています。しかも官軍が負けて退却した所として有名になりました。

米原　時代としてはどうですか。豊臣家滅亡から、かなり経っていますが。

平田　そうですね。1世紀ばかり我慢していたのでしょう。芽が出ないということで、じっとしていたのでしょうが。苦しい立場の人たちから見れば、百年ぐらいは我慢したのでしょう。

米原　ばれないように、じっとしていたのですかね。

平田　素性がばれないようにね。

奄美のテラ

平田　奄美や沖縄に行くと島津に征服されたことを今でも忘れていませんからね。先日沖永良部島に行った時、世之主の墓まで案内してもらって、そこで尋ねたのです。世之主神社に行くにはと聞いたのです。世之主神社と尋ねているのだけど、テラはこっちに行きなさいという。世之主神社とは言わないのです。鹿児島から来た者だと判るのですが。意識しないのでしょうが、そういう形で受け答えするのです。

上野　テラというのは向こうでは「平地」という意味ではないですか。大島工業高校のある一帯：隕石が落ちて来た所に神社があるのだけど、あの辺はテラと言っています。寺という意味ではないような気がする。

平田　世之主神社の場合、寺があったことは事実です。

上野　あゝ。

平田　奄美の信仰では神社があった所にはそれ以前にオガミ山があったのです。ノロが神を祭った場所には必ず平たい所がある。それがテラ。そしてその背後には神が宿る森がある。オガミ山、森、テラは1セットの存在

なんです。そのように理解してよい。

松浪　平地を何というのですか？

平田　テラ。

松浪　テラは平(ﾀｲﾗ)から来ているのですか。

平田　あと数日もすると「川由来考」で奄美の平家伝説を分析します。テラと平(ﾀｲﾗ)のつながりを説明します。今聞くと新鮮味がなくなりますから、その時の楽しみにしておいて下さい（笑い）。世之主神社できれいなテラを見て来ました。以前、上野さんからテラを教えられていたのでよく見てきました。

松浪　神社とテラというのは廃仏毀釈とは直接関係ないのですか。

平田　廃仏毀釈で寺がつぶされたから神社が出来たのです。

松浪　奄美もそういうことは同じだったのですか。

平田　そうです。

口永良部島

平田　「川由来考」を書く上で、目立った所は実際に見ておかねばならないので、口永良部島や沖永良部島へ出掛けて行きました。レジュメにまとめておきましたが、口永良部島でも沖永良部島でも尋ねました。二つの永良部島があるのは何故かとの疑問を出会う人に尋ねたのですが、判りませんでした。

長門本平家物語に「白石島」というのが出て来ます。これが口永良部島の古名だとの説があるのです。そこで景観的に白石島と名付けられるのかを見究める課題もありました。これも「川由来考」で説明したように基盤に花崗岩の層がありますが、ほとんどが溶岩：安山岩で覆われています。波打際の所に花崗岩の層があり白く見えるので白石の名が付いても不思議ではないと思いました。

長門本はどういうことを書いているかと云うと「きかいは十二の島なれば、くち五島は日本に随へり。おく七島はいまだ我朝に従はずといへり。白石、あこしき、くろ島、いわうが島、あせ納、あせ波、やくの島とて、ゑらぶ、おきなは、きかいが島といへり……くち五島の内、康頼をばあこしきの島、しゅんくゎんをば白石がしまにぞ捨置る……とかくして俊くゎんも康よりも少将のましましけるいわうが島にたどりつきて互に血の涙をぞ流しける」との記述。「平家物語」は鎌倉時代初め頃に書かれているものですから、平安末から鎌倉時代初めの状況を示しています。

「白石、あこしき、くろ島、いわうが島、あせ納、あせ波、やくの島」、これらは口五島が中心です。「ゑらぶ、おきなは、きかいが島」、この「ゑらぶ」は沖永良部島と考えられます。くろ島、いわうが島と竹島とで三島になる。その他に口永良部島がある。これが白石島の可能性が強い。

「くち五島の内、康頼をばあこしきの島、俊くゎんをば白石が島にぞ捨置ける」と。長門本は硫黄島と黒島は明記し、現在に名を残していない白石島とあこしき島に俊寛と康頼を捨てたと記している。やがて俊寛と康頼は藤原成経のいる硫黄島にたどり着くとあるので、硫黄島が見える所に白石島・あこしき島があったと考えられる。白石島が口永良部島だとすると、あこしき島は竹島の可能性が大となる。

口永良部島（2万5千分1図を黒板に貼付して説明）は全島が火山島です。今まではおとなしい火山だったのに最近のニュースでは新岳が噴火するのではないかとの火山情報が

出されて驚いています。口永良部島で聞いた話では噴火口ものぞくことが出来る火山だという話でした。

川はこの本村(ホンムラ)に集中しています。一番長い川が金ケ迫川。カネと読むのかキンと読むのか判らなかったので現地を訪れたのです。「きんがさこ」でした。金岳小・中学校は「かながだけ」、金峰神社、「きんぽう」かと思ったら「かなみね」神社。阿多・田布施の金峰神社とつながりがあるのは間違いない。南島で金峰神社があるのは此処だけで、平安末の豪族阿多忠景が鬼界ケ島に逃げたという話がありますが、此処へ逃げた可能性が考えられることになります。今後考古学的な調査で手がかりを見付けなければならないと思います。

この島は朝鮮の記録に早くから「恵羅武」（海東諸国記）と見え、朝鮮・口永良部島・琉球をつなぐルートがあったのです。

鹿児島藩密貿易の拠点

平田　口永良部島には幕末に鹿児島藩が西洋人との取引に使用した交易所があったということが「鹿児島県史」にあります。「三国名勝図会」には琉球諸島から上・下する船は必ず口永良部島の湊に碇泊したとあります。また銭屋五兵衛という加賀国の豪商がいますが、藩内の抗争で獄に投ぜられ獄中死しています。抜け荷：密貿易に関わったのではとの話もあり、浜崎太平次とも何らかのつながりがあったのではないかの話もあり、島の郷土史家たちがどういうことを語り継いでいるかを聞きたかったのです。

まずイギリス人がいたという伝承を中学校で聞いたのです。こちらの方に西之湯という温泉があるのですが、その近くに「イギス」という片仮名書きの小字があるのです。イギリスならば「イギス」に変る地名だと思い付くのです。島で一番郷土史に詳しい人を訪ねたのですが、あいにく大阪に行っておられ留守でした。帰る船が港に着いて降りて来た物知りそうな老人に問いかけたら、その人でした。短い時間で得た情報は次の通り。

「オランダ人がいた」と。オランダの館があって、幕府がそれを感づいたらしい、と。銭屋五兵衛が捕らえられたとの噂が伝わり、幕府側の手入れがあるかも知れないとのことで、一日でオランダ館をつぶして逃げた、というのです。

オランダは長崎の出島に商館があるわけですから薩摩のこんな所に館を建てる必要はないわけです。これは密貿易以外の何者でもないのです。幕府が情報をつかんだということで即座に藩が動いたのですね。密貿易にかかわっているわけですから史料などはほとんどないのです。よく知った人とすれ違いになったので、また出掛けなければオランダ館跡のことは確かめられません。宿題を残したままです。

役場の支所があり、たった一人の駐在員がいるだけです。その人はいろんな抱負を持っているようでしたが極端な過疎にはお手上げのようでした。十数年前、原口泉教授が学生を連れて来て、いろいろな調査をされたようです。その時の一人（女子学生）が書いた銭屋五兵衛に関するレポートの写しが支所にありました。そんなことはあり得ないと最初に記してありました。

明治初めの入植

平田　江戸時代、此処は永吉島津家の領地だったのです。永吉島津家の当主が戊辰戦争の時、隊長として従軍しているのです。その時お部下たちを誘って、領地だった口永良部島に入植したのです。それが「新村(シンムラ)」です。ところがその子孫たちはほとんど残っていないのです。残っているのは２世帯だけです。

入植百年祭というのを何年か前実施し、全国から集まったそうです。広々とした所に羊を千頭ばかり放し飼いにし、羊毛を刈り取って磯の集成館で織ったと云います。結局は殿様の開拓でうまく行かずさびれてしまった。その殿様父子が狩猟好きで、狐狩りに鉄砲を撃っていた。農作業で忙しい時に皆を集めて狐を追い出す加勢をさせたので嫌気がさしたという裏話もあったようです。

永吉島津家の人々が乗り込んで行きながら（屋敷跡が残っている）結局は東京に移り住んでしまった。殿様という重石がはずれたら皆ばらばらに散ってしまい、現在149人の島になってしまった。

西田　全体でですか。

平田　そうです。ほとんどは本村(ホンムラ)に住んでいます。住民のほとんどは入植した人たちの子孫なんでしょうが、殿様に仕えた苦しい旦那奉公で、大正の終りに田畑が自分の名義になったとのことです。入植しても皆が一緒に苦労するとの感覚ではなかったようです。だからジリ貧になってしまったと思われるのです。昭和の初めに新岳の噴火もあって避難する出来事もあったかも知れません。

遣唐使船の帰着ルート

平田　今回の旅行で気付いたこと：発見は口永良部島と屋久島の間を黒潮の分流が流れているということでした。遣唐使船が帰って来る時には黒潮に乗って帰って来る。それが一番早いのです。しかも順風という条件が加わる。そうすると一番安全な湊は口永良部島の湊か屋久島の一湊。そのどちらかに帰り着くのが目標だったのです。順調にいけばそこに帰り着く。それをはずれると甑島か長島か薩摩半島にたどり着く。黒潮に乗って帰って来るわけですから口永良部島から屋久島の一湊を経てのノロシで多祢国府が遣唐使船帰着の情報をいち早く得たと考えられる。そうすると多祢国府は情報を得やすい種子島の南部になければならないことになるのです。順調な航海であれば口永良部島の湊か屋久島の一湊にたどり着き、多祢国府と連絡がとれたと思うのです。薩摩国とか多祢国には遣唐使船の帰着を確実にとらえる任務があった。黒潮の波の荒いのを見てそのように感じました。

戦艦大和の沈没海域

平田　乗っていた地元の乗客に戦艦大和は此処を通って行ったのかと尋ねると、知らないのです。それから戦艦大和の航路を調べました。戦艦大和関係の本を片っ端から見たのですが、ほとんどいい加減なことを書いているのです。海軍歴史保存会が第一法規から出した１１巻からなる『日本海軍史』というのがあるのですが、それにもあまり書いていない。「昭和20年４月７日、南方海上において沈没」と日本海軍史と銘打った本の中でそんな調子。海軍の関係者が書いたのがアバウトなんです。探しまくってやっと実業之日本新聞社が出した平間洋一『連合艦隊』という本を見付けました。聯合艦隊と書かないのが気に入りませんが、わりとしっかりした記事を書いています。地図に経線と緯線が書いてあったので大和沈没の箇所が大体見当が付いたのです。北緯○○度○分、東経○○度○分と

いうのが地図の上で見当が付くわけです。この本にもとづいて東経128度、北緯30度10分と判断したのです。この地図が間違っていたら当てになりませんが、大和が沈んだ所は潜水調査で判っているはずですから、その時に計測していないのでしょうかね、数値が公表されていません。

そうすると、此の位置は口永良部島の港が一番近いことになる。そんなことは今まで知られていなかった。毎日定期船が行く所ですから大和を追悼するには最も相応しい場所になります。今まで徳之島で慰霊祭を開いたり坊津で開いたり、今年は種子島の西之表で慰霊祭をしています。此処が一番近くて便利でしょうね。

松浪　距離にしてどれぐらいありますか。

平田　此処からだったら。

松浪　島の緯度・経度と沈没地点のそれは

平田　200kmほどです。

松浪　そうですか。

上野　緯度と経度をもう一度教えて下さい

平田　地図にもとづいて出した数値は東経128度、北緯30度10分です。それから２万５千分１図の数値から見た口永良部島番所ケ峰は東経130度10分、北緯30度28分です。此処から見ると大体真西ですね。18分しか違わないのですから。経度では２度。１度は赤道で110kmですから、200kmぐらいでしょう。

西郷南洲と号した由来

平田　沖永良部島を訪れた時も二つの永良部島があるのは何故かを尋ねました。奄美で隆起珊瑚礁の島は喜界島・沖永良部島・与論島の三つですが、喜界島と与論島は二級河川がないのです。沖永良部島は二級河川が三つある。和泊を流れているのが奥川。その河口に中洲があって、そこで西郷隆盛は牢獄生活をした。「南の島の中洲で暮らした」ということで南洲と名乗ったのです。西郷南洲の号は此処で名付けられたのです。

昔、沖永良部島には世之主（島主）の居城：内城(ｳﾁｼﾞﾛ)があった。その近くに石橋川があります。これは途中で切れて尻無川になっています。高校生が赤インクを流してどこに流れるかを試したら、与和浜という所に流れ出たそうです。

もう一つ、余多川というのがある。これが一番大きくて、これら三つが二級河川です。面白いことに余多川は尻有川、石橋川は尻無川です。余多川は滝になって海に落ちるはずですが、あいにく渇水期で水がありませんでした（編集時後記：沖永良部高校に勤務した先輩から余多川は琉球石灰岩のトンネルを流れ落ちていたとの手紙をもらいました）。

沖永良部島

平田　余多川の下流域は豊かな水田地帯と『角川日本地名大辞典』『鹿児島県の地名』には書いてあるのですが、20年ぐらい前から稲作は止めて、全部キビ畑に変っています。これら二つの川：余多川と石橋川は何と云えばよいのかな、もう藪です。川筋なんてものは見えるもんじゃない。何故かというと水田耕作をしないわけだから田圃に水を引かない：放置されている。川が見えない。

飛行機の上から見ると、ほとんど畑に変えられていて、緑と赤茶色の色鮮やかなモザイク模様になって見える。緑はサトウキビ畑です。赤茶色は春作に備えた百合やフリージアを栽培する畑。空の上から見たら実にきれいなんです。きれいなんだけど気になる一面もあるのです。

地主が金になることから里山や森をつぶして畑にしている。そういうことをしていたらそのうちに水に苦しむことになる。高い所でもあちこちに溜め池を造って、天水を貯める準備をしている。それをポンプアップして畑作をしている。そんなことに気付きました。

レジュメの右側に沖縄の伊良部島の古名が「えらぶ」だったことが書いてあります。永良部島は三つあったということを沖永良部島で教えられました。

面積はそれぞれそこに書いてある通り。人口は同じ年度のものはありませんが、古い統計では口永良部島が人口2,400、沖永良部島は和泊が11,642、知名で14,615。伊良部島も１万人を超している。現在は口永良部島 149 和泊は7,456、知名は7,736、まぁまぁの人口を保っている。沖縄の伊良部島も約７千名。このように見ると口永良部島の過疎化はひどい、と云える。

学校を比べて見ると口永良部島は小学生６名、中学生４名。和泊町は４校494名、中学校は２校242名。知名町は小学校５校、中学校２校。それに県立沖永良部高校がある。沖永良部高校は広々としてきれいな学校です。ちょうど和泊の町と知名の町の真ん中辺りに高校が建っています。

口永良部島と沖永良部島を訪ねて気付いたことは、口永良部島は水量は豊富だが水田は雑草が茂ったまま。田圃を作るより買うた方が安か、という。何故かと聞くと、機械を買うても一年に一遍しか使わない。高くつく、それで懲りた。米は買った方がよい、と。それから、ガジュツ栽培のこと。これは漢方薬で大阪の会社が工場まで建ててくれてあったのですが、撤退したのです。出来るガジュツが水っぽい、と。今は皆杉林になっている。特産品をなくしてしまっているのです。

沖永良部島は水稲耕作が中止されて園芸作物栽培に切り替えられている。これがしっかりしているので、周囲が皆うるおっている。だから商店街も賑やかだし、飲食店街もホテル・土産品店などもずらーっと並んでいる。鹿児島県でも優等生の町だと思います。ただ見たところ最近Ａコープが進出し、百円ショップが出来たために、おばさんたちが集まるのです。そうすると、町の店がつぶれ出して行くわけです。つぶれ出したら衰退は早い。そんなことを考えなければいけないと思う。

農村地帯でも空き家が目立ちました。農業が盛んでありながら、それが目立つのです。競争で敗れたというのですかね、そういう人たちが離れて行ったと思うのです。そうすると、そう言った農村の若者は気分的に荒れて来ますから、フーチャという有名な公園がありますがそこの店というか休憩所は滅茶苦茶に壊されている。旅人：観光客が壊すはずはないので、これは一部の若者が荒れていることを示します。元気がある反面、陰りの部分もあるのです。

「エラ」地名と「部」地名

平田　「エラ」地名と「部」地名を考えるために、アポック社『日本地名索引』と角川『日本地名総覧』から抽出してみました。

「エラ」地名が６か所あり、敦賀市江良の説明に「海の枝のように延びて入江になった所をいゝ、枝浦：江浦であったのを元明天皇和銅の詔により２字で嘉字を用いた江良浦になったのではないか」とある。入り江の江に地名語尾の「ラ」が付いたもの。

「恵良」という地名表記が大分県にやたらに多い。愛媛県北条市のものは恵良城(ｴﾗｼﾞｮｳ)でなく、「えりょうじょう」です。

「部」地名も同様に処理しました。「べ」と読む地名が多いのですが「ぶ」だけを選びました。９通りに分かれるようです。

1. 北海道の19例はアイヌ語の（～プ）の当て字。これは拾いあげませんでした。

2. 数詞＋部。一部：千葉県の都部を「ｲﾁﾌﾞ」と読むのは難しい。三部はそこにある通り。島根県のは東三部(ﾋｶﾞｼｻﾝﾌﾞ)、熊本県のは十三部(ｼﾞｭｳｻﾝﾌﾞ)、十分一峠(ｼﾞｭｳﾌﾞﾝﾉｲﾁﾄｳｹﾞ)、千部塚(ｾﾝﾌﾞﾂﾞｶ)、九千部山(ｸｾﾝﾌﾞｻﾝ)、九千部岳(ｸｾﾝﾌﾞﾀﾞｹ)、六万分(ﾛｸﾏﾝﾌﾞ)。

3. 方位。東部(ﾄｳﾌﾞ)、西部(ｻｲﾌﾞ)、南部(なんぶ)。

4. 官職その他の当て字。治部坂峠(ｼﾞﾌﾞｻｶﾄｳｹﾞ)，行部岬(ｷﾞｮｳﾌﾞﾐｻｷ)，刑部藪(ｷﾞｮｳﾌﾞﾔﾌﾞ)，鹿児島県の正部(ｼｮｳﾌﾞ)は菖蒲の当て字だと思います。大人ケ凸部(ﾀﾞｲｼﾞﾝｶﾞﾄﾂﾌﾞ)は八丈島の地名。郡司部(ｸﾞｼﾞﾌﾞ)は宮崎県の地名。

5. 大：小＋部。大部(ｵｵﾌﾞ)、小部も「ｵｵﾌﾞ」、千葉県のものは小佐部(ｺｻﾌﾞ)。

6. 色彩＋部。赤部(ｱｶﾌﾞ)、黒部(ｸﾛﾌﾞ)。黒部峡谷も同じ意味でしょうが。

7. 里・山：森＋部。 16例あります。千葉県の郷部(ｺﾞｳﾌﾞ)、栃木県の給部(ｷｭｳﾌﾞ)、大分県の山部(ﾔﾏﾌﾞ)・元山部(ﾓﾄﾔﾏﾌﾞ)、青森県の田名部(ﾀﾅﾌﾞ)、山口県の田部(ﾀﾌﾞ)、青森県の木野部(ｷﾉﾌﾞ)、これはアイヌ語的ですね。大分県の野瀬部(ﾉｾﾌﾞ)、岡山県の羽部(ﾊﾌﾞ)，栃木県の土呂部(ﾄﾞﾛﾌﾞ)，青森県の石部(ｲｼﾌﾞ)道部(ﾐﾁﾌﾞ)、岐阜県の森部(ﾓﾘﾌﾞ)、福岡県の鹿部(ｼｼﾌﾞ)、徳島県の阿部(ｱﾌﾞ)。

8. 新：旧＋部。 山梨県の古部(ｺﾌﾞ)、愛媛県・沖縄県の本部(ﾓﾄﾌﾞ)。

9. その他。 長崎県の濃部(ﾉﾌﾞ)、茨城県の伊作部(ｲﾁﾌﾞ)・高部(ﾀｶﾌﾞ)、栃木県の奈良部(ﾅﾗﾌﾞ)、石川県の安部屋(ｱﾌﾞﾔ)、香川県の名部戸(ﾅﾌﾞｺ)、島根県の部栄(ﾌﾞｻｶ)、広島県の津部田(ﾂﾌﾞﾀ)、佐賀県の加部良(ｶﾌﾞﾗ)などがありますが、ほとんど意味は判りません。

「部」地名は全体で110例あるのですが、そのうち22例が鹿児島県と沖縄県にかたまっています。そうすると「えらぶ」については「～部」が地域呼称なのか、行政単位であるのかを考えて行けばよいことになる。鹿児島県と沖縄県に「部」地名が集中しているのでその解明が今後の課題となります。鹿児島県のものは当部(ﾄｳﾌﾞ)、手花部(ﾃｹﾌﾞ)、根瀬部(ﾈｾﾌﾞ)、芦花部(ｱｼｹﾌﾞ)、伊津部(ｲﾂﾌﾞ)、伊津部勝(ｲﾂﾌﾞｶﾞﾁ)、沖永良部島(ｵｷｴﾗﾌﾞｼﾞﾏ)、部連(ﾌﾞﾚﾝ)、口永良部島(ｸﾁｴﾗﾌﾞｼﾞﾏ)。いわゆる奄美的な地名です。

沖縄県の地名例：伊部川(ｲﾌﾞｶﾞﾜ)・伊部山(ｲﾌﾞﾔﾏ)・伊部岳(ｲﾌﾞﾀﾞｹ)、伊良部(ｲﾗﾌﾞ)、伊武部(ｲﾝﾌﾞ)などですが、所属市町村は確認しておりません。沖縄県地名辞典を見て下さい。その他、宮部(ﾐﾔﾌﾞ)、崎本部(ｻｷﾓﾄﾌﾞ)、本部(ﾓﾄﾌﾞ)、根差部(ﾈｻﾌﾞ)、宇良部(ｳﾗﾌﾞ)、屋良部(ﾔﾗﾌﾞ)我部(ｶﾞﾌﾞ)、久部良(ｸﾌﾞﾗ)、部間(ﾌﾞﾏ)などです。これらの地名から考えると「部」は地域を示す地名語尾のようです。

そこで「えらぶ」は何かという問題になるのですが、琉球の勢力が北まで及んで口永良部島の名が生まれたと考えるのかが突破口になる。沖縄の伊良部は奥永良部のことらしいのです。永良部島は三つあることになる。

逆に考えると、口永良部島は薩摩の密貿易基地であり、口永良部島と名付けておくと、幕府側が探りに来た時に此処じゃない、琉球の永良部島だと、ごまかすことも可能かなとそんなことまで考えましたが証拠はつかめません。

沖永良部島見たまま（写真説明）

平田　デジカメで口永良部島の写真も撮って来たのですが、パソコンから画像を整理して下さいと指示が出たので、O.K.とクリックしたらデジカメに入っていた写真までが消えてしまいました。操作ミスで折角撮って来た写真が消えてまた撮りに出掛けなければならなくなりました。

この写真は帰途に見た屋久島の永田海岸です。口永良部島通いの定期船は 400ﾄﾝの太陽丸です。鹿児島から出て行くと12時ちょっと過ぎに宮之浦港に着きます。30分待てば太陽丸が連絡します。非常に便利な便です。１時間40分ほどで口永良部港に着きます。

これは鹿児島に帰り着いた時の写真です。桜島が見えます。

次は鹿児島市、磯付近の散策写真です。此の山は七高にいたマードック先生がいた屋敷の山です。夏目漱石を一高時代に教えた先生です。道路を隔てた下が血盟団事件で有名な四本義隆の屋敷です。まだそのまま残っていますが、人は住んでいません。最近では四本義隆を中心とする七高出身者：血盟団事件に関係したメンバーを回顧する本がだされたと聞きます。

此処はマードック先生の別宅跡で、奥さんが畑でいろんなものを植えられたと伝えられています。

これは溝辺の高屋山上陵の写真。普通は高い階段を登りますが昔の道を登って行く様子です。

高屋山上陵の陵守さんが説明している場面

陵守は世襲ですが国家公務員ですから制服を着用して説明してくれました。

これは溝辺の上床山公園から見た十三塚原の景観。

此処は溝辺から帖佐の山田へ向かう道。西南之役で薩軍が蒲生さらに鹿児島へ向かった道です。二見さんの故郷：竹山という所で、明治10年８月31日、薩軍が山田そして蒲生へ向かったのです。

これからは沖永良部島の写真です。此処が江戸時代の石橋があった川：石橋川です。此の橋が河口に近い所、否、河口でなく尻無になる最後の辺りです。石橋川が地下に潜る前の所で、ちょっと水が溜まっています。石橋川の状態はこんなものです。

これは余多川の河口一帯です。ここら辺りで滝になって落ちるはずですが、河口はこんな藪になっています。沖の方は珊瑚礁が見えています。

河口のそばに墓地があります。純然たる琉球スタイルの墓です。沖永良部島は琉球文化の方が根強いのです。

これは余多川河口に近い橋です。川筋はこんな状態です。

これは余多川の河口です。滝となって落ちるはずですが河道は見えませんでした。沖に珊瑚礁が見えます。

これも同じ余多川の河口です。橋の下はこんな状態です。

これも余多川河口からみたリーフです。リーフの景観は素敵です。すぐ近くにある食堂の庭から撮った写真でリーフの眺めはすばらしい。店に「リーフ」の名が付いています。

こらが赤茶けた畑の土です。

これは知名町の井川跡です。現在は井川は

使用していません。地下水を汲みあげているようです。暗川(ｸﾗｺﾞｰ)には水が豊富にあるはずです。暗川・水道までは調べませんでした。此処なんかも入ってはいけない、飲んではいけないとの立て札が立っていました。

畑の隅にこのような溜め池を造っている。そしてガソリンエンジンでポンプアップして撒水している。これはサトウキビを刈り取った跡です。こちらはサトウキビ畑。このようにして到る所に溜め池があって灌水しているのです。余多川からず一っと遡って行ったのです。3㎞ぐらい歩いたのですが、ほとんど人に遭いませんでした。トラクターを運転してる人にやっと出会って、その人から世之主の墓へ案内してもらったような次第でした。ちょうど畑仕事が済んだからということで、連れて行ってもらったのです。

これが世之主の墓。和泊のノロが琉球に渡り、北山王に見そめられて男児が生まれる。その男児が封ぜられて沖永良部島の王：世之主（島主）になる。ところが中山王が北山を滅ぼし、南山を滅ぼして琉球を統一した。この世之主の妃は中山王の娘なので殺されるはずはないのですが、琉球の軍船が近づいて来るのを見て、一族みんなを殺して自殺するのです。琉球スタイルの墓、世之主の墓ということで県指定の文化財になっています。沖永良部島が琉球に征服される時の一つの悲劇だったのです。

これは世之主神社の写真です。世之主の墓から1㎞ほど離れています。神社の横一帯がいわゆるテラと呼ばれる広場。これは正面から見た世之主神社。テラも芝が植えてあるのですが、このような状態です。あまり人が訪れるようでもない。神社の裏側は花畑になっていて町営公園の造成中でした。神社の敷地が広くいずれ整備されるのでしょうが、祭りの時以外は人は来ないようです。

これは世之主神社がある岡です。南側の方が内城：世之主の居城でした。これは内城を遠くから見た景観です。手前の方はサトウキビ畑、その間に堀が廻っています。

これは内城に関係する石垣だろうと思うのですが、説明板らしいものは見当たりませんでした。

これは玉城(ﾀﾏｼﾛ)という地域。世之主が掘らせた堀の跡で、水草が生えています。高い所に堀を掘って、どのように水を引いたのか判りませんが、堀が掘られていました。

西郷隆盛流謫地と南洲神社

平田　これは牢屋を復元したもの。四畳半の広さです。奥川の河口にあった中洲にこういう建物があって、此処で暮らしたのです。吹きさらしで、ひたする謹慎した所です。島役人の子供たちが牢屋の前の砂地に坐り、西郷さんは牢の中から漢籍の素読やいろんなことを教えた。一つの見るべき所です。

そばに土持政照らの胸像があって説明板もあります。西郷さんが土持政照に不作で困った時はどうするのだと聞いて、社倉という考え方を教えたので、他の島と異なり倹約と質素な暮らしをして学問に励む島になった。早くから百合の球根を栽培して横浜に送り出し世界を相手にした農業をしています。だから豊かです。和泊の町も知名の町も非常に元気がある。

これは土持政照らの顕彰碑です。同じ公園の中にあります。南洲公園から南洲橋を渡ると、すぐ左手に南洲神社があります。立派な社なんですが神主がいないのです。神主さんが亡くなると後継者がいないのです。

口永良部島の金峰神社も3年前に神主さんが亡くなって後継者がいなくて困っているとのことでした。島にある一つの神社でもそういう状態です。沖永良部島の南洲神社も大事にされているのですが後継者がいないというのです。

これが社殿です。その左側に上野公園の銅像よりちょっと小さなものがあります。

これは牢屋の中の西郷さんの座像。牢の中に書いてある説明です。牢の中にあるのは火鉢と坐る場所、衝立のうしろに便器：桶が置いてあって大小便を処理したのでしょう。

これは和泊の井川跡。水は涸れています。井川があった場所として公園になっている。

ここは奥川河口にある和泊漁港です。客船が着く和泊港は少し離れた所になります。

この通り一帯が和泊の墓地です。砂丘の上に琉球スタイルの墓地があります。何と読むのか確認しませんでしたが、源家之墓と平家之墓がありました。こちらはヒラ家でしょうが、源と平がそのままの形で彫り込まれています。多分ミナモト家とは読まないのでしょうが。和泊はホテルもビジネスホテルも沢山あります。ホテルのそばに墓地もあるので、宿に着いて暇な時に見に行けます。

これは土持政照の屋敷跡。今はホテルになっていて記念碑があるだけ。西郷さんがいた頃にもあったソテツが残っています。

この人（案内してくれた人）は南洲公園のそばに南洲展示場を私的に設けて、いろんなものを集めています。盛んに話しかけて来たのは土持政照が生存中に語った話とのことで「坂本龍馬が沖永良部島に西郷さんを訪ねて来て一晩中話していた」と。パンフレットも貰いました。島から帰ってスクラップ整理をしていたら朝日新聞の「小さな旅」というシリーズの10月9日付に坂本龍馬が沖永良部島に訪ねて来たとの記事がありました。朝日の記者まで眼を着けてるなと思いました。西郷さんが許される20日前に来たというのです。それがバレたら坂本龍馬も首を斬られただろうし西郷さんも打ち首、土持政照その他の島役人も処罰されたはずだけど、バレなかったというのです。坂本龍馬が乗って行った船には沢山の人がいたはずですから、そんな話が今まで話題にならなかったというのも不思議な気がします。

坂本龍馬が沖永良部島に行って西郷隆盛と逢った話は、西郷さんの赦免その他の打ち合わせがあったのじゃないかとの特集記事が鹿児島新聞にあるらしい。そういうことを盛んに説明する御仁です。

西郷さんが病気になった時、土持政照の母親が家に休ませて養生させたと言います。西郷さんはこのソテツを見ながら養生したとのことで、此処は史跡になっています。

南洲公園にある謫居地の想定図です。中洲があって、その一角に牢屋を建てた図が描かれています。

これは知名町の神社。金毘羅神社です。新しい神社です。これは知名漁港です。こちらに見えるのが徳州会病院。この辺りが知名町の中心部。これが知名小学校です。

知名からバスに乗り和泊で乗り継いで国頭で降り、国頭から空港までは歩きました。これは畑の石垣です。大きさ50㎝ばかりの琉球石灰岩を畑の周囲に積み上げているのです。高さは大体5㍍ぐらい。畑は全部こういう石垣で守られている。風よけの石垣です。

い知名とか手々知名という地名。「名」は山名とか浜名から地名語尾の「名」と判ります。

東風(コチ)とか疾風(ハヤチ)の「チ」は風のことですから、知名は「風の強い所」という意味だろうなと思います。知名港の防波堤は8㍍を超えるでしょう。この天井よりはるかに高い。普通の港の防波堤とは違うのです。台風常襲地帯だなと感じます。残念ながら防波堤を撮るのを忘れました。

これは国定公園「フーチャ」の案内板。冬になると岩穴から波しぶきを吹き上げるのです。景色のよい所です。

此処を離れて島の北端にある沖永良部空港に向かいますが、このような石垣に囲まれた畑が続きます。以上で終ります。

〔質疑応答〕

米原　知名の地名をもう一度説明してください。

平田　「名」は山名とか浜名という地名があり、類似のものに山方（山形）とか浜方もあり、地域を示す地名語尾ですね。「チ」は東風(コチ)とか疾風(ハヤテ)を「ハヤチ」とも言います。そうすると知名(チナ)は風の強い所の意。そうでなきゃ風除けの石垣を築くはずがない

西田　口永良部島は永吉島津の私領だったということですが、昔からですか。

平田　そういうことですね。

西田　永吉島津は1万石ない。大体六千五百石ぐらいです。

平田　お宅は元々永吉の方ですね。

西田　永吉島津が入植したのは西南戦争後でなく戊辰戦争後でしょうか？

平田　戊辰戦争後です。明治一桁の年代です。明治5・6年頃には入っている。畑を各個人の名義にしたのは大正の末です。

西田　殿様が連れて行って、皆、小作人のような形になっていたというのですか。

平田　そうです。

西田　50年ぐらいして、やっと自分のものになったということですね。

平田　旦那奉公をした、とこぼしている。

西田　永吉島津といのは永吉でも百姓仕事ばっかりだったという話です。

――以下録音が切れている。当日、録音の中断に気付かなかった。――

口永良部島と沖永良部島

平　田　信　芳

（1）口永良部島を訪れた動機

1．北と南に相当離れているのに永良部島が二つあるのは何故か。

2．口永良部島が長門本平家物語に見える「白石島」との説がある。景観的に白石島と名付けられるのか。

「きかいは十二の島なれば、くち五島は日本に随へり、おく七島はいまだ我朝に従はずといへり。白石、あこしき、くろ島、いわうが島、あせ納、あせ波、やくの島とて、ゑらぶ、おきなは、きかいが島といへり・・・・・

くち五島の内、康頼をばあこしきの島、しゅんくわんをば白石がしまにぞ捨置ける・・・とかくして俊くわんも康よりも、少将のましましけるいわうが島へたどりつきて互に血の涙をぞ流しける」長門本平家物語、巻第四

3．口永良部島に金ケ迫川、金岳小学校、金峰神社がある。その読みの確認。

4．幕末に鹿児島藩が西洋人との取引に使用した交易所があった（鹿児島県史）。

①琉球諸島から上下する船は必ず口永良部島の港に停泊した（三国名勝図会）。

②銭屋五兵衛、浜崎太平次、グラバーなどとの関わりを島の郷土史家がどのように語り伝えているのか。

（2）訪れた結果

1．イギリス人がいたとの伝承（西の浜に小字「イギス」がある）をまず聞いたが、最も詳しい人の話ではオランダ人の館があったという。幕府手入れの情報で一日で家を壊して島外に去り、七島の沖で遭難した、と。

2．上記4について鹿児島大学法文学部の学生たちが十年はど前に原口泉教授に引率され、調査に訪ずれていた。そのレポートが役場支所にあった。

3．江戸時代は永吉島津家の私領。戊辰戦争でともに戦った部下を誘って入植。
大正末期にようやく畑地が新村入植者の名義になったが現在残っているのは2戸。

4．金峰神社は「かなみね」とよぶが、日置郡の金峰神社系統と見てよい。
阿多忠景との関連は今後の問題。

5．遣唐使船は七島灘の黒潮に乗って帰国を図ったと見られる。順調な航海であれば口永良部島の湊か、屋久島の一湊に辿り着き、多祢国府と連絡が取れたいたはず。
風向きによって黒潮に乗れなかった場合は、甑島や長島や薩摩半島に辿り着いたと見られる。

6．戦艦大和の沈没海域に最も近いことに気付く。川由来考で紹介済み。

（3）沖永良部島を訪れた動機

1．二つの永良部島があるのは何故なのかの伝承の確認。

2．隆起珊瑚礁の島：喜界島、沖永良部島、与論島のなかで二級河川があるのは沖永良部島だけ。二級河川の実態を見るため。

3．西郷隆盛の配所を見るため。

（4）三つの永良部島

口永良部島	沖永良部島		伊良部島
38Km²	95Km²		29Km²
	和泊町	知名町	
(S.25) 2,400	(S.15) 11,642	(T.9) 14,615	(S.30) 10,815
(S.55) 250	(S.54) 8.866	(S.54) 8,650	9,153
(H.18) 149	7,456	7,736	7,053

	口永良部島	和泊町	知名町
小学校	6 名	4校 494名	5校 450名
中学校	4 名	2校 242名	2校 190名
			県立高校1校 369名

（5）口永良部島と沖永良部島を旅して気付いたこと

1．口永良部島は水量は豊かだが、雑草が茂ったまま。曰く、米は買う方が安い。
特産物であったガジュツ栽培は止め、畑は杉林に変わった。

2．沖永良部島では二十年ほど前から水稲耕作は中止。サトウキビ栽培、エラブユリ・フリージア、電照菊などの園芸作物で成功している。
一次産業（農業）が健全だから二次産業・三次産業が盛ん。和泊町、知名町ともに町並みに活気がある。

3．A コープや百円ショップの進出で、近辺の小売り店舗の店じまいが目立つ。
農村地帯でも空き家が見られるのは、資金力の差による脱落があるのだろう。
活気のある沖永良部島でも陰りの部分が見られる。

「エラ」地名と「部」地名の分析

（1）「エラ」地名：日本地名索引および日本地名総覧より抽出

（江良）大分県弥生町、山口県豊浦町、山口県豊田町、広島県福山市、岡山県矢掛町、福井県敦賀市

「海の枝のように延びて入江になった所をいい、枝浦・江浦であったのを元明天皇和銅の詔により2字で嘉字を用いた江良浦になったのではないか」敦賀級町地名考

（恵良）大分県九重町、大分県竹田市、大分県野津原町、大分県安心院町、大分県真玉町、

（恵良川）大分県院内町、（恵良原）大分県荻町、（恵良窪山）福島県

（恵良城：えらじょう）愛媛県北条市

（2）「部」地名：「エラ」地名と同じ抽出処理。「べ」と読むのは除外した。

1．北海道　　19例　　アイヌ語（～プ）の当て字

2．数詞 ＋ 部　　19例

一部（熊本）、市部（千葉）、都部（千葉）

二部（千葉・鳥取）、仁部（秋田・佐賀）

三部（鳥取・佐賀・北海道）、東三部（島根）、十三部（熊本）
十分一峠（山形）、千部塚（熊本）、九千部山（福岡・佐賀）
九千部岳（長崎）、六万分（京都・埼玉）

3．方位 ＋ 部　　6例
東部（香川）、西部（熊本）、南部（青森・北海道・山形・和歌山）

4．官職その他の当て字 ＋ 部　　8例
治部坂峠（長野）、行部岬（千葉）、行部（三重）、刑部藪（高知）、
正部（鹿児島）、大人ケ凸部（東京八丈島）、大人凸部（東京八丈島）、
郡司部（宮崎）

5．大・小 ＋ 部　　3例
大部（兵庫）、小部（兵庫）、小佐部（千葉）

6．色彩 ＋ 部　　2例
赤部（三重）、黒部（京都）

7．里・山・森 etc. ＋ 部　　16例
郷部（千葉）、給部（栃木）、山部（大分）、元山部（大分）、田名部川（青森）
田部（山口・大分）、木野部（青森）、野瀬部（大分）、羽部（岡山）、
土呂部（栃木）、石部（静岡）、道部（静岡）、森部（岐阜）、鹿部（福岡）、
阿部（徳島）

8．新・旧 ＋ 部　　4例
古部（山梨・愛知）、本部（愛媛・沖縄）

9．その他　　9例
濃部（長崎）、伊佐部（茨城）、高部（茨城）、奈良部（栃木）、安部屋（石川）
名部戸（香川）、部栄（鳥取）、津部田（広島）、加部良（佐賀）

（3）奄美・沖縄の「部」地名：22例/110例　　２０％を占める。

鹿児島県

1．当部（天城町）
2．手花部（奄美市笠利町）
3．根瀬部（奄美市名瀬）
4．芦花部（奄美市名瀬）
5．伊津部（奄美市名瀬）
6．伊津部勝（奄美市名瀬）
7．沖永良部島（和泊町・知名町）
8．部連（宇検村）
9．口永良部島（上屋久町）

沖縄県

1．伊部川（国頭村）
伊部山・伊部岳（国頭村）
2．伊良部（伊良部町）
3．伊武部（　？　未確認）
4．安部（名護市）
5．崎本部（本部町）
6．本部（本部町）
本部間切・本部大橋・本部港・本部半島
7．根差部（豊見城村）
8．宇良部（与那国町）
10．屋良部（石垣市）
11．我部（名護市）
12．久部良（与那国町）
13．部間（名護市）

地名研究会報

第 96 号　　平成19年6月3日

鹿児島地名研究会

Ⅰ．第９５回例会　　平成１９年３月４日（日）　　於西郷南洲顕彰館研修室

（出会者）　今村誠一・入来院貞子・上野堯史・内山憲一・川野雄一・久米雅章・築地成郎・永坂芳彦・西田春人・浜田良知・繁昌正幸・肱岡修一郎・平田信芳・二見剛史（計１４名）

Ⅱ．大日本地名辞書読会　　P.570～P.571

肝属郡、高屋神社、内之浦、高山

Ⅲ．西南之役を顧みる

〔問題となった地名および事項〕　桂　忠昉、梅北国兼、和名抄記載の郷名、有明湾、檳榔、高屋神社、豊玉姫、戦艦大和の沈没海域。

征韓論と遣韓論、西郷隆盛の意図、自信過剰の薩摩、武士の世の終り、朝鮮側から見た無礼な国書、西郷と大久保の違い、西郷一辺倒でない鹿児島、西南戦争とマスコミ、多く死なせると英雄、戦死崇拝の美学、敗戦後の後始末、靖国神社との関連。

桂　忠昉・梅北国兼

平田　疑問点や質問があったら、出して下さい。二見先生、今日の範囲で高屋神社が出て来ましたが。

二見　高屋神社が溝辺にもあるのですけど先生の云われる内之浦の高屋神社のことは以前から気にしていました。

平田　それは後で申します。

入来院　最初の桂忠昉は平佐城に拠って防戦した桂ですね。

平田　そうです。

入来院　此処から移っているのですね。

平田　そうです。

入来院　梅北兼高というのは梅北国兼の先祖になるのですね。

平田　そうです。梅北国兼事件という大事件を起こしています。

入来院　梅北という地名がありますよね。

平田　梅北は現在都城に含まれています。

和名抄記載の郷名

久米　571ﾍﾟｰｼﾞの肝属郡桑原郷と桑原郡とは関係がありますか。

平田　肝属郡の桑原郷はこちらにあった桑原郡とは違う。肝属郡のどこかなんでしょうけど、どこにあったか判っていません。和名抄では肝属郡と大隅郡の比定が一番難しい。他のものは大抵見当が付くのですけど。

現在の市町村合併で崩れましたけど以前の96市町村の時代には大体昔の郷と現在の行政単位（市町村）とは数的に大体同じでした。それで見当が付け易かったのです。平成の市町村合併は相当歴史を混乱させる原因になるだろうと思います。

二見　高山町あたりが肝付町でしたかね。

平田　内之浦町と合併して肝付町を名乗っているから肝属郡は判るのです。しかもトン

ネルが出来ましたから内之浦との連絡が早くなりました。そうですね、私が感じたことを先に述べながら話を進めましょう。

有明湾

平田　実は昨日、黎明館での隼人研究会で栗林氏が「錦江湾の起源」という話をしたのです。錦江湾というのは加治木の日木山川の河口から起こった呼び名が湾全体に広がって来て非常に人気がある、小学校の校歌に相当取り上げられている、と。子供たちは小さい時から海を見て、錦江湾だと思い込んでいるので、鹿児島湾という言い方はしない。他県の人は鹿児島湾という。

それに比べると有明湾という表現はあったのだけど、現在はほとんど志布志湾と云っている。有明という表現は消えてしまった。有明町として残っていたのだが、平成の合併でそれも消えてしまった。鹿児島湾、錦江湾、志布志湾、有明湾というのを比べると、有明だけが消えてしまったとの話がありました。

檳榔

平田　平安貴族が珍重した檳榔の産地が檳榔島です。これは島津庄から都に送られた。此処は岩山と説明がありますが、恐らく夏井浜で見られる岩と同じで、加治木の桃木野石とよく似ている同じ系統の溶結凝灰岩です。大隅半島で桃木野石を見掛けた時は、夏井石であるのか桃木野石であるのか、区別が付きません。

ただ、岩川の薩軍招魂冢は加治木の石工が作ったと書いてありますから加治木から持って行った桃木野石だろうと思います。桃木野石と夏井石は同系統の石で、檳榔島は同系統の溶結凝灰岩で出来た島だと思うのです。

二見　桃木野という地名は？

平田　加治木にあります。

二見　桃木野家がありますね。地名ですか。

平田　地名です。見事な石切場跡が残っています。

高屋神社

平田　溝辺の高屋神社のこともあり、12月29～30日、内之浦に出掛けました。肝付町の教育委員長が最初の頃の教え子で、案内してもらったのです。まず、叶岳という内之浦全体を見渡せる所に行きました。高屋神社とその隣にある天子山というのが見えるのです。叶岳は200メートルぐらいの山ですが、山上から見ると高屋神社と天子山がこんもり茂って大きな古墳に見えるのです。本来この二つは連なっていて巨大な前方後円墳になるのではないかとの感想を持って山を降りました。天子山は景行天皇の行宮跡と云われて来た所です。

また、山の上から見ると、高屋神社の西側に水田地帯が展開しているのです。地図で見ると、水田の地割は真北の方位だなと思いました。N 5° 30′ Eの方位です。次ぎの日に肝付町の生涯学習課長が見えていましたので高屋神社と天子山を含む地図を後日送って欲しいと頼みました。千分之１地図を貰ったのですが、前方後円墳の形は残っておらず、形は崩れていました。しかしその西側の水田にはN5° 30′ Eという真北の方位が見られました。これは奈良・平安時代の条里制の方位だと気付いたので、２万５千分１図で串良町や高山町の水田を見ると、同じ方位で展開していました。細かい条里地名は追究しませんでしたが、肝属郡の条里は真北の方位すなわち北極星を見通した方位で実施したとの見当がつきました。

現地を見た限りでは高屋神社の敷地も天子山も、時代は判りませんが相当削られていました。周囲にトレンチを入れたら大きな古墳であったことは判るだろうと思います。そういうことは土地の人たちに話して来ました。

ところで内之浦に行った目的は何だったのかというと、実は明治５年６月23日明治天皇が鹿児島に行幸されるのですが、その時に、明治天皇は鹿児島の行在所（鶴丸城本丸跡）の庭に遙拝所を設けて神代三山陵を拝まれるのです。その時に三山陵には勅使を派遣しているのです。川内の可愛山陵、内之浦の高屋山陵それと吾平山陵です。

内之浦の高屋神社に勅使が来るという式部省からの書状が残っているのです。またその時に御下賜金が与えられているのです。金貨十円です。それを内之浦の高屋神社だけが未だに持っているのです。可愛山陵や吾平山陵は陵守や神社関係者はそんな物を貰った言い伝えや記録もないのです。

その２年後に「薩隅日地理纂考」を作った樺山資雄とか廃仏毀釈の旗振りをやった田中頼庸などが中心になって「彦火火出見命の御陵は高千穂山の西に在る」という古事記の記事を拠り所にして、天皇が拝み勅使まで出掛けた内之浦の高屋山陵を否定して、溝辺の高屋山陵に持って来たのです。それで明治７年に溝辺が高屋山上陵と決まった経緯があるのです。

三国名勝図会を見ると、高屋山陵は内之浦に書いてあるのです。薩隅日地理纂考になって来ると溝辺に変わって来る。両方を見比べると、三国名勝図会では溝辺に鷹神社というのがあるのですが、祭神不詳としている。ところが鷹屋大明神と書いた棟札が見つかったと騒ぎ立てて、こっちが本物だということにして薩摩閥が強引に溝辺に決めた。

その理由として彦火火出見命の御陵だけが古事記に具体的に書いてあるのを利用したのです。どういうことが書いてあるかというと「彦火火出見命は高千穂宮に580年おられ、そして亡くなった。御陵は即ち其の高千穂山の西に在る」とあるのです。

この文章の問題点を指摘します。まず鹿児島では高千穂と云ったり高千穂峰と云いますが、高千穂山という表現は聞いたことがありません。それが一つです。次に「御陵は即ち其の高千穂山の西に在り」との文章を考えると、不自然な表現に気付きます。「其の」は何を指すかと云えば、前に「高千穂宮」とあるので高千穂宮と考えるのが普通です。いきなり高千穂山が出てくるのはおかしい。問題は高千穂宮がどこにあったか、ということ。それを決めるのが最も大切なことです。それを決めてないのです。

現段階で高千穂宮の候補地にあげられているのはどこかというと、隼人町の人々は鹿児島神宮の北東部、石體神社あたりとみる。高千穂宮址という大きな石碑が建っています。そしてもう一つは都城です。

高千穂宮は彦火火出見命が住まいし、ウガヤフキアエズノミコトもその近辺で生まれ、神武天皇も近くで生まれます。そうすると、鹿児島県の中よりも宮崎県側の方が有力だと見るのが常識的だと思います。明治維新に際して薩摩閥がこちらに皆持って来たと考えられます。

豊玉姫

平田　もう一つ気付いたことがあります。彦火火出見命と豊玉姫が歌をやりとりしてい

ます。古事記と日本書紀を比べると古事記では豊玉姫が妹の玉依姫にことづけて届け、日本書紀は彦火火出見命が先に歌を送ったことになっています。その歌は、

赤玉は緒さへ光れど白玉の
　君が装ひし貴とくありけり
沖つ鳥鴨着く島に我が寐ねし
　妹は忘れじよのことごとに

となっているのです。これは古事記に盛り込まれた、いわゆる万葉以前の恋歌です。たまたま此処に挿入されたと見られているに過ぎないのです。

「赤い玉は通した緒さえ光ると云いますが質素な白い玉を身に着けた貴方は貴とく立派でしたよ」という恋歌です。それに対する「沖つ鳥 … よのことごとに」という返歌が山幸（彦火火出見命）のもの。この歌の「鴨着く島」が訛って「肝属・肝付」になったのだと云われて来ました。肝属の方の郷土史では「鴨着く島」が肝属の語源だと云われて来たのです。

問題にしたいのは鴨着く島に訪ねて行ったことです。山幸が訪ねたのは鴨着く島だ、ということ。もう一つ大事なのは、赤玉というのは串木野が産地なんです。現在は採れないけど昔は赤玉の産地だったと、偶然出会った骨董品屋から聞いた話です。

そうすると赤玉というのがあるから、これは薩摩：南九州の歌になる。南九州から出て行って訪ねた島が豊玉姫とか玉依姫が育った「ワダツミノミヤ」ということになる。

和歌は素戔嗚命が櫛稲田姫を妻として

八雲立つ出雲八重垣妻込めに
　八重垣つくるその八重垣を

が和歌の最初のもの。

二番目の歌は大国主命が越の国に夜這いに行って沼河比売の戸を叩く話。三番目がこれなんです。

一番目は出雲の歌、二番目が越の国の歌、三番目は薩摩・大隅の歌：古代隼人ゆかりの地域と見れば視点が違って来る。此の頃の玉は貝殻の玉で大袈裟な玉ではないと思うのです。魏志倭人伝その他の史料に見られますが中国へ行く使者が持って行くのは真珠と翡翠でした。これは特別なもので、一般的に装身具として用いられた玉は貝殻製品だと思います。

中世の『新猿楽記』には「阿久夜の玉、夜久貝」と記されます。阿久夜の玉とは阿古屋貝に含まれている真珠のこと。夜久貝とは夜光貝。そうすると玉の産地は南の島々だとの見当が付く。

入来院　珊瑚は考えられませんか。

平田　珊瑚は白く見えますか。

入来院　少し赤味がかっている。

平田　赤でしょう（後記：白く見える珊瑚も多い）。また国語学者は「よのことごと」を次のように解釈しています。「鴨着く島に訪ねて行って、契りを交わした貴女のことは忘れないよ。この世が終りになるまで、一生忘れないよ」と。こういう解釈もあります。「よのことごとに」を、「夜になると貴女のことを思い出す」とするのです。これは情ない。この世が終るまで貴女をわすれませんよとは何ということですか。夜ごと夜ごと貴女のことを思っている、と。情ない男。

私は次のように考えます。日本書紀一書にある「よのことごとも」と見て、夜のことは二人だけの秘密で、私と貴女しか知らないのです。過ごした夜のこと、二人の睦言は一生

忘れないよ、とする歌がすばらしいと思う。私なら、そのような歌を作る。それは兎も角としても、南の国の歌であることがはっきりして来た。

内之浦は鹿児島県本土では唯一シラスが積もっていない所です。他は皆シラス地形。そんなことでも特色がある。

金貨と文書の実物を見ることが出来ると思って出掛けましたが、写真しかありませんでした。鹿児島の家にあるとのことでした。そのうち写真を撮らせてもらうつもりです。

西田　川上タケルをやっつけたのは、日本武命？

平田　よくは憶えていません。どっちかです。川上タケルを討ったのは日本武命（古事記）、クマスタケルを討ったのは景行天皇（日本書紀）。

西田　景行天皇ですか。

平田　景行天皇は日向国高屋宮に行在所を設けて市乾鹿文と市乾文姉妹を召してクマソタケルを討ったと日本書紀にあります。日本書紀記載の景行天皇行幸経路は、高屋宮→子湯県（西都市）→夷守（小林市）→熊県（人吉市）→水嶋→八代県（八代市）、以下省略しますが、内之浦の高屋宮から児湯へ引き返した形になりますが、海路内之浦へ来て肝属川流域のクマソタケルを討ったと考えれば筋は通ります。子湯県に拠点を構えてクマソを討ったとなると少々離れ過ぎ。討伐軍の前線基地としては内之浦がよいだろう。薩摩半島の加世田にも鷹屋（竹屋）がありますが子湯県同様離れています。そういうことで内陸部の溝辺に景行天皇が行宮を設けたとは考えられない。もう少し時代が下れば考えられないことはないが。

西田　そういう状況の中で、溝辺が派手に動けない理由がありますか。

平田　明治の初めに稲積城のことが知られていたら考え方が違ったと思います。稲積城は謎の古代の城ですから。稲積城が前面に出て来た場合、不確かな高屋山上陵よりも歴史的な重みが出て来ると思います。稲積城は古代の隼人を制圧するための城ですから。

久米　古代官道や古代隼人のことが、段々明らかになって来るので興味深いものを感じます。古い時代のものと新しい時代のものを比べて見る一つのヒントになります。大隅国府から大宰府への道は、それがヒントになり明治の自由民権運動の広がりと重なります。

もう一つ大島支配のことについて興味があり史実をご指摘頂ければと思います。稲積城の存在については溝辺を新しい視点で見ることになったのですが、何らかの保存をはかるためにも形式的な動きが必要ではないでしょうか。地名とか考古とか民俗からのアプローチも必要ではないでしょうか。

平田　昔、溝辺は溝部と書くことがありました。溝辺に変わるのは島津に負けた後だと見ています。情報の出所は云えませんが、溝辺の高屋山上陵には神護石がめぐっているとのことです。神護石は７世紀後半に築かれた朝鮮式山城とみるのが、現在の考古学の常識です。稲積城は７世紀後半～７世紀末の山城ですから、時代的に合います。

入来院　矢吹先生の新しい本が出されています。『封建制比較論』の中には島津忠久の生い立ちがあります。見て下さい。

平田　ちょっと休憩して後半は「西南之役を顧みて」のプリントを叩き台として意見の交換をしたいと思います。

西南之役を顧みる

戦艦大和の沈没海域

平田　はじめに今日配った資料を説明します。二見先生が会長をされている鹿児島県文化協会の会報に私が寄稿した「戦艦大和の沈没海域」のコピーを入れておきました。前回の例会で概略説明しましたが、それをより具体的に書いたものです。

征韓論と遣韓論

平田　それと今日の討論の柱が必要と考え今朝起きてから「西南之役を顧みて」をばたばたと書きました。これを書く必要を感じたのは一昨日、３月２日の新聞に知事の名で教科書会社に「征韓論ではない、遣韓論というのを書け」との記事があったからです。あれは県議会で質問があってそのように答えたのでしょうが、鹿児島県在住の郷土史家は大部分が遣韓論説に傾いている現実があるからと思います。

以前、私はこれについて一人反論したことがあります。また定年で教師を辞める平成３年３月末付で「遣韓論説の問題点」という論文を鹿児島史学に書いています。その論点は一向に変っていません。

征韓論問題の同時代史料は、征韓論とはっきり書いております。同時代史料として三つ出しました。①麑島改葬碑はすぐそばにあります。西郷さんの墓の前、向かって左側の方に大きな石碑があります。明治16年に征韓論者であった外務卿の副島種臣が書いたものです。漢文ですが「自余及西郷氏征韓之議上、終與大久保氏論相背馳」と書いてあります。「征韓之議」とはっきり書いてあるので私はこれを楯にとって遣韓論という言い方はないと主張したのです。②一昨年あたりから知られるようになって来たのですが大分県の人達が西南之役研究をやっています。その機関紙に野村忍介の懐古録が掲載されています。これは明治15年のものです。野村忍介も西南戦争の原因は征韓論だと書いているのです。③最も隔たっているのは最近貰って気が付いた「桐野利秋梦物語」。上町で出版業をしていた橋内峻氏、七高の先輩でもあるのですが彼の外祖父が実は大物なんです。西南戦争で小倉14聯隊（乃木少佐指揮）の聯隊旗が奪われる事件が起きます。岩切正九郎という人物が河原林少尉を斬ったことになっているのですが、岩切正九郎と橋口峻の先祖：綾部直景が碁を打ちながら、こんな話をしているのを孫たちは聞いているのです。岩切正九郎が綾部に向かって「わいが余計なもんをおいせえ持たすっもんじゃっで、おや、せしこたが」と、裁判所でさんざんとっちめられたというのです。ということは斬ったのは綾部で聯隊旗を奪って来た。それを岩切正九郎にこれを持っておけと云ったから「おや、せしこた」ということになる。これを突っ込んで行けば連隊旗を奪ったのは橋口峻の祖父だったことになる。西南戦争というのはまだ突っ込みが足らないということになる。

この本の中に写真版で１ﾍﾟｰｼﾞずつ並べてあり、写真なので黒くなっているのです。長い間写真を読む人がほとんどいなかったのでしょう。読んでみたら凄いことが書いてあるのです。明治８年11月の日付で「桐野利秋梦物語」という題が付けられたものです。石川県の士族二人が前年（去年）：明治７年に鹿児島にやって来て、征韓論であなた達が辞めて来た経緯はどうだったのかとの問いかけに対して詳しく説明しているのです。征韓論とはこういうものだったと記録しているのですから、同時代史料からは「征韓論」と云わざるを得ないのです。

「遣韓論」というのは黎明館が出来た時に鹿児島の歴史家たちは皆気付いたのです。黎明館では展示説明を全部遣韓論としてあったのです。あれは何だという話になった。

調べて行くうちに大坂市立大学の毛利敏彦教授が「明治６年の政変 ── 征韓論はなかった」という論文を書いていることが判りました。そこで私は「遣韓論説の問題点」の抜刷を毛利氏に送ったのです。「先生は遣韓論ということを述べておられますが、どういうことでしょうか。ご意見をお聞かせ下さい」と手紙を出したのです。そうしたら「私は一度も遣韓論ということを述べたことはありません」と手紙：返事が来たのです。

未だに誰が「遣韓論」を言い始めたのか判りません。そういう状況の中で県や議会が取りあげて鹿児島県の子供たちの教育によくないということで出て来たのが一昨日の新聞記事だったと思います。

レジュメをご覧になって征韓論・遣韓論についての意見、西南戦争の原因など気付いたことを何でも結構です。出して下さい。

久米　昭和49年頃、南洲顕彰館が出来たと思うのですが、その頃山田先生はどうでしたか？

平田　山田先生はまだ高校の教師でした。

久米　私は家が下龍尾町にあったので高校の３年間、よく南洲墓地を通りました。私の先祖が西南戦争で一人は戦死、一人は傷ついています。そういうことで関心がありました。その頃、征韓論から遣韓論という表現に変わったようです。

西郷さんは征韓論ということで、韓を征することを考えておられたと思いこんでいました。卒業してからですから昭和55年頃だったと思います。南洲神社を通った時「征韓論」の所が朱で「遣韓論」と書いてあったので、それを見てびっくりしました。それまで教えられて来たことが、何故こういうふうに急に流れが変るのか。世界が変ると歴史の見方が変り、アッピールの仕方が変るのか。歴史は左からも右からもどこからも変えられてはならない。それを後世から判断して子供たちに教えて行くのが鉄則だ。

当時の鹿児島市長勝目氏が今は西郷さんを崇拝して担いで行くと云っていた。そういう中で大久保さんは隅っこに追いやられ評価されていなかった。そういう時流というか、そのような含みを以て進めると、遣韓論という表現は韓国との仲が民間同志でもよくなるし韓国の方々も征韓論より遣韓論という表現を好まれる。遣韓論という解釈は何故出て来たか。両国の友好を考えると意図的な面も感じられるし、自分たちの視点を見つめる必要も感じられる。

西郷隆盛の意図

内山　私は市民レベルでの理解です。征韓論というのは、あったかどうかわかりませんけども、事実として西郷さんが征韓論を唱えなかったことは認められている。要するに、朝鮮に行って国交を樹立する話し合いをしたいとの主張をした、と。その話し合いの後に

軍隊を派遣すると主張したと教わった。それは事実でしょうか。

平田　それは事実です。どういうことかというと、明治新政府が出来たことを告げる国書を出したが、朝鮮側が従来のものと形式が違うと云って受け付けなかった。それが無礼とのことで征韓論が起こって来るのです。当然武力討伐云々の話も出て来ます。そういう中で、先ず全権公使を送って相手の非礼を糾弾して国交樹立に努力するのが筋だ。そのために自分が全権公使となって行きたい。危害を加えられ殺されたりしたら、戦争の理由が成り立つ、と。明治40年代の終りに作られた西南戦争をまとめた本『西南記伝』があります。これは頭山満が中心だった黒龍会が作ったものです。その中にそのように書いてあります。そしてそのような流れを踏まえた上で征韓論者の筆頭は西郷隆盛だとの評価をしています。『西南記伝』は、まず使いとして行く。危害を加えられたら戦争の理由が出来ると。使いに行くということを主張したのだがやはり西郷隆盛を征韓論者の第一と云わざるを得ないと評価しているのです。

現在は征韓論者の筆頭という評価を消して使いに行くんだということだけを強調しているのです。

内山　西郷さんが事態の収拾をはかれたかどうかは解釈の分かれるところですけれども西郷さんだったら行くことによって日本と朝鮮の国交回復がはかれたのではないか。要するに清と朝鮮と日本が同盟を結んでロシアに対抗しようとする意図はあったのではないでしょうか。

平田　それは、あった。というよりはそれは斉彬路線です。西郷さんはそれを実現しようとした。桐野利秋などは今を逃したら軍隊を出すチャンスはない、と云っていた。

内山　満洲を開拓してロシアの南下を食い止めようとの考えがあった、と。

平田　結局ね、ヨーロッパ勢力がアシアを植民地化しようとしている。それに対抗するには今しかない、と。それが征韓論として表れた西郷や桐野たちの主張だった。

内山　それがロシアを意識したものかどうかは知りませんが、大久保以下政府保守派：反西郷派は西郷は征韓論者で出掛けて行って必ず死ぬ、と。そして戦争が起きると考えていた。戦争をするとの雰囲気はどうだったのでしょうか。そのような国力ではないと反対したのでしょうか。西郷さんはあくまでも情誼を尽くして朝鮮と友好関係を結ぼうという考え方ではなかったのでしょうか。

平田　それは理想論を云っているのであって、現実に西郷さんが行って、そういう交渉がまとまるか、というと。

内山　そこが解釈の分かれ目になるのですけど。私は西郷さんの人となりから誠実に話をもちかけ、人質となって戦争を起こすということを考える人だったのか、と思う。

平田　それは事実だろうけれども、『日本右翼史』という本を見ると「西郷が日本右翼の源流だ」とはっきり書かれている。『日本右翼史』は２冊ほどあるけど、どれも西郷が日本右翼の源流としている。

内山　それは後でそういう書き方になるでしょう。西郷さんがどうのこうのと評価されることであって。

平田　生き残った人たちも、右翼を育てているのです。

内山　そんな人たちだけでなく、西南戦争

には民権派も加わっています。宮崎八郎とか島津啓次郎とか。

平田　それと九州の不平士族は大体加わっている。

浜田　当時西郷さんを担ぎ出した人々、食うに困った人々が主張したのは征韓論だったと思う。今の平和ボケで歴史観が違うので、その当時を想像して遣韓論というのは不毛の歴史だ。実証歴史学上で云えば、そんなことは云わんでいいのです。両方いいのじゃないでしょうか。というのは、私は鹿児島の明治初年の社会情勢には入っていけない。今から歴史を振り返って、その当時は封建制の延長だと云って征韓論あるいは遣韓論をけんけんがくがく言い合っても不毛の議論だ。だから私はどっちでもいいのです。

入来院　私は、西郷が怒ったのは大久保が決まったことをひっくり返したやり方じゃないかと思います。

浜田　そう。大久保がその時にどういうふうにして動かしたかということが大事だ。西郷は俺は朝鮮征伐に行くというはっきりした意志の表示はしなかったと思う。遣韓論・征韓論という議論は両方とも類推ですよ。

自信過剰の薩摩

二見　レジュメの中で(3)の４。これにはいろんな意味があると思うのですが、その中身を教えて頂きたい。

平田　島津斉彬が天保山で訓練をやったのは率兵上京の意志があったからです。しかし倒れたので、その後を久光が率いて行くことになります。そして幕政改革に口を出して、一応成功する。その次に薩摩で出て行くのは蛤御門の変になります。忠義が率いて宮中を守った。その後、戊辰戦争で西郷たちが東北まで出掛けるわけですが早々に片づいたので帰って来ます。幕末・明治初めの動乱期に、三度成功しているのです。

今度は、わい達が順番じゃ、行け、ということで13,500も出て行くのです。これはすっぱいごっとい（動員可能な者はすべて全部）かき集めて出て行った。これだけ集めて行けば武力クーデターは成功すると思っていたのに熊本城でくい止められた。それが誤算だった。

武士の世の終り

上野　全然別のことを考えているのですが西南戦争にからめて話をします。先日テレビで「柳生十兵衛」というを面白いので見ました。島原の乱をテーマにした番組でした。島原の乱で武士は抵抗する術を失った。キリシタンの乱に武士も参加していますから。反乱というものはあれ以後はない。由比正雪の乱がありますが、子供だましみたいなものですから問題になりません。

そのように見て行くとその次の反乱というのは西南戦争です。西南戦争はもう武士の世の終りです。島原の乱と西南戦争は同じ九州で起きているけれども、両方とも時代を画する役目を果たしたのではないか。島原の乱をキリスト教徒の乱と私も教えて来たけれどもあれは基本的には時代を画する出来事だ。西南戦争も武士の世が終るということを念頭に置けば起こるべくして起きたし、こんな見方をすれば叱られるかも知れないけども、大久保と西郷は意外と組んでいたのではないか（笑い）。薩摩の不平武士どもをあすこで全滅さすれば大久保はやりやすくなる。そんな狙いはなかったのかな。地下でつながっていたのではないか、と。あの二人は親友です

からね。どこかでつながっていたのではないか。幕末の二人は蒸気船を利用して、西郷が京都にいる時は大久保は鹿児島なんですよ。いつも交替するのです。蒸気船だと1週間もすれば京都に着きますから。1週間したら西郷は京都、大久保は鹿児島となると、京都の連中は動きがとれない。あれが2か月も掛かって来るとなると、その間に野郎どもは何をするか判らない。

西南戦争で武士の時代は終ったと考えるとあれは起こるべくして起きたし、あれが起きないと前に進まなかった。私はそう思う。

朝鮮側から見た無礼な国書

川野　日本からの国書に対して朝鮮側の態度が無礼だとのことで征韓論が登場したとのことですが、それに関わることで吉田松陰の弟子たちが書いたものを以前見たことがあります。朝鮮・中国でヨーロッパの進出をくい止める。それが明治以降の日本の大陸政策になった。吉田松陰の弟子たちが、そのままの考え方でやったのだというふうに理解出来ます。江戸時代は朝鮮と日本はものすごく仲が良かった。友好的な交際をしていたのです。朝鮮からは通信使が来ますし、日本の方からも釜山の倭館で好意的な交易が出来た。あれを見たら、友好的な交際であったのを日本の方が明治になってからひっくり返しているのです。

無礼な手紙というのは向こうから云えば、従来友好的であったものが日本が政策を変えて見下す態度に変った。朝鮮に対する政策を転換したのは、おかしいのじゃないかと受けとめた。それを日本が利用して百八十度外交姿勢を変え強圧的な政策で朝鮮を支配しようとしたことから問題は起こって来たのです。明治政府はそのような両国のずれを利用して朝鮮に接しようとしたし、台湾問題でも中国に大久保が出掛けたのではないでしょうか。それが後の朝鮮や中国に進出する大陸政策につながったのではないかと思います。西南戦争の契機となったいわゆる征韓論は江戸時代の政策を転換するものであった。明治になって大陸を押さえて行く政策に転換しますが、その根拠地を朝鮮に求めることにつながると考えます。

平田　なるほどね。

川野　無礼な国書の内容について何か史料はないでしょうか。

平田　無礼というのは朝鮮が従来の形式と異なると云って受け付けなかったこと。それが無礼だ、と。その無礼を糺しに行けという主張です。

川野　その無礼というのが。

平田　日本から見た無礼です。

川野　向うから云う日本の政策はおかしいとの見方はないのですか。

浜田　朝鮮通信使を厚遇したやり方は徳川幕府の姿勢だった。明治新政府は徳川幕府とは異なる天皇親政の政府だということを知らせようとした。

上野　当時朝鮮は清の支配下にあったわけです。完璧ではないけど、清の方から見れば自分の支配下の国との考えがあった。それは沖縄の場合も当てはまります。清から見れば沖縄だって自分の支配下の国との発想はあったわけです。朝鮮に向かうということは清に抵抗して行くという路線、今弱っているからチャンスとの意図がなかったとは云えない。というのは台湾出兵をやっているわけですから、あれは明らかに中国に対する挑戦です。

そこら辺から考えると西郷なんかも清というアジアの大物を念頭に置いて考えていたのではないでしょうか。朝鮮というミクロな問題ではない。

浜田　台湾の問題は琉球漁民の漂着から事が始まって行く。台湾土着民による漂着者の虐殺への抗議。大久保は清と交渉して50万両の賠償金を取ったが、これは実際は殺された漁民に対する弔慰金。清と交渉しながら沖縄県民の救済をはかった。交渉中、清が俺の方は関係ないと云うたから西郷従道は台湾を攻めた。その後、日清戦争に勝って台湾を取ったのです。

今考えると、日本の体制の違いがアジアの国々に対する外交政策を変えたのであって、その最初が朝鮮の扱いだった。朝鮮側も徳川政府に対するやり方と天皇政府への対処が違った。朝鮮との関係は経済的な問題がからんでいた。

平田　経済的な問題とはどういうことですか。開国して経済が混乱していること？

浜田　外国から安い品物が入って来るだけでなく、開放的なものの考え方が入って来ていろいろととまどった。そんな考え方もあったのです。朝鮮はなまいきだということの発端は政治の問題、経済的な問題とからんでいた。他に台湾の問題、大きな清との問題がありますから、そういう時代に相手の国に行くことを考えると征韓論は海外進出論だった。西郷は俺は絶対に戦争をしないのだ、平和主義者なんだと云えば、他は皆戦争論者です。明治の初めは戦争続きで戦争を考えるのが当然。昭和10年代もほとんど全部が戦争ばかりを考えていた。

西郷と大久保の違い

久米　先程話が出た西郷と大久保の考え方の違いについて考えていることがあります。幕末に薩摩が斉彬と久光の後を継いで集成館事業を推進しますが、開成所創設もその一つです。斉彬路線と云うたら、富国強兵・殖産興業の推進ですが、斉彬の方針を西郷と大久保は全然違った形で理解している。大久保にとっては西郷の征韓路線を進めることで日本の国を戦争に導くことは当時の国力では考えられない。西郷のように武力闘争で行けば、日本は沈没する。大久保はそういう視点から断腸の思いで西郷に反対した。鹿児島に帰って頭を冷やせと云ったと思う。西郷は田舎者で人間的には愛せるのですが、欧米やシナを向こうに回して方向転換をする日本の進路は西郷には見えない。幕末以来、攘夷か開国かで大きく対立するのですが、攘夷的なものが西郷であって開国的な考え方を大久保は持っていたという考えなんです。

要は征韓論が本筋であって、遣韓論なんていう甘っちょろい考えを西郷さんにもって来られると困るのです。西郷はやはり武闘派の人間であり、武闘を通して事態を解決する。右翼というよりも、西郷の精神に流れているものは三回死に目に遭っていますから、死に対しては弱い。

しかし、最終的には熊本の農民一揆と合流することが出来なかった。民衆側も彼を保守派と見ていた。西郷は「さむらい」であって一揆に参加出来なかった。農民たちと共に歩むことが出来なかったことが疑問に思われることなんです。武士の精神を維持したことから見ればやはり薩摩では民衆を支配する立場の存在であった。

西郷一辺倒でない鹿児島

西田　私は征韓論について云いたくないのです。敗北の原因として先程指摘された城下士と麓郷士との対立。それもですけど城下士の中でも上級士族と下級士族の対立問題がやはり底流にあったと思うのです。それから昔の殿様：久光様はまだ現に存在していたわけですから、そん辺が背景にあって城下士の中でも上級士族あるいはそれに近い層は消極的な参加でしかなかった。

平田　あんまり動いていない。

西田　それともう一つ、田舎士族でも入来みたいな私領地や直轄地の麓士族の中では、比較的城下士に近い高持の者、ある程度の者は消極的だったと聞いている。私の祖父たちも二人ぐらい十代で西南戦争に参加してますけど二人とも逃げ帰って生き残っています。そのうちの一人なんかは戦争が終ったら警視庁に入っている。そして降伏した連中も連れて行って巡査にしている。また西南戦争では警視庁巡査で官軍側に付いて戦後、警部補や警部になった者もいた。

こんなことを云ったら叱られるけど、もう一つ、警視庁巡査で行った連中が二十人ぐらい、西南戦争の前にスパイとして帰って来ているのですね。うちの弟の曾祖父なんかは、伊集院で団長だった。出水の上級士族なんかもそれに加わっている。そういう意味で県下全部協調の姿勢ではなかった。これはもう具体的な事実です。

また、薩軍に殺された所の婆ちゃんたちは80～90才で死ぬまで西郷さんを怨んでいた。そういう話を私は聞いている。決して、西郷一辺倒の鹿児島ではなかった。とくに城下士の場合も草牟田辺りの櫛を作ったり傘張りをしていた百姓とあまり変らない武士達は参加したかも知れないが、上級士族はあまり動かなかった。下級士族が牛耳った鹿児島県政とは一体感がなかったのだろう。むしろ久光や忠義の生き方を横目で見ながら大勢に応じたのが一般だった。

平田　西郷を怨んでいたという声はだいぶあります。それが表面に出て来ないのです。

西田　それが出て来ない。私なんかだいぶ聞いている。

平田　鹿児島生まれの歴史家として、それらを拾い上げていかなければならないと思うのです。それともう一つ、鹿児島県に来ている歴史の先生は西南戦争に嘴を入れたくないのです。皆、怖いのです。私が習った先生はあんたのご先祖は西南戦争に行っていないでしょうねと確かめるのです。そんなのを心配されずともよいと云うと、初めて本当のことを云われるのです。西南戦争を論評することは鹿児島では怖いとの風潮がある。

久米　私なんかは客観的に眺めることが大事だと思うので、そうかなと自然に受け止めるのです。先祖の墓があるのだから。

上野　私も曾祖父が十何歳かで出てます。残されて系図に宮崎不土野の戦で敗れて帰郷したと書いてある。

平田　不土野だろう。

上野　不土野じゃないかとおもうのですが不土野と書いてあります。で、帰って来た。ところが叔父と話していたら、お前の曾祖父さんは立ち上がったとたんに捕まって官軍に連れて行かれたたっど、と。系図に書いてあるのとは違う。私は書かれているのを信じるのですが現実に叔父は確かに聞いたというのです。私は幼児だったので聞いてもいないのです。われわれは現在ある文書で書かれたもので知っているけれども実際はそうでない部分が相当あって、それはまだ本になっていない。それを本にしたら、滅茶苦茶な展開になるのではないか。きれいに作られた歴史、書かれた歴史は危ない。きれいに作られているわけです。そこから中を見ていかなければ。そこに流れると遣韓論になってしまう。私はやはりあれは征韓論が正しい。征韓論を云ったからと云って西郷さんを尊敬せんとかは関係なくて、事実どうであったかということの方が大事。

西南戦争とマスコミ

入来院　西郷暗殺団の一人として捕まった柏田盛文のことを研究して、発表したことがあります。『大久保利通伝』を詳しく読んで行くと、何と言ったらよいのでしょうか、自信過剰というのは西郷さんじゃなくて、下士官というか私学校の中堅幹部、その連中ですよ。その連中を煽ててる新聞があって、それを調べて行くと、どこにつながっているかというのが判らないような気がするの。すごく煽てている新聞がありますよ、辺見十郎太など血の気の多い連中を煽てた。それで立たざるを得ないような雰囲気を作った。それでつぶされた面もあるんじゃないかと思うのね。

上野　西郷は宮崎で汽船で運んで来る新聞を毎日見ていたという話です。

平田　国中の情勢を知っていたというの？

上野　永井村を逃げる時全部焼いたと云います。新聞を見ていたということは、誰かがどこかで立ち上がったのじゃないか、と。

平田　それを期待していた。

上野　期待していたのじゃないですかね。

多く死なせれば英雄

川野　南洲神社の銅板と田原坂公園の官軍・薩軍の戦死者名板を見ると、戦死者の多さに驚きます。あんなのを見たり西郷の伝記を見たりすると西郷が英雄みたいになっているのですが、指導者として沢山の若者を死なせた。死なせた人が英雄として尊敬されるのかと疑問を感じます。その後もそうです。私の周囲にもこの前の戦争で主人を亡くした人は沢山います。その人たちは寂しい生活をしています。ものすごい戦死者を出した最高指導者が英雄視され美化される。日本の英雄観のはしりみたいなものが西南戦争辺りにあるのではないかと思います。多くを死なせた人、そういう指導者というのは良い指導者ではないのではないか。若い人たちを生かして次の時代を担わせる指導者だったらいいけれどもそうでない人たちが美化されるということはやはりおかしい。

今日配られた戦艦大和の沈没海域のコピーの一番最後のところに「戦争を知らない世代で憲法改正を口にする人たちが増えて来た」とあります。多くの若者たちを死なせた人達が美化される考え方が西南戦争でもそれ以後の戦争でも見られます。その考え方が現在の日本の指導者にも見られ、僕よりも若い総理大臣でさえその姿勢が見られます。

また若い連中も何となくあきらめている。死んで国家が育つという仕組みはおかしいと思います。戦争で働き手を失った人たちを眼の前で見ていると暗い気持になります。

上野　日露戦争の時、乃木将軍が二〇三高地を攻めるのに物凄い非難を受けています。日本軍の決死隊は黒い軍服の上に白いタスキを掛けて行くのです。ロシア軍から見ると、目立ってねらい易い。新兵器だった機関銃のよい標的になった。ロシア側はこう云ってい

た。日本の馬鹿な将軍が出した命令のお陰でわれわれは楽をした、と。それともう一つ、乃木将軍は最後に自決します。そして明治が終る。聞いたところでは西南戦争で聯隊旗を奪われ、その責任を取った、と。

平田　切腹の作法では追い腹は斜めに、詰め腹は横に切るらしい。乃木大将はその両方で2回切ったという。いわゆる聯隊旗事件の責任と殉死の切腹。旅順攻撃に多数の戦死者を出した罪滅ぼしの意味も込めて、斜めと横に二回切ったと云われています。相当気丈な人だったと思うけど。

敗戦後の後始末

平田　時間が残り少なくなりました。話したいことはまだ沢山あると思います。私は西南戦争の薩軍戦死者一人一人のカードを作成しています。相当数洩れていることに気付きました。戦争に負けたら、後始末はほとんどなされていない。熊本県立図書館でいろんな史料があることを知って、鹿児島県でも県庁の命令で、誰が征ったか、誰が戦死したか、誰が傷ついたかの調査がなされたはずだと気付きました。明治10年、11年の段階で調査が行われたはずです。それがほとんど残っていないのです。だから生き残った人たちの家に埋もれている可能性があると思います。戦死者や傷ついた人のリストアップも必要と考えています。

それと同じようなことが第二次大戦にも云えます。鹿児島の若者は硫黄島で相当数死んでいます。145聯隊という名の下に。その後始末もついていないのです。敗戦の後始末がなされず有耶無耶のうちに歴史が繰り返されるのかなと感じます。

実は一月ほど前、菱刈に行きました。古代の大水駅を探しに行ったのです。成果は南日本新聞で紹介しました。その帰途、湯之尾で西南之役招魂碑をメモしました。菱刈町史には名前しか書いてないのですが、招魂碑にはどこで戦死、何歳まで書いてあるのです。それをメモしていたら一人の人物が来て拝み始めたのです。遺族の方ですかと話しかけたら一番最後に書いてある夫卒：荷物担ぎの人の子孫でした。その時初めて夫卒（ぶそつ）と読むのだなと気付きました。何をされているのですかとの問いかけに、戦死者が相当数洩れていると思うので、このような招魂碑を調べていると云ったら私の曾祖父は夫卒でした、と。どこで戦死したかというと、隣の町大口で戦死しているのです。そして私の家は薩軍のために焼かれました。薩軍はそんなことをしたのですね、という。私がそういうことを調べているから本音を語ったと思うのです。

これとは別に菱刈町で聞いた話。薩軍に斬られた有名な有村隼治夫妻がいます。夫人は出水から嫁いで来たスマさんという方で薙刀の達人だったけれども、雨傘一本ではどうにもならず大口の若者たちに取り囲まれて殺されます。どういう評価をされているかというと、有村隼治は農民たちと共に用水路を造ったり水田開発に励む人物だった。そういう話をするのです。斬られた人達も見直す必要がある。これは鹿児島生まれの歴史家の任務だと思います。

他県の人は鹿児島閥に取り入ろうとして、すぐ薩摩西郷どんで持ち上げる。鹿児島の若者や子供たちを見て、ちょっと太ったのは今でもＮＨＫのアナウンサーが薩摩西郷どんの生まれ変わりだと云っている（笑い）。

上野　私も西郷さんの最後の一日に関心があって郷土史を見ます。大体、どの郷土史も県史と似たようもの。郷土史には今日出たような話は全然出て来ないのです。不都合だから載せないのか、勉強が足らんのか。

平田　勉強が足らんのよりも、そういう雰囲気にあるのが実態です。

二見　戦争の後始末ということになれば、硫黄島をはじめいろんな所で戦死した人を当時の人がお金を出して墓石に刻んでいたのです。それが最近の納骨堂ブームで地下に埋もれてしまった。もう一度掘り起こしてみようかなと思うぐらいです。

私の従兄なんかは８月15日死亡になっています。こんなのはあり得ないのではないか。どこで死んだのか、遺族も判らないのです。お婆ちゃんはずーっとそれを嘆いています。親戚の者も文字が一つ間違ったまま一応載せてありますが、どんな死に方をしたのだろうかと、やはり思います。戦争の後始末というのは本格的にやらないといけない。硫黄島だけでなく。

浜田　征韓論は韓国とのせめぎ合いとも関係して来る中で教科書の問題になっている。鹿児島県民は恐らく征韓論よりも遣韓論に傾きがちになると思う。

平田　あのね、あの当時、韓国という国はないのです。朝鮮国だった。征韓論も遣韓論も鹿児島語で云えば「けなぶった：軽蔑の」表現なんです。

浜田　朝鮮という国はやっぱり、うるさかですよ。

平田　その感覚が問題なんだ（笑い）。

浜田　それは当たり前ですよ。というのは当時の世界市場は、台湾から千島、アリューシャンそれからヨーロッパまでずーっとあったわけですから。そんな中で云うことがうるさい。

上野　今本音が出ているけれども、今までそんなのは全く見たことがない。むしろ尊敬の念はあった。琉球に対してもそうです。島津が出す書状もそんな「けなぶった」ものはない。むしろ尊敬して交際していた。だけども明治以降、姿勢が変った。

平田　けなぶった感覚は植民地支配を通して身について来た。

靖国神社との関連

西田　そうですね。最後に一言。今や靖国問題が渦巻いているのですけど、これだけははっきり云って置きたい。靖国神社に最初祀られた人達は官軍の人達だけであって、賊軍となった薩摩の人は一人も入っていない。今は、け死んもせんかった過去の人まで祀られている靖国神社です。それが一つ。

西郷さんは一応賊軍の大将でもちろん靖国神社に祀られなかったのですけど、後で西郷さんの遺族は西南戦争前の功績が評価されて侯爵になりました。しかし西郷さんに付いて行った鹿児島の純粋な人たち、その中には村田新八などすばらしい人もいたと思うのですけど、あの人たちは未だに靖国神社に合祀しようという声は出て来ません。靖国問題が出て来ると、鹿児島の者は靖国神社に入っておらん。薩摩から祀れというのですけど皆はそれを云わない。靖国神社にも護国神社にも入っていませんよね。鹿児島の護国神社にも賊軍の皆さんは入っていませんよ。われわれの祖父さんや親類は、ほとんどいません。

平田　判りました。いろいろありますね。これじゃまだ話が足りませんね。一つの踏み台にはなったでしょう。

西南の役を顧みる

2007. 3. 4 (日)

(1) 征韓論争

1. 同時代資料は「征韓論」

① 鹿島改葬碑　　明治16年　副島種臣書

「余および西郷氏が征韓之議をたてまつりしより大久保氏の論と相背馳せり」

② 野村忍介の回顧録　　明治15年

③ 桐野利秋夢物語　　明治8年11月

石川県の士族二人が鹿児島を訪れ桐野利秋に尋ねた事柄の記録 —— 征韓論の~~経緯~~経緯・内容が記述されている。

2. 遣韓論

① 誰が唱えたのか、不明確

② 毛利敏彦『明治6年の政変 —— 征韓論はなかった』

私信で「遣韓論」と云ったことはない、と。

(2) 原因

1. 明治政府の急激な改革 → 不平士族の反乱
2. 下級士族の生活難
3. 21人(23人)の視察団(刺殺団)
4. 私学校徒の火薬庫襲撃

(3) 敗北の因

1. 上級士族・下級士族・麓郷士の身分差
2. 城下士と麓郷士の対立
   部隊編成上の問題点
3. 海軍力なし
4. 度重なる薩藩の率兵上京
   過去すべて成功 —— 自信過剰
5. 兵力不足 + 軽装(熊本の寒さへの無知)
6. 県下すべて私学校に協調する姿勢ではなかった。
7. 資金力不足。

(4). 敗者の屈折感情

1. 戦後処理記録
   ほとんど残存せず
2. 気の利いた薩軍参加者は時流に乗って出世したが、大半はうだつがあがらず、生活苦に追い込まれた。
3. 県外からの官吏・教員・巡査の流入。

(5). 西郷崇拝のひとり歩き。